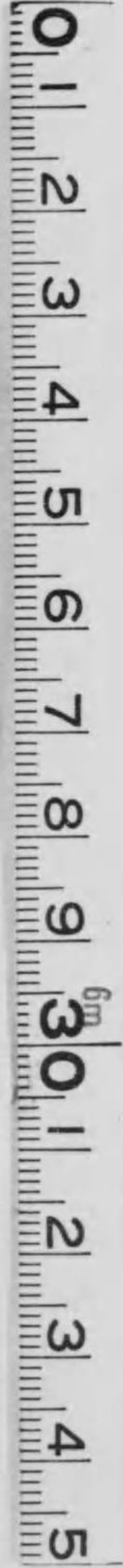


45
316₂



始



26 11 27

故高山林次郎著

樗牛全集
第二卷
文藝及史傳
上

大正
2. 8. 19
購求

明治三十七年

東京博文館

4/341
⑤

45-316



序言

櫻牛全集の第二は故著者が文藝及史傳に關する評論叙述雜論を蒐集す。始め編者等は此等の材料を一括して一冊となし、全集第二卷として刊行するを期したるも、材料を蒐集整理するに従ひ、其が分量の到底一冊に收むべからざるを見、輒ち評論中極めて一時的なる者を除きて、その量を刪減せんと試み、再三刪除を加へし、その量尙多きに過ぎ、文藝評論の植字半ばに達する頃には、如何にしても當初の豫定を實行する能はざるを悟り、茲に全く豫定の第二冊を上下即ち全集の第二及第三の二卷に分つに決定せり。即ち「文藝及史傳」の上卷は主として文藝上の評論及雜論を收め、その下卷は主として史傳に關する材料を收めたり。若し初めよりこの豫算を確定する事を得しならんには、本卷に收めたる『近松巢林子』の一篇は之を下卷に收むべかりしなり。斯くせば本卷をして殆ど千頁に達するの大冊たらしむるを要せざりしなるも、何せよ材料の蒐集極めて困難にして始めより精確の豫算を立て得ざりしが爲に此の如き不首尾を來たしたるは、編者等の遺憾とする

所にして、故著者并に讀者の寛恕を乞はざるべからず。

本巻に收めたる文藝評論の諸文章は主として故著者がその擔當せし『太陽』の評論欄にて公にせし者に係かり、之に少しく仙臺時代の評論と『帝國文學』中學世界『新文藝』等にて公にせし者を加へたり。仙臺時代の評論は故著者が第二高等中學校在學中率先して組織したる文學會の雜誌にて公にせし者にして、この『文學會雜誌』は後に『尙志會雜誌』として今に續刊せり。即ちこの間の評論は明治廿四年六月『文學會雜誌』創刊より同廿六年七月同校卒業の時までの時期に亘るも、その雜誌の現存せる者今日僅に『文學會雜誌』の一號(六月刊行)と三號(廿五年刊行)とあるのみなれば、本巻に收めたる者はこの範圍に過ぎず。若しこの二年間の材料にして完全に保存せられたらんに、は別に之を仙臺時代として一期を劃すべかりしも、材料の不完全の爲めに假に之を第一期の中に編入したり。

『近松巢林子』の研究は故著者が仙臺時代より着手し、明治廿八年の春頃までの研究に係る。その中『巢林子の人生觀』は明治廿八年二月『帝國文學』第二號に、『巢林子の女性』は同廿八年四月同雜誌第四號にて、共に高齋林良の名にて公にし、後再び卅

一年十二月公刊の『時代管見』中に收めたる者なり。又『近松に於ける人物性格』の一篇は『戲曲的人物と近松巢林子』の題名の下に明治廿八年四月『太陽』第四號にて公にせり。その他の章は盡く故著者の稿本の儘にて存し、尙訂正攻究中にありし者即ち全く未定稿に屬する者なり。今その原稿を見るに用紙は東京の罫紙を用ひたれば、廿六年九月以降の述作と稱すべきも、その材料は既に仙臺時代より着手せし者なる事は明かにして本稿は近松研究の第二稿と見るべき者ならん。著者がこの研究の材料に供せしは武藏屋版の活字本にして、この出版は廿三三年頃より逐次發行せられ、廿五年の初めに合本として出でし者なるが、著者の使用せしは合本せざる以前のものなれば、兎に角仙臺時代より著者が此等の活字本を以て研究を始めし事は明かなり。今この研究の裨裁并に緒論中に『本書』云々の句あるを思へば、著者は一本として近松研究を大成するの志ありしは明白にして、その素志は後年迄消滅せざりしなるべく、現に廿八年頃には著者は同級の桑木君とこの事に關して書簡の往復にて議論を上下せし事ありき。然るに著者は大學在學中特に倫理問題の研究に熱中し、その中には廿七八年役の事あり、一般に國家的意識の勃

興したる際、著者はその倫理問題を國民性に基く主義にて解釋せんとし、漸次日本主義の萌芽を養ひし時代となり、終に再び熱心に近松研究を續くるに及ばざりしなり。されば今本巻にて公刊したる稿本は處々朱書の訂正あるも、未だ全軀を整理案排するに及ばずして止みしなり。即ちその論旨の如きも、初めの諸章にては近松を解釋するに沒理想の觀念を以てせんとし、後にその人生觀を論ずるに及びては見處を換え一個の厭世詩人として近松を解釋せり。此の如き矛盾も今はその儘にして公刊せざるべからず。讀者が本研究の來歴に照らしてこの間の消息を諒知せられん事を望む。又本研究には目錄に示したる如く各章の番號あり。その中第十章は「心中論」として稿本存せし事ありしも、その原稿は終に發見せられず、從てその所論今日は知る能はざるも、本卷三八〇頁以下に收めたる「今戸心中」に關する評論にはその片影を残せし者ありと信ず。

その他の文藝評論は主として「太陽」の評論に係かる。今その時期を劃して三となせり。此は單に著者一身の經歷と「太陽」執筆の時期とに従ふ區分なるのみならず、又實に著者が學風思想の上にて自然に三つの時期をなせり。即ち廿八年九

月より廿九年九月に至る第一期は著者の大學在學時代にして、著者が初めて中央の文壇に文藝時評の筆を振ひし時期、又著者が倫理問題と文藝美術の事とを關聯して考察せし時代にして、その評論は主としてこの善美一致觀に基けり。而してこの時期には著者は評論家として多く新刊の小説或は論議に着目しその批評を事としたり。されば新刊書に關する批評はこの間に最も多く、著者が如何に精勵して此等の文書を通讀したりしかを示すに足る者あり、又一面より見れば當時小説界、評論界の史料として趣味ある者多し。然れども此等の評論は寧ろ一時的の時論批評にして、著者の精神的發達には直接重要な材料と稱し難し。今本巻編輯の際削除したるは多く此種の評論にして、その稿一筐を充たすに足る者あるも、後日別に明治文學の史料として之を公刊する迄は暫く全集中より除きたり。

第二期は著者が仙臺より京に歸りし卅年五月よりその留學決定の卅三年七月までにして、この間は即ち主として著者の日本主義時代なり。さればその評論には國民的性情を本として文學を論じ、國民文學を唱導したる者多し。されどその間にも已にフットマンを論ぜしが如き、又時には文學の理想と社會の現實と相容れ

難きを慨したるが如く、後年の信仰時代を豫言する者なきにあらず。

第三期は著者が病の爲に歐洲行を断念して、卅四年一月三度「太陽」の評論を擔當せしより、卅五年十一月その没前一月に亘る一時期なり。この間は數年來醸成し來りし著者の精神的傾向が天才の鼓吹となり、日蓮の崇拜となりし時代にして、その文藝評論は社會全般の文運を觀察し評論するよりは、寧ろ自己精神の要求に基きて社會を叱咤せし時代なり。此を以てこの時期の文章は本卷に收むべき者割合に少くして、「時勢及信仰」の第四卷に收むべき者多きに居る。若し著者の文藝評論を概括して第一期を純客觀の時となし、第二を國民中心の客觀主義と稱すべくんば、この第三期の評論は之を純主觀的と名け得べし。

本卷は大體右に述べたる三期の區分に從ひ、各期毎にその主なる評論を公刊の年代に從て編次し、各期の終りにその間の雜論雜評の類を一括編入したり。用字送り假名の事は全集第一卷に同じ。概するに著者の送り假名はその初期には畧せる者多く、此等は多くその儘に保存し、只その間「彼れ」「彼の」等混同の憂ある處には之を挿入れ、又、其の次に形容詞或は活用言ある場合には、「の」の一字を加へ通讀に便

ならしめたり。後期に近づくに従ひ送り假名は畧せる者少きも、同一論文の中に「彼れ」「彼」を共に「彼れ」の義に用ひたるもあり。此等には皆送り假名を加へたり。圈點は皆之を保存したり。

尙本卷に收めたる評論中「巢林子の女性」の外「詩的の兩面と其利弊」以下數篇の第二期に屬する者は、著者が三十一年末に諸評論を纏めて刊行せし「時代管見」の下篇に收められし者なり。又卅二年の春頃より卅四年六月に至る間の數篇は同月發刊の「文藝評論」中に錄せし者なり。即ちこの二書に收められし者は著者がその發行の時にも多少満足を以て往時の文を收めしを知るべく、その他は當時著者の棄て、敢て惜まざりし所の者なり。編者等は目錄中にその文章を「時」及「文」の字にて區別し置きたり。著者の精神的傾向を觀察せんとする讀者はこの關係に注目せらるべし。

本卷の首に掲げたる肖像は故著者が仙臺高等中學校在學の時の撮影にして、その手蹟としては「近松巢林子」中の一頁を寫真版としたり。卷首の「文藝評論」の文字は即ち曾て同書の表紙たりし者にして、九頁の「近松巢林子」なる表題の文字補

目次

文藝評論

○ 文學及び人生(廿四年六月
『文學會雜誌』所載)……………一

✓ 近松巢林子……………九

- 一 緒論……………一
- 二 批評及び其方法……………二
- 三 戯曲及び之に對する近松の意見……………三一
- 四 近松戯曲の種類及び結構……………四二
- 五 近松戯曲の材料に就て……………五六
- 六 近松に於ける人物性格(二十八年四月
『太陽』所載)……………六六
- 七 巢林子の人生觀(二十八年二月
『帝國文學』所載)……………七九
- 八 (題目本文缺)……………一〇一

九 巢林子の女性(二十八年四月(時)『帝國文學』所載)

- (一) 巢林子が戯曲に於ける「人」……………一〇一
- (二) 女子は如何なるものぞ……………一〇六
- (三) 愛と名譽……………一〇八
- (四) 嫉妬は愛の反面……………一一一
- (五) 『天の綱島』のおさん……………一一五
- (六) 『出世瀧徳』の吾妻……………一二九
- (七) 『槍権三重帷子』のおさい……………一三一
- (八) 『宵庚申』のお千代……………一二六

第一期(明治二十八年九月より二十九年十月まで)

- 運命と悲劇(以下『太陽』所載)(廿八年十一月)……………一三七
- 歴史的精神……………一五一
- 現今の我學術界に於ける歴史的精神の缺乏(二十八年十一月)……………一五一
- 文學研究の好題目(全上)……………一五六
- 歴史的研究とは何ぞや(二十九年二、三月)……………一五九
- 歴史畫と歴史小説(二十九年三月)……………一六四

作家の道念と觀念(以下二十九年二月)

- 現今小説の二大缺點……………一六六
- 紅葉山人……………一六八
- 似て非なる觀念小説……………一七〇
- 小説家の壽命……………一七一
- 作者の性格と著作との關係……………一七二
- 社會的立脚地よりの文學評論……………一七四

詩人と摸倣と天然

- 詩人と摸倣(二十九年二月)……………一七六
- 自然の詩人(全上)……………一七七
- 天然と田舎(二十九年六月)……………一七九

文學と美術(以下二十九年三月)

- 現今の繪畫と現今の小説……………一八一
- 一種異様の改革派としての所謂南派……………一八三
- 南派の危機……………一八五
- 南派の歸依者……………一八九
- 歴史畫の缺乏……………一九〇

宗教画と水彩画と……………一九一

日本西洋兩畫風の折衷(二十九年七月)……………一九三

過去の我國に於ける折衷美術(以下同上)……………一九五

久米氏の日本繪畫談……………一九九

時代の美術……………二〇一

風景畫の統一に就きて……………二〇一

風景畫と小説……………二〇三

文化の關聯(以下二十九年六月)……………二〇五

日本文化の規模……………二〇七

國民的詩人とは何ぞ……………二一四

詩歌と道徳との比較……………二一五

ウオーグワオースとバイロン……………二一七

天才論(二十九年八月)……………二一八

叙事詩と抒情詩(二十九年八月)……………二二八

一 民族的叙事詩と個人的叙事詩と……………二二八

二 叙事詩の歴史的觀察……………二三〇

三 美術史に於ける叙事抒情兩分子の消長……………二三〇

四 客觀的主觀詩……………二三五

何故に叙事詩は出てゐるか(二十九年六月)……………二三七

戯曲に於ける幽霊(二十九年九月)……………二四一

退壇に臨みて吾等の懷抱を白す(二十九年十月)……………二四七

文學會漫評(二十四年六月)……………二九〇

青年文人の厭世觀(以下『太陽』所載)(二十八年七月)……………二七五

武島羽衣の『小夜砧』を評す(全上)……………二七六

演劇界の風潮と劇評家の責任(二十八年八月)……………二八四

美術と道徳(全上)……………二九二

『文學界』の諸君子に寄するの書(二十八年九月)……………二九六

敢て日本美術史の編纂を促す(二十八年十二月)……………三〇三

批評眼(全上)……………三〇六

批評に就て(二十八年十二月).....三〇八

明治廿八年の文學界(二十九年一月).....三一〇

少壯漢學者に告ぐ(全上).....三一八

宗教小説(全上).....三二二

裏面の觀察とは何ぞや(全上).....三二三

女性作家に望む(全上二十九年二月).....三二四

賞鑑家と國民(全上).....三二九

時好と批評家(全上).....三三〇

春の家が『桐一葉』を讀みて(二十九年四月).....三三二

寫生と寫意、意想と畸形(全上).....三四二

大塚文學士を送る(全上).....三四五

今日の新體詩家を警醒す(全上).....三四八

書談一束(全上).....三五二

美學史及び美術史(二十九年五月).....三五五

一葉女史の『たけくらべ』を讀みて(二十九年五月).....三五七

俳句及び狂詩(全上).....三六一

俳句と符號(全上).....三六二

俳句(二十九年六月).....三六三

鑑定家と批評家(二十九年七月).....三六三

鷗外に答ふ(全上).....三六五

一葉女史の『われから』(全上).....三七三

徳富蘇峯君を送る(全上).....三七五

市川新藏(二十九年七月).....三七七

『今戸心中』と情死(二十九年八月).....三八〇

能樂會(全上).....三八五

能樂の性質(全上).....三八六

脚本の批評法(二十九年九月).....三八九

田山花袋の『わすれ水』(全上).....三九二

第二期

(明治三十年六月より明治三十三年七月まで)

我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務(三十年六月).....四〇三

明治の小説(三十年六月).....四一七

第一 序論.....四一七

第二 明治小説の第一期.....四四二

第三 明治小説の第二期.....四五七

所謂社會小説を論ず(三十年七月).....四七七

支那文學の價值(三十年九月).....四八五

春のや主人の『牧の方』を評す(時)(三十年八月).....五〇一

坪内逍遙が『史劇に就いての疑ひ』を讀む(時)(三十年九月).....五二〇

小説革新の時機.....五四六

(非國民的小説を難す)(時)(三十一年三月).....五六〇

曲亭馬琴(時)(三十一年二月).....五六三

詩的の兩面と其利弊(時)(三十一年三月).....五七三

カトライル氏の英雄論の翻譯に就きて(時)(三十一年六月).....五七五

ワルト・ホイトマンを論ず(時)(三十一年五月).....五八五

ホイトマン(再び)(時)(三十一年六月).....六〇一

僞詩人とは何ぞ(時)(全上).....六〇二

文明の裏面(三十二年四月).....六〇三

時代の精神と大文學(三十二年二月).....六〇五

友人某に與へて昨今の文壇を論ずる書(三十二年七月).....六一二

土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書(文)(三十三年二月).....六二七

齋藤綠雨が色道論を讀む(三十一年三月).....六四三

泉鏡花に與ふ(全上).....六四六

『先秦文學』を讀む(全上).....六四九

藤田劍峰を送る(全上).....六五一

文學に對する根本的誤解(三十年七月).....六五三

現今美術家の精神的教育(三十年七月).....六五四
 美術家の絶好題目(三十年八月).....六五六
 歴史を題目とせる美術(全上).....六五七
 佛像陳列の可否如何(全上).....六五八
 閱歴と空想(全上).....六六七
 小説中に顯はれたる現代の女性(全上).....六六三
 徳富蘇峰(三十年九月).....六六四
 市川新藏を惜む(全上).....六六六
 少年演劇に警告す(全上).....六六九
 朦朧體の末路(時)(全上).....六七三
 柳浪の『畜生腹』を讀む(三十年十一月).....六七六
 晚翠の詩(三十年十二月).....六八二
 今の滑稽文字(全上).....六八二
 最も悲しき聲(三十一年三月).....六八四

詩人唱はず(三十一年三月).....六八五
 老人時代(全上).....六八五
 作家自衛法(全上).....六八六
 實在と空想(全上).....六八七
 詩歌の誘惑(全上).....六九〇
 新聞記者の資格(三十一年四月).....六九二
 ビョルンソンとゾラ(全上).....六九九
 たそがれの辭(一葉舟を讀みて)(三十一年七月).....六九八
 『國民の友』を惜む(三十一年九月).....七〇五
 滑稽小説の作者に告ぐ(全上).....七〇七
 自己の修養(全上).....七一〇
 漢文を書き換へよ(全上).....七一一
 民族傳説の蒐集(三十一年十一月).....七一八
 評家及び作家としての不知庵(三十二年六月).....七二二

藝術界の尙古主義(三十二年七月)……………七二六
 詩人と批評家(三十二年九月)……………七二七
 木村鷹太郎君に與ふ(全上)……………七三一
 本邦文章の問題(三十二年十一月)……………七三二
 我國演劇の前途に就いて(三十二年十二月)……………七三六
 明治三十二年に於ける小説界の傾向を論ず(三十三年一月)……………七四三
 一 緒言……………七四三
 二 昨年の小説の大傾向……………七四四
 三 時代精神論……………七四六
 四 小説の社會的傾向……………七五〇
 五 其批評……………七五二
 六 露伴の社會的小説に對する批評……………七五八
 七 結論……………七六一
 澁山人の『日本お伽噺』(三十三年二月)……………七六〇
 言文一致の標準(三十三年六月)……………七六一
 自國の作を讀まざる風(文)(全上)……………七六六

小説の意義(文)(三十三年六月)……………七六七
 少年の文學熱(文)(同上)……………七六八
 煩瑣學風(文)(三十三年七月)……………七六九
 煩瑣學風と文學者(文)(同上)……………七七〇
 人名字書中の文學者(文)(同上)……………七七二
 人の出處進退(同上)……………七七三
 學者と文章(同上)……………七七六
 詹々録(文)(三十二年四月より同七月まで)……………七七九
 無題録(一)(文)(三十二年九月)……………七九六
 同 (一)(文)(三十二年十月)……………八〇二
 同 (二)(文)(三十三年一月)……………八一二
 同 (四)(文)(三十三年四月)……………八一五
第二期(明治三十四年一月より
 同三十五年十一月まで)
 文明批評家としての文學者

(本邦文壇の側面評)(文)(三十四年一月)……………八三三
 姉崎嘲風に與ふる書(文)(三十四年五月)……………八四四
 作文論(中學世界所載)……………八七八
 現代文章私見(中學世界所載)……………八八二
 一 序言……………八八二
 二 雪嶺蘇峰及び矧川……………八八三
 三 政論家の文章……………八八七
 四 逍遙……………八九二
 五 隅外……………八九四
 六 逍遙と隅外……………八九六
 七 青年文學者の文章……………八九七
 八 結論……………九〇一
 嗚呼凡俗改良(三十四年七月)……………九〇三
 笹川臨風が『奈良朝史』の首に書す(三十四年七月)……………九〇六
 『元祿時勢粧を讀む』……………九一〇
 (元祿時代の側面觀)(以下『太陽』所載)(三十四年七月)……………九一〇

土井晚翠を送る(三十四年七月)……………八一五
 大橋乙羽を悼む(同上)……………九二〇
 留學生諸君を送る(三十四年十一月)……………九二〇
 無題錄(三十四年七月より同十二月まで)……………九二三
 三十四年の文藝界(三十五年一月)……………八三〇
 一 吾人の批評は無遠慮也……………八三〇
 二 表紙挿畫は恰好の代表者……………九三一
 三 紅葉露伴を葬れよ……………九三二
 四 悉寫眞の流行の例(天外)……………九三四
 五 進歩せざる新體詩……………九三六
 六 皆無の新著述……………九三九
 七 小兒童の時文評論……………九三九
 八 見るべき論文……………九四〇
 九 断片の事件……………九四一
 文藝雜談(三十五年四月)……………九四三
 一 挿畫……………九四三

二	フレの挿話	九四四
三	人の容貌	九四六
四	文藝は嚴肅	九四七
五	當今の文章	九四八
六	眞正の寫實	九四九
七	例と誤理	九五〇
八	俗學者の滑稽手段	九五〇
九	表	九五二
十	畫家と小説家	九五二
十一	繪卷の寫實	九三三
	雜誌(二十五年一月より同十一月まで)	九五五

目次終

文學及人生

吾人は本論に入るに先ち文學の目的如何を攻究せざる可からず。抑も文學の目的如何。或は曰く文學の要は吾人の氣韻を高くするにあり。或は曰く吾人をして巧妙明晰の詩文を作ることを得せしむるにあり。或は一步を進めて曰く文學の目的とする所は人生を解釋するにあり、吾人は依て以て社會古今の状態を知り得るなりと。吾人は何れか其の當を得たるを知らずと雖ども、若し此等の説をして眞ならしめば、吾人は文學の爲に、其の目的の卑下淺薄なるを悲まずんば、あらざるなり。文學の目的は只氣韻を高くし巧みに詩文を作るに止まらん乎。境域人生の外に出でず。只社會の状態を寫すに止まらん乎。吾人は實に文學を崇ぶ、然れども今や之を擲たざるを得ず、吾人は實に詩歌を愛す、然れども今や之を賤まざるを得ず。吁文學豈斯の如き淺薄狹隘なるものならんや。吾人が半生の精血を瀉して而して尙逐々として怠らざる所以の者は、人世以外更に高尙悠遠なる目的ありて存するを信ずればなり。何ぞや文學は、實に吾人の性行風俗

文學及人生

(1)

を修成するのみならず、此の紛々たる俗界より吾人を扱て直に自然と同化せしむる者なるを信ずればなり。真理と共に其の善を理解し、其の善を理解すると共に其の美を感應する能力を吾人に與ふる者なるを信ずればなり。

文學の目的既に斯の如し。吾人は一步を轉じて、之より文學は人生の上に於て果して幾何の價値を有するかを論ぜん。

試みに問はん、所謂る人生の幸福とは果して何物ぞや。人動もすれば精靈の其の身に宿するを知らず、貧夫は財に徇ひ、誇者は權に死し、茫として生れ茫として終る者世上滔々皆然り。彼の權威を以て其の下を制し、徒に口體耳目の慾を逞ふする者は、是れ人に非ずして寧ろ獸のみ安ぞ以て人生の樂事となすを得んや。彼の泉貨珊瑚を累積し、恬然として飽臥する者は、是れ人たるに非ずして寧ろ器たるのみ安ぞ以て人生の快事となすを得んや。若し獸となり以て足れりとせば、吾人は將に此活々たる精靈を如何せんとするや。蒙昧教ふべからざる輩は、吾人之を知らず、苟も少しく學問智識あるもの三更神を靜めて、一たび人生てふ觀念を起し、引て古來の達人哲士の心事に思ひ到るあらば、設令ひ身は富貴榮華を極むるも、誰か

喟然として自己の理想の卑下なるを慨嘆せざる者あらん。是れ即ち人は其の體を以て生活すると同時に、其の心を以て生活する者なるを證する者に非ずや。真正の幸福は肉體の上にあらずして精神の中に存するを證する者に非ずや。其れ然り、吾人は豚となりて樂まんよりは寧ろ人ととなりて悲まんを欲する者なり。一國の帝王となりて宣室の談に迷はんよりは、寧ろ窮巷の匹夫となりて高尚なる理想を懷て眠らんと欲する者也。若し其の心高尚なる理想を缺き、内に顧みて一點忸怩の思ひあるあらば、世界を擧て之を與ふるも、吾人又何の樂か之れ有らん。然らば則ち何を以て最も高尚なる理想と云ふか。他なし、心塵寰を脱して自然と同化するに在り、眞善美の三者を正當に理解するにあり。是に於てか、吾人は知る。文學は吾人に與ふるに最高尚なる理想的標準を以てする者にして、文學者は世界に於て最も多く眞正の幸福を享受し得る者なるを。

斯の如く高尚なる理想は、吾人に與ふるに安心立命の地盤を以てせりと雖ども、吾人は現に地上に生活する者なるを記憶せざるべからず。若し只理想界に彷徨するのみにして、少しも現生の快樂に與らざれば、其の間自ら慊焉たらざる者ある

を免れざるべし。是に於てか文學は吾人に與ふるに同情同感の靈性を以てし、以て理想界と此の世界とを連結し、吾人の幸福をして圓滿完了ならしむるなり。所謂同情同感とは何ぞや自己の心情を移して他物を付度するを謂ふ、吾人の快樂を感ずる主として此情あるに由るなり。已に同情同感の性を有す、之を以て吾人は春花の綽約たるを見ては深く其美に感じ、秋月の皎々たるを望ては深く其の色に動き、笛聲の啾啾たるを耳にしては深く其の音に感ず。勿論花月の美を愛するの情は蒲人漁父にも之れあり然れども文學者の之に感ずるや常人の得て夢想する能はざる極めて高遠幽邃なる微妙を感銘する者なり。人大詩人の著作を讀て恍然として心醉し、斯の如き高妙靈活なる思想は抑も如何にして人心に興り得べきかを驚嘆するも皆之が爲のみ。又吾人が人の喜びを喜び、人の悲みを悲むも皆此の同感の情あるに由るなり。否啻に是れのみならず、此の情あるが爲に、人の悲に遇て却て之を轉じて樂となすを得、吾人が大詩人の作れる悲曲を讀て大に快樂を感ずるも之が爲なり。哀別離苦の慘狀の大に吾人に快きも亦之が爲なり。試に見よ、昔者平氏の盛なりしや、一世の榮華を極め、宗領扶桑の半を占めしも、一朝没

落して赤幟復起たす、一門相將かて究島波濤の間に銷沈せり、何ぞ夫れ慘憺なるや。然れども吾人が平家物語を讀て尤も快樂を感ずるは、時めく六波羅の春花にあらずして、却て千鳥鳴く須磨の秋月に非ずや。アレキサンダーとマリウスは共に一世の英雄なり、然れども吾人が其の歴史を讀て左も快樂を感ずるは、前者がアルペラ原頭に波斯軍を壓殺したる時に非ずして、却て後者が形容枯稿カルセーデの殘墟に坐して今昔の涙に咽びたる時に非ずや。是れ等の快樂は實に文學の資にして、人皆多少其の情を有せりと雖も、其の感慨の深くして、快樂の大なるは、文學者に如くものあらざるなり。而して吾人をして悲哀的現象を樂ましむる悲歌哀詩は、文學者實に之を吾人に與ふるなり。若し世に悲歌哀詩なく、人にして同感の情を缺き、若しくは薄弱なるものあらば、人生快樂の範圍大に減殺せらるべきは疑ふべからざるなり。シエレー其の著「アラスタール」に序して曰く、人にして此世界に一の愛する所なく、一の望む所なく、人の喜びを喜ばず、人の憂に動かす、恰も乾燥したる土砂の如く、同感の情を失は、是れ人にして人に非る也。渠れ等は人の父にあらず、人の友に非ず、又人の爲に愛せられず、渠れ等は精神的に死せるなりと。實に然り。

文學者は最大なる同感の情を有するが爲に人間中の最も幸福なる者なり。曹孟徳が十萬の吳軍に動かずして却て烏鵲南飛を歌ひ、ウルフはケベックの戦勝者たるを願はずして、却てグレーの詩藻を羨みしは實に之が爲のみ。

以上述べたるが如き最高なる理想を以て最大なる感情を動かし、以て之を文字に表はしたる者、之を詩(弘き意味の)となす。詩は實に文學の神髓なり、精粹なり、文學の價值實に此に存す、吾人請ふ少しく之を論ぜん。

夫れ詩は靈活なる者なり、其の感情は無限なり。吾人の意識の中心たると同時に其の圓周となる者なり、詩は吾人の思想の根本たると同時に花葉となる者なり、萬物之に因て生じ、萬物又之に因て美なり。若し詩なからんか、此世界は乾燥無味にして吾人は何くにか純潔なる快樂を求めん。之を花に喩へんか、婉妍たる櫻花と雖も之を組織するものは纖維と細胞のみ、之を人に喩へんか、傾國の美人と雖も、元と是れ骨と肉とのみ。之をして美色を呈し、之をして芳香を放たしむる者即ち詩なり。所謂の徳義とは何物ぞや、愛情とは何物ぞや、所謂の愛國友誼の情とは、果して何物ぞや、所謂の美麗なる風景とは、果して何物ぞや。若し詩にして、永遠無窮

なる此の世界より、其の靈想を發揮するなかりせば、此れ等は又言ふに足らざる者ならんのみ。詩は即ち文學者の心なり、其の精神は即ち文學者の理想なり、故に文學者の胸襟や快澗、其の心事や高潔、百難の際に處して、恰も光風霽月の如く、常人の呻吟苦楚する時にありて、獨り悠然として、大船に坐するが如し、内に樂む所あれば、之を以てシエレーは「寂寞」に樂み、李調仙は夜郎に笑へり。

論じて茲に至り、顧みて我が邦方今の學生を見るに、實に長大息に堪へざる者あり。

渠れ等の眞理を認むるとは吾人之を知る、渠れ等の善を認むるとは吾人又之を知る。然れども敢て問ふ、渠れ等は果して完全に美を理解するの能力を有するか。渠れ等は花を見て之を愛し、月を見て之を樂む、然れども其の興起する感情は單に其の美なるを認め、其の艶なるを識るに止まるのみ。渠れ等は物を見て、其の物たるを知り、聲を聞いて、其の聲たるを知る、然れども物を形なきに觀聲を響なきに聞き、能く形骸以外の微妙を闡揚すること能はざるなり。渠れ等は尙ほ以て世界の最も幸福なる人と言ふを得るか。渠れ等は能く事物を分析し、又能く事物を測量す、然れども能く自然の美を感受する者幾何かある。渠れ等は人間に意識あるを

知りて精靈あるを忘れたるなり。吾人は之を以て主として當今教育の無風流なるの罪に歸せんと欲するなり。

吁、吾人豈辯を好む者ならんや。其の斯の如く嘔々する所以の者は、只人生の貴重なるを知ればなり。吾人は敢て世人に向て文學者たれと勸むる者にあらず、只文學的趣味を蓄へんことを勸告するものなり。ウ・オーツ・ウ・オーズ言はずや、若し吾れ自然の美を理解する能はずんば寧ろ異教者となりて魔神の海より上るを見ん。

(廿四年六月)

近招菓林子

- 一 緒論
- 二 批評及其方法
- 三 戯曲及之に對する近松の意見
- 四 近松戯曲の種類及結構
- 五 近松戯曲の材料
- 六 近松に於ける人物性格
- 七 巢林子の人生觀
- 八 (題目本文缺)
- 九 巢林子の女性

(廿五年頃より廿八年四月迄)

一 緒論

英の沙翁唱へられ、獨のゲテ稱せられ、今や我が近松は漸く知られむとするの時とはなりぬ。予輩は敢て之を以て奇異の現象となさず、却て當然の事となすなり。蓋し何物にまれ、其の發達の初期にありては、自己を覺識せざるを常とす。自己の貴重なる物品を抛棄して漫に他人の所有を欽羨する、彼の小兒の時期は、獨り一個人の上に於てのみならず、文學の發達に於て亦之を見る也。是れ假に他尊の時期とも稱すべきものにして、摸倣と崇拜とは其の徵候也。他を知ること漸く深く、稍其の真相を會得するに及びて、翻て他に對する自己てふ觀念深く意識の中に顯れ、明確に自他の區別を自覺するに及びては、從來他に向て用ゐたる勞力を移して自己の研究に従事するに至るべし。若し此際自家の事物に意外の價値を發見するか、若くは是迄他に見ざりし新生面に遭遇する時は、驚嘆の情と好奇の心とに刺激せられ、一切他物を捨て、銳意専心只々自家の考究に熱中すべし。是れ假に自尊の時期とも名くべきものにして、自他の關係前と全く反す。言ふまでもなく、

此の二つの時期は、共に其の常軌を外れたるものにして、素より之に向て公平なる比照的評論を望むべきに非ず。殊に後者にありては、從來自己の價値を識らずして一意他を崇拜せし愚なりしを覺りしと共に、其の反動として強大なる自尊心其の動機となるを以て、只々自家の價値を振揚して他に拮抗せんと欲するの情より、知らず識らず、其の短處缺點までも曲庇掩蔽するの弊に陥らざるもの殆ど罕也。願ふに明治維新と共に歴史上一の新發達をなせる我邦文學が、他尊の時期を脱せしは已に數年前にあり。和漢文學の反動的流行と、學者が派を分ち壘を守り、力を極めて他を擠下せんと務めたるの事實は、其の已に自尊の時期に入りたるの徴候と見て大過なかるべし。而して今日果して此偏頗なる時期を經過して、公平なる比照的觀察に堪ゆるの時期に達したるや否やは、趨勢の過渡する所少くとも今後十數年の後に非れば、確乎たる斷案を下す能はずと雖も、兎にも角にも、已に自己を覺識し、自己の價値を認め、尙進で公平なる自己の評論を得んとするの傾向あるは、即ち文學發達上必然なる階段を踐めるものにして、亦以て我が文學が健全なる進歩を爲しつゝあるを證する者と謂ふべし。是時に當て、我邦唯一の劇曲家、我文學

の光明なる近松巢林子を評論せんとする予輩は、熟々我文學の大勢を斟酌し、戒愼省慮以て其の説の公平無私ならんことを期せざるべからず。

近松門左衛門なる名が我文學社會に喧しく、日本第一の戯曲家として普く世上の知る所となりたるは、屢々數年以來のことにして、其迄は或る一部の人を省きては其名だに知らざるもの多かりき。予輩は今日巢林子を云ふもの、果して其名を口にするに止らずして、一個の戯曲家として真に其價値を認むるものなりや否やを知らず、只之を言ふもの甚だ多きに比して一篇の評論さへも世に出てざるを見て少しく奇怪の感なきを得ず。げにや二三の世話淨瑠璃の解釋と評論とは予輩已に之を見たり、然れども未だ一篇の戯曲家として之を論ずるものあるを聞かざる也。『ハムレット』は大なり、されど之を創作せる沙翁は更に大なるに非ずや。『天の網島』や『油地獄』や『柱唇』や皆是れ大戯曲也、されど之を作りし巢林子は更に大戯曲家たるに非ずや。『紙治』を談ずるもの『油地獄』を説くものは世即ち之あり、巢林子を説くものに至ては恨むらくは予輩未だ其人を見ず。日本文學の氣運は已に巢林子を知らんことを望むや切なり。予輩不肖、獨り全く之を知ると謂はず、猶彼の

大沙翁がウルリチ、ウエツッゲルピヌス、ドーデン、ハドソン諸家の評論を容れて緯々尙餘裕ある如く、我が近松も亦幾多の異りたる評論を容れて戻る所なかるべきを疑はざる也。是れ即ち近松の大なる所以にして、予輩が日本文學の名譽とし光明とする所以也。

英文學に通ぜる人は、沙翁と近松との間に著しき類似の點あるに驚くべし。予輩は敢て茲に優劣と言はず、高卑と言はず、又其の類似せる點の大戯曲家に必要な條件なりや否やを論ぜず、只此の類似の點が如何に二者の批評家に向て同一の困難を呈するかを一言せむ。彼の一般の批評家が以て沙翁に比擬したる『自然』なる語は、或度までは亦當に以て我が近松に比擬すべし。自然のものたる、漠然として限定する所を知らず、空を緯とし時を經とし、萬有を擧て流轉するものは、是れ自然なり。草木花卉の小より日月星辰の大に至るまで、皆是れ自然に非ざるなし。唯物となし、唯心となし、二元となし、多元となす、皆是れ同一自然に對する絶對的根本を説ける也。進化説や、週期説や、皆是れ同一自然に對する發達の原理を説ける也。厭世と云ひ、樂天と云ふ、亦是れ同一自然に對する幸福の問題を解ける也。其の説

く所千種萬様にして、而も同一の自然たるを妨げず、管に廬山の向背、巒となり峰となるのみに非ざる也。詩人哲學者は詮ずる所、自然の批評家也、明鏡人に應じて妍醜を分ち、水其の器に隨て方圓を異にするが如く。自然素と定形なく、定名なし、只自己固有の理想と感覺の形式とに依りて幾多の世界觀と人生觀とを作り來るのみ。故に詩人哲學者は自然を批評すといふと雖も、其の實自己を批評する也。自然の計畫意味を發見せんとして、偶々自己心容の廣狹と感識の高卑とを示す也。試に一輪の薔薇花を見よ。情を解せぬ、儉夫も尙觀て美となさむ、而も其美となすもの、只其の色の紅なるが爲のみ。摘草に餘念なき垂髻少女は、探てかざしの花となさむ、而も蛺蝶一枝の春に離るゝを思はず。徒ならぬ思に結ばれて春の恨を解く、よしもなき妙齡の處女には、露も情と見られ、色も哀を添ふるならん。常なきものと世を觀じて、四曼不離の行業に一切衆縁を思換えたる世捨人の眼には、盛者必衰の理を示さなん。草葉の裏に神の影を見ると、言ひけん理學者は、纖維組織の中に全能の大手を認むべく、宇宙の眞と善と美とを己が理想の中に萃めて、を萬有の中に認むる大詩人は、『哀れ此花、汝を知るものは亦宇宙を知らん』と歎美せ

ん。吹萬不同、元是れ同一の風、一輪の紅花千様の意料を禁めざるは自然の萬物各小宇宙をなせばなり。若し今小大萬殊に應待し、無限の變相に遇て少しも凝滯する所なき宇宙大の心容を以て、此の大自然界に對し、其の感想する所を被ふに詩歌の衣裳を以てするの詩人あらば、之を解するに難きこと、猶自然其物を解するの難きが如けん。之を批評するものは尙自然其物を批評するが如し、即ち其の詩人を批評するよりは寧ろ自己を批評する也。他の詩人哲學者が大自然に對して驚嘆し眩惑するが如く、批評家は其の詩人に對して等しく驚嘆し眩惑する也。而して大沙翁は實に此種の詩人也。

予輩は我が近松を以て敢て直に大沙翁に同じと言はじ。只此の大自然に對して其の心容の廣大なる遙に尋常詩人の繩墨を超たる所、沙翁に似たるものあるを認むるのみ。故に予輩は或點までは自己を批評するの覺悟を以て近松を評せざるべからず。凡そ批評の主とする所は、原作の殊を採て其中に遍を發見し、平等普通なる原理の下に幾多の差別を概括するにあり、言換れば、分の中に全を知り、歸納より演繹を構ふるにあり。然れども近松を評論せんとするに當て、吾ノは或點よ

り以上は全く反對の方法に出でざるべからず。即ち差別の中に平等を求むるにあらずして、却て平等の中に差別を認め、特殊の中に遍通を發見するにあらずして、却て遍通の中に特殊を發見せざるべからず。而して此の差別特殊が批評家自身の任意の形式を比擬せしものにあらずして、果して近松自身の特性なりや否やは、此の論文の價值を決するに必要なる標準にして、予輩が切に讀者に向て公平なる判斷を仰ぐ所也。是れ近松を評論するの甚だ困難なる所以にして、亦同時に甚だ趣味ある所以なり。

世往々一種の論者ありて曰く、詩人戯曲家の著作するに當てや、只時に隨ひ物に觸れ感想せる所を文字に顯したるのみ、批評家の分析し論辯する如き錯雜深遠なる理論の結果として成りたるものに非ず、如何ぞ之を分析し評論すべきものならんやと。如此謬見は素より一笑に付すべしと雖も、批評的文學の尙未だ發達せざる我邦なれば斯る皮相の議論を抱けるもの亦少からずと信するを以て、一言辯明し置くべし。げにや近松は哲理を談せず、人生觀を説かず、宿命自由を論せず、戯曲文學に就ても彼は決して今日吾人が考ふるが如き高尚なる目的を有せしに非ざ

る也。然れども若し其の著作にして、精確なる學理によりて得たる批評的標準に照して驚くべき價値を有するものありとせば如何。全篇に貫徹して人物活動の中心となり樞軸となる主義原理の、其の著作に歴然たるあるも、近松が直接に之を説かざりし之を以て之を偶然の暗合となすべきか。若しさなくば、人物事件に關せる幾多了解し難き疑問が一個の主義の豫想に依て豁然氷釋せられ得べしとするも、近松が口之を言はざるの故を以て、其の著作中に如此主義なしとすべきか。然らば斯る論者は天地言はず、日月語らざるの故を以て、引力説若くは地動説の眞理なるを否定せんとするか。吾人が經驗せるあらゆる現象を説明し得るの設想は即ち眞理にあらずや。人或は如此原理主義が著作に顯るも近松が一意識中に存在せざりし之を以て、近松が名譽にあらずとなすものあり。予輩は以爲く、一個の主義が意識中に顯はるゝや否やは寧ろ偶然の事實にして、決して之を以て其の人の價値を増損すべきものに非ず。且や高妙なる天才は到底意識中に描寫し得べきものに非ず。一去一來恰も電光の如く捕捉端倪すべからず、夢現の間に髪を容れず之を口にし之を筆にして其の然る所以を知らず、之に問へども答へず、之

を詠るも辯ぜず、古來天才の事業は多く此恍惚の間に成る、原理主義に準據して豫め答辯の素を成すが如きものに非ざる也。予輩は近松が其の著作の原理主義に對して全く無意識なりしや否やを知らず、否知るを要せず。只予輩は幾多の巧妙なる大戯曲を成就せる活動力の根本は、悉く皆其の心に具備せることを知るを以て、此の活動力を分析し考察し研究し、眞に一大戯曲家としての近松門左衛門を理解するは、批評家の一大責任なるを確信するなり。吁人間の思想を顯すの方便豈獨り必ず乾燥なる論理のみに依らんや。美術家にありては、繪畫彫刻は其理想を發揮する唯一の手段なり、詩人にありては詩は其感想を吐露するの唯一の器械なり。發表の形式相異りと雖も、其の根本的思想は通じて皆一のみ。詩人が理論によりて其の感想を顯す能はざること、尙哲學者が繪畫に依て其の世界觀を論證する能はざるが如し。予輩詩人を評論するに當り、若し爲し得べくんば、希くは詩によらん、夫れ唯能はず、之を以て已むを得ず、理論によるのみ。

世に又批評を以て詩の趣味を損ふとなすものあり。予輩は之に反し詩の眞の趣味は却て批評によりて増加せらるゝものなるを信ず。抑も吾人が詩によりて

得る愉快は、決して迷妄イデオロギアにあらず。詩は瑣末なる理論に拘泥せず短刀直に宇宙人世の本體を衝くもの、其の訴ふる所は吾人の理性判斷力にあらずして、良心と感情とにあり。動もすれば誤謬に陥り易き晦澁綿密なる理論に倦厭せる吾人の心性は、之に依て絶對の理想を仰ぎ、天真の快樂を享く。故に詩の快樂は吾人の有し得る尤も現實なる快樂也。夫れ已に現實也、現實と眞理とを以て唯一の目的とする批評は、何爲れぞ、詩の趣味を妨ぐるの理あらんや。嘗に之を妨げざるのみならず、批評は通常吾人が知る能はざる價值と意味とを教示することによりて、吾人の詩に對する快樂を増加すべき也。植物學者は草木機關の妙用を會得せるを以て同一草木に對しても通常人の知らざる快樂を享受し得べく、地質學者は岩石山脈の構造組織を知れるを以て、同一山水に向ても通常人の思ひ到らざる快樂の新境地を有すべし。雄雌蕊の作用を知れるが爲に、花は其の香を損するものに非ず、其の火山石なるや將た始元紀層に屬するやを知れるが爲に、斷崖は其の傾斜を夫ふものに非ざる也。加之批評は現實と迷妄を區別することによりて吾人の快樂を純潔にし、吾人の趣好を高尙にす。詩歌は決して吾人を給きて不正の愉快を賣るも

のに非ず。若し批評によりて其の趣味を打破せらるゝの詩ありとせば、是れ決して眞正の詩に非ず。彼の批評を以て詩の趣味を害ふと信ずるものは、未だ共に詩を談ずるに足らざるの輩のみ。批評果して如此虚偽の詩と、如此愚鈍なる讀者を排斥するの力ありとせば、予輩の事業は目的以外に、期せずして一の新領地を發見せりと謂ふべきなり。

二 批評及其方法

夫れ批評するとは短處を抉摘するの謂にあらず、長處を賞揚するの謂にもあらず、只々眞に理解するの謂なり。價値を判斷し、優劣を比較する等は、寧ろ其の第二義にして、眞正の批評は全く受動的ならざるべからず、一言すれば眞の知識は其の批評也。

哲學者は宇宙の批評家也、詩人、戯曲家は人生の批評家なり、理學者は自然界の批評家なり。彼等は宇宙、人生、自然界を以て其の知識の目的となせばなり。世人批評の字義を以て他人の著作を論評するものゝみに限るは、甚だ其謂れなし。吾人

が詩人戯曲家の著作を研究するは、詩人戯曲家が人生を研究すると、其の間何の異なる所かある。等しく是れ他物に對して其の知識を求むる者にあらずや。只其の目的の一は人生にして、一は詩歌なるの別あるのみ。人多くは創作者に對して批評家を區別すと雖も、予輩は絶待なる宇宙本體を外にして、世に創作なる者無きを信ずる也。詩人戯曲家果して創作者なるか。人生の觀念はそも何くより得たる。彼等の著作は、宇宙人生に向て其の感想する所を再造せるものに非ずして何ぞや。哲學者果して創作者なるか。世界なる目的なくして誰か世界觀を構成するを得んや。如何に極端なる唯心學者も、外界其物の存在を疑はず、凡ての知識は此の外界と内界自己との關係に外ならざる也。如何ぞ其の間に創作者と批評家との區別を容れんや。詩人も批評家も、其の目的は要するに外物に就て正確なる知識を得るにあり、故に知識は全然受動的のものにして能動的のものに非ず。詩人の目的は宇宙人間に就て其の真相を發揮し、一般人生の希望と感情とを顯すにあり。個人の特性によりて、是非の臆説をなし、若くは社會改良の策を立つるが如きは、決して其の本旨にあらざるが如く、批評家の目的も亦ありのまゝに原著

の實躰を顯し、其の性質目的結構に就て摯實なる研究を遂ぐるにあり。其の價値を上下し、其短長を是非し、若くは改良修正の立案を作るが如き、其の固有の目的にあらざる也。蓋し知識は受動的なるが故に、遍通必然なるを得るに近しと雖も、優劣是非の議論の如き能動的の作用は、多く各人の殊別なる判断力と審美的賞翫力とに由るを以て、萬人をして直に首肯せしむる確乎たる一定の鐵案を下し難し。如此は決して批評家が本來の事業となすに足らず。彼れが目的とする所は、普通遍有なる吾人の理性の上に、必至不拔の知識を構ふるにある也。世人往々此本義を誤り、個人的判断を以て批評家の本領となすものあり、是れ本末大小の辨を知らざるものなり。予輩が批評の目的は、讀者に向て事實の知識を供給するにあり、其の判断の如きは、明確疑義なきもの、外は盡く人々各自の意料に一任せむ。

予輩が近松に就て得んと欲する知識とは、即ち一個の戯曲家として近松を理解すること也。戯曲家として近松を理解するとは、彼れが傳記を詳にするの謂にあらず、彼れが著作を評釋するの謂にあらず、只彼れが如何にして、斯の如き戯曲を作り得しかを明にすることなり。言ひ換れば種々の形式を帯びて幾多の戯曲に顯

批評

れたる個々特殊の「想」が其の活動者なる近松の心中に如何なる遍通の主義として存在せしか、而して此の遍通の主義が如何にして此の如き個々特殊の外形を帯びて著作の中に出て来りしかを明にすること也。即ち一言すれば戯曲の中にある近松と戯曲の外にある近松との關係を明にすること也。若し夫れ各個の戯曲が其の内部に於て互に如何なる連絡を有するか、其の目的の一致と手段の差違とは如何なる關係を有せるか、又其の人生觀が如何なる影響を事件性格の上に及ぼせるか、將た人物と外界とは如何なる主義によりて配合せられ、又如何なる目的によりて活動せらるゝや、等種々の問題の解釋に至ては、一に此の根本的大問題の必然なる結果として續釋せらるべき也。

然らば則ち如何にして將た何によりて近松を知らん乎。言ふまでもなく、其の唯一の方法は其の戯曲を研究するにあり。然れども戯曲は只能く活動するのみ、少しも議論せず。批評家は是に於て殊の中に通を認め、數多の中に單一を捉へ、矛盾の中に調和を識り、具體的事物中に抽象的理義を發見せんが爲に、鋭敏なる分析力と概括力とを具へざるべからず。即ち彼れは嘗に已に完成したる戯曲として

之を理會するのみに止らず、其の未だ成らざるの時に當り、各個の成分は如何の狀態にありしやをも考へざるべからず。勿論彼れは此の成分を集めて完全なる戯曲を作る能はず、實地に之を現化するの方法は戯曲家獨り之を知れば也。然れども彼れは少くとも此の現化の可能的なるを知らざるべからず。詩人に於て要する所は綜合にありて分析にあらず、批評家にありては全く之に反し、要する所は分析にありて綜合にあらず、此點に於ては二者凸凹的關係を有せりと謂ふべし。批評家は實地に綜合する能はず、而も分析したる成分と共に其の綜合せる結果を知らざるべからざるが爲めに、分析によりて綜合を認め得べき程の強大なる想像力を要す。故に彼れは或る意味に於て詩人たらざるべからず。彼の批評家と詩人と柄鑿相容れずとなすものは、嘗に批評の性質を知らざるのみならず、亦詩を知らざるものと謂つべし。凡そ相互共通の素なくんば、二物安ぞ相知り相關するを得んや。

近松を知らんと欲せば、近松の知りし所亦之を知らざるべからず。故に批評家は局外より近松を觀察すると共に、近松自身と同一地盤の上に立たざる可らず。

彼れは嘗に戯曲を知るのみならず、其の戯曲の因て來りたる人世の状態を知るを要す。人世は質なり個人は形なり、而して戯曲は二者結合の果也。批評家は人生の實相を採て戯曲に比較し、熟々其の著落輕重の跡を考索商量して以て戯曲家が個人的特性を論究せざるべからず、是れ詩人戯曲家の批評家にとりて最も肝要なる所、最も其技倆の著るゝ所、而も尤も困難なる所なり。吁誰か批評を以て容易の業となすや一の事物を知るものは、其の心其の事物を包容するか、若くは少くとも之と同一の水平面に立たざるべからず。近松を評するものは、其の心近松と同じからざるまでも、等しからざるべからず。淺學の後生豈全く近松を知れりと言はんや。予輩安ぞ我文學の名譽なる光明なる大戯曲家に對して崇敬の意を表する所以の道を知らざらんや。

詩歌戯曲を評するに三個の方法あり、歴史的、審美的、及び比照的、是なり。今予輩は此三者の中何れを取るべきか、一言茲に辯じ置くも、穴勝無用に非ざるべし。

歴史的方法とは、批評家の着眼點を歴史上に措き、一個の歴史的產物として詩歌戯曲を研究するにあり。故に此方法にありては、著作は文學其物の目的物と言は

んよりは、寧ろ文學史中の一大資料なり。猶戰爭平和の出來事が、歴史の發達、經過を示すが爲に史上に記載せらるゝが如く、詩歌戯曲は文學の變遷進歩を審にせん爲に研究せらるゝなり。故に因果の理法は常に外界と著作との關係を示す唯一の手段にして、著作其物の爲に格別の研究をなすを容さず。政治史上の一產物としては、主として時勢の變遷と社會の状態とは、如何なる影響を著作の上に及ぼせしかを明にし、境遇、政治、氣候等凡て外界諸勢力の合同作用によりて著作の由來する所を説明せんことを務め、文學史上の一著作としては過去文學の精神及び經過は之に向て如何の勢力と材料とを與へしか、又後代の文學は之によりて何等の變化を受けしか、又之と如何の聯絡を有するかを窮め、又一個人の活動としては此の如き著作が如何にして作者の性格、教育及び生活境遇より必然の結果として生ぜしかを明にせんことを務むるなり。審美的方法にありては、全く之に異なり、著作の上に作用せる一切外界の勢力に就て一も言ふ所なく、あらゆる外物の關係より抽離したる著作其物を以て研究の唯一の目的となし、全然自家の理解力と判斷力とによりて之を會得せんことを務む。故に詩歌戯曲を以て各自特殊の意味と目

的とを有せる一の文學的著作と見做し、主として思索研鑽の勞によりて其中に含める主義原理を説明し、尙且其の審美的價值を論定せんことを務む。歴史的方法にありては、歴史を知るを以て目的とし、審美的方法にありては著作を知るを以て主義となす。二者各其の適く所を異にするを以て、其の間毫も相關する所なし。比照的方法は前二者と異なり、時代を論ぜず、國土を問はず、文學哲學上のあらゆる知識の中に相似の點を求めて、之を比較評論するにあり。要する所は一般知識の間に一致合同の點を求むるにあり。故に其の研究の範圍に於て殆ど定限する所なく、或は文化發達の點より、或は歴史變遷の上より、或は審美的標準の上より、或は道義的基點の上より、其他哲學にまれ理學にまれ、其の材料と方便とに於て極めて自由なる範圍を有す。予輩は三者其の何れを執るべきや。抑も近松は如何に闊大なる心容を以て其の材料を集め、如何に巧妙なる腕を以て其の戯曲を作りしか。又吾人の希望と情感とに向て如何に痛切なる同情を表せしか。將た又社會人生の真相は彼れによりて如何に觀念せられしや、一言すれば近松は如何なる人物なりしか。是れ予輩が近松に於て知らんと欲する所也。予輩が彼れを以て、我文學の光

明となし、名譽とする所以は、實に彼れが一個の戯曲家として其の本分を盡せしに存す。是に於てか予輩は知る、予輩が批評は歴史のならずして須く審美的なるべきを。何となれば予輩の目的は歴史によりて近松を知り、若くは近松によりて歴史を知るに非ずして、近松の爲に近松を知るに存すればなり。然りと雖も、歴史上の近松を離れて別に近松なる戯曲家あるに非ず、一個の戯曲家としての近松の外に別に歴史上の近松あるに非ず。予輩は此點に於て慥に兩者の相關を認む。只予輩が目的は、主として近松及び其の戯曲の審美的研究に在るを以て、已むを得ざるに非ざるよりは敢て歴史の批評に入らざるべし。若し夫れ比照的方法に至ては、文學的評論として予輩未だ其の價值を認めざるなり。

予輩が批評は主として審美的方法を用ること前に述べたるが如し。然らば則ち批評の標準は之を何くに求むべきや、是れ次に決すべき必然の問題なりとす。予輩は目下之に對して明確なる答辯を爲すこと能はず、何となれば予輩が批評的標準の主要なるものは審美學にあらず、倫理學にあらず、修辭學にも詩學にもあらず、只近松の戯曲其物の中に存し、戯曲を外にして別に標準なるものを有せざれば

なり。勿論予輩は、例へば戯曲の結構に關するものゝ如き、一般に通ずる形式的標準を有せざるにあらず。只其の目的原理等に關しては、豫め自家の任意的尺度を以て之を規定せざるを言ふのみ。抑も標準なるものは、只研究を簡便にするが爲に吾人が隨意に假設する方便に過ぎずして、決して多くの人が信ずるが如く知識の要素にあらず、故に或點に於ては偏頗を意味す。凡て標準は其の何等の主義によるにもせよ、畢竟自己の知識の全部若くは一部なり。標準によりて他を知らんとするは、自己を以て人を測るに同じ、故に元來標準は自己以下のもの即ち己より小なるものに向てのみ用ふべきものにして、決して大詩人、大戯曲家を研究する所以の道に非ざる也。是を以て予輩の近松を知らんとするや、其の心を慮らし、其の氣を平にし、一切自主的任意の度量を抛棄し、只々其の戯曲の中に其れ自身の標準尺度を求めんことを務めたり。吁、近松自身にあらざるよりは、誰か近松を知悉するを得べき。予輩は只此の研究によりて此の大戯曲家の朋友となり伴侶となるを得ば則ち足りなん哉。

三 戯曲及び之に對する近松の意見

予輩は近松の著作を研究するに先ち、一般戯曲に就て大體の觀察を下さざるべからず。

何人も知る如く、通常詩を別けて叙事詩、抒情詩、及び戯曲の三と爲す。叙事詩は過ぎ去りし出來事の物語にして、人物の活動と事件の經過とを單に歴史的に叙述するもの也。此人物が如何にして、如此に活動し、如此事件が如何にして、如此經過をなせしや、即ち動作の中心なる個人的性格の内部に立入りて、其の歴史的事件となるまでに如何なる發展變形を経たりしやに就ては一も言ふ所なく、内部の心性活動は全く外界の固定せる事物の中に没了せられ、只事件を事件とし、人物を人物として、純ら客觀的の觀察をなすのみ。此點に於ては叙事詩一に客觀詩と名くるを得べし。故に此の種類の詩にありては、人物は個人的特性を失ひて、濫藉標渺たる一様尋常の人間となり、事件は寫實的主角を離れて、漸く理想的瑰異と優雅とを具ふ。萬づ外形によりて歴史的聯絡を制するを以て、其の作用は必然にして自由

意志の存在を容さず。抒情詩は之と異なり。一の出来事に對して、外部に顯れたる結果を観察せずして、或る目的計畫に對して、主として内部の原因、即ち其活動の中心たる人物の心性を叙述せんことを務む。即ち理性と感情との衝突、希望と現實との不調和等より喜怒哀樂百般の情緒が出入去來起伏上下して、肚裏千百の變化を生ずるの委曲を盡さんことを務む。此點より見る時は、叙事詩の客觀詩に對して主觀詩と名くるを適當とす。人物の心的動作は此種の詩の主眼なるを以て、個人の性格は各自固有なる特質を具有し、外界の刺激と之に對する内部の反動は、此の特質によりて一種殊異の發展を爲す。されど抒情詩が主として描出する所は此の心的活動の樊裡に止まり、其の發展の極、遂に一個の出来事として外部に顯る、所以又已に顯れたる出来事に關係して遂に一の戲曲的計畫を構成する所以に至ては一も記述する所なし。抒情詩は事件の既然的形跡を叙せずして、將然的準備を述べ。故に若し過去の事實を物語る叙事詩を以て過去詩と言ふを得ば、常に其の目的を未來の動作に措く抒情詩を未來の詩と稱するを得べし。又歴史的事實の必然なる因果を認むるの故を以て叙事詩を必然詩と稱するを得ば、心性活

動が自主的發展は言ふまでもなく、自由意思を豫想せるを以て、抒情詩に付するに自由詩の名稱を以てするを得べし。如此叙事詩と抒情詩とは兩々相對して對角線的反照をなす。即ち其の關係は客觀の主觀に於ける、過去の未來に於ける、又必然の自由に於ける關係なり。此の客觀と主觀との反對を調和し、過去と未來との差別を結合し、必然と自由との兩極を融化したるものは即ち第三の戲曲なり。

戲曲は事件及び之を構成する内外の活動力を現在に作用しつゝあるものとして讀者の前に呈出す。故に單に事件の物語若くは心性の叙述によらず、主として吾人が日常社會に經驗する對話の方法に頼る、故に戲曲は現在の詩なり。戲曲は徒に零碎支離の事件の經過を示すものに非ず、讀者をして個々の事件を通じて全篇の頭尾を連環する一大綱領即ち筋なるものを知らしめざるべからざるを以て、此の事件の外部的形様と共に、其の原因を成せる内部的活動を知らしめざるべからず。即ちあらゆる事件は外に向ては歴史的發達を示し、内に於ては自由なる心性的聯絡を有せざるべからず。言換れば、必至自由の二條の因果は一事件の内外に平行して兩々相依傍せざるべからず。故に戲曲は叙事詩の客觀と必至とを採

りて、抒情詩の主観と自由とに調和し、之を過去と未來の結合點なる現在に現はせるものなり。蓋し是れ戯曲が詩の最も進歩せる所以にして、叙事抒情の詩人に比して、戯曲家の極めて史上に寥々たるも、亦以て前二者に於けるよりも數層大なる手腕を要するものなるを知るべし。今詩の發達上より見るも、尤も寫實的なる叙事詩は尤も早く、最も理想的なる戯曲は尤も遅く顯はれしは、歴史上較著なる事實なりとす。之を詳述する時は、岐路に涉るの恐あるを以て故らに言はず。

以上略述したる所によりて、戯曲の性質を了得せる讀者は、亦略々戯曲家の本領を理解せしならん。彼れは叙事詩人なると同時に抒情詩人ならざるべからず、彼れは過去、の事と未來の想とを一團として現在の動作に融化するを要す。形より見れば客觀なり、必至なり、想より見れば主觀なり、自由なり。少しく大袈裟に云へば、彼れはカント、シュリンクが哲學上に解釋せんと企てたる自由意思兩界合併の大疑問をば、人物が實際の動作によりて調和するの任あるなり。戯曲家たる亦難い哉。

吾人は、戯曲は現實の詩にあらずして眞實の詩なることを知らざるべからず。

眞實とは或物を一絲一髪も殘す所なく寫實的に否寧ろ寫實的に描寫するの謂にはあらず。如此現實は到底吾人の爲し能はざるところ、好し爲し得るとするも、決して望まじきことにあらず、何となれば、現實は眞實に非れば也。眞實とは物の眞相實態の謂にして、現實とは只物が吾人の眼に映ずる外觀の謂のみ。吾人は記憶せざるべからず、物の實態實相は常に現實の中に顯はるゝものにあらず。現實の事物として吾人の覺能に感ずるや、已に各物特殊の事情と境遇とに應待せる幾多の假相と偶然性とを被り來り、決して其の本態實相即ち其の眞實を發揮せるものにあらず。眞實は時間と空間に制限せられたる現實界に於て見るを望むべからずして、只吾人の觀念中に理想として存在するのみ。故に予輩は理想と眞實とは同躰異名にして、偶然の變態、一時の假相を蒙れる現實は寧ろ虚偽なるを信ずるもの也。世の無學者往々眞實と現實とを混じ、理想を以て空想と同一視す、甚だ誤れりと謂ふべし。戯曲家の事業は、事物の變態假相中より本態眞相を抽象し、濾過し、特殊なる人物と事件との媒介によりて之を讀者の前に明白に表彰するにあり、言ひ換れば眞實を發揮するにあり。戯曲家は此の特殊なる人物と事件を用ふるこ

とによりて、一面に於ては現實を再造し、他面に於ては眞實を掩蔽す。是れ一見先きに言ひし所と相矛盾するの觀ありと雖も、是れ戯曲の依て戯曲たるを得る所以なりとす。即ち戯曲家は特殊の人物と事件とをば一種巧妙の技術によりて、眞實の發揮を妨害せざるのみならず、却て之を助成する様に措置安排せざるべからず。若し特殊の人物事件によらずんば、戯曲は平板單調なる一個の抽象的空理とならん。吾人は假相媒介あるが爲に、戯曲の中に個性を得、其の實相たる眞實あるが爲に、普通性を認む。而して其の二者は個々分離して戯曲の中にあらず、吾人が普通性を認むるには個性によりてなり、個性を認むるは普通性によりてなり。即ち再言すれば、吾人は特質によりて本性を認め、假相によりて實相を認め、變化によりて常住を認め、偶然によりて不易を認む。此の殊遍相關は戯曲の最大目的の一にして、戯曲家が伎倆を判する重要なる規準なり。

以上述べし如く、戯曲家は殊と共に遍を知らざるべからず、殊は即ち現實なり、遍は即ち眞實なり。覺能を有するの人は何人も現實を知るを得べし、眞實に至ては目之を見るべからず、耳之を聞くべからず。戯曲家は錯雜紛糾せる假相變態の現

實界より如何にして之を抽象し、以て一個の概念となすを得るか。予輩は先に觀念中の理想は即ち眞實なるを説けり。如何に天稟の才ある戯曲家と雖も、先天的に斯る觀念を有するの理なし、彼れは如何にして之を得たりや。是れ戯曲家が天賦の才能の然らしむる所にして、予輩の研究すべき限にあらず。只予輩が茲に讀者に注意せんと欲するは、戯曲家は現實界假相を去る代りに、吾人に與ふるに想像力の範圍を以てすることは是れなり。げにや戯曲家は幾多の人物、種々の事件を用ふ、然れども尙以て實際社會に於けるが如き現實の事物に比するに足らず。此の足らざる部分は即ち是れ吾人が想像力を以て補綴すべき所のものなり。凡て審美的感情は、其の目的物の美術なると詩歌なるとに關せず、自動的なるを要す、即ち單に客觀的に物の刺激を感受するに止らず、此の他動的状態より齎て自動的作用となり、自己の主觀を外界に射出して主觀的客觀(若くは客觀的主觀)を構成せざるべからず。所謂美なるものは、此の主觀的審美想と客觀的技術とが感覺の媒介によりて一致調和する時に始めて生ずる感情なり。故に審美的感情を生ずるには、技術の中に主觀的作用を容るべき未定限の部分存せざるべからず、即ち觀者の

想像力を活動せしむるの餘地を具へざるべからず。是れ予輩が戯曲家は須らく現實を摸せずして自家概念中の理想に據るべしとする所以也。

昔沙翁に向て、其の作中の妖魔窟の一段の今少しく眞らしからんことを求むるものあり。沙翁莞爾として之に答へて曰く、善し若し子にして予が表白の方法を好からずとなさば、茲に此上なき改良の方法あり、そは他なし、子自ら其の想像力を以て之を補修することのみと。人あり曾て近松に謂て曰く、

(本文缺く)

此言によりて察する時は、今日吾人が論證する所のものは、二百年前已に近松の胸裏に明白に覺識せられありしなり。寫實に奔るべからず空想に流るべからず。所謂る皮膜の間に戯曲の本領ありとなせしものは吾人が現實と眞實の區別を説き、沙翁が想像の必要を認めし其の言は各異なれども、其の意は詮ずる所相同じ。予輩が是迄て説き來りし所、直に反覆して近松が此の言に對する解釋となすを得べし。吁沙翁や近松や、美學を知れるにあらず、詩學を學べるにあらず、而も其の言ふ所今日の學説と一致する東西恰も符契を合するが如し。是れ豈偶然の暗合と

して見るべきものならんや。眞に社會の眞相を觀察し、人生の希望と悲哀とを表白するの上に於て、大戯曲家の見る所知らず知らず同一軌道に出でしなり。

以上は表白の方法に屬す。若し夫れ戯曲の目的に就て我近松は如何なる觀念を有せしやは、予輩の讀者と共に切に知らんと欲する所也。是れ其の全著作を通讀し研究せば、自ら明なるべきを以て、其の詳細に渉るものは凡て後章に譲り、茲には只近松が言に就きて大體の主義を慥め置くべし。

近松は實に行爲の人にして理論の人にあらず。何れの作者にありても、通常自己の事業の主義目的に就て多少の意見を述べざることをなし。大沙翁すら、『ハムレット』^ト第一場の中トに於て戯曲及劇の主義目的を頗る精細に説明せり。我が近松にありては、全戯曲を通じて予輩は其の戯曲に對する意見を見る能はず、只僅に生玉心中(上卷)の中に之に關する嘉平次の一語を見るのみ。是すらも、沙翁の『ハムレット』に於けるが如く、故らに言へるものとは思はれざれども、又其の意に反して、故らに言へるものにもあらざるが如し。故に予輩は之を以て近松の意見の一部となすも不可なかるべしと信ず。

命の綱の十六兩、長作に騙られて嘉平次は躍起となり

扱もたぐんだく、今思ひ當つた嵐の芝居の曾根崎の狂言が面白うて再々見ると吐したがよう見覺えた。取もなほさず油屋の九平次、惣じて狂言淨瑠璃は善悪人の鏡になる。己はかたりの手本にするか。

「善悪人の鏡となる」此の一句以て近松が戯曲の目的に對する意見の髣髴を窺ふに足る。鏡は萬象に應待して少しも其眞を失はず、美人も之を喜ぶべからず、惡婦も之を憎むべからず、妍醜素己れに存すれば也。善を善として勸むる所なく、惡を惡として懲す所なく、人生の狀態をありのまゝに描寫するの明鏡となるは近松が戯曲の目的なり、理想なり。故に近松にありては戯曲は天然と同じ。猶無心なる天然が自ら其の計畫意味を告ぐることをなさずして、一に各人の意料する所に委ぬるが如く、戯曲も亦衡平無私、其の間に勸懲の意を含むべきものに非ずとなせしなり。故に人若し其の中に道德の原理を發見せば、是れ樂天家が自然界に於て天道の公正を認むるに同じ、人若し厭世主義を其の間に見ば、是れ薄倖轉軻の人が悲哀不平の心を以て天地を觀じ、以て正義公道の存在を疑ふに同じ。故に近松は天

地自然が厭世樂天等の主義を超越して無心無我なるが如く、戯曲も亦勸善懲惡の域を離脱して空心虛情ならざるべからずとなせしなり。沙翁曰く

The end of playing... is to hold, as 'twere, the mirror up to nature; to show virtue her own feature, scorn her own image, and the very age and body of the time, his form and pressure.—Hamlet III. ii.

劇の目的は天然の鏡となるにありとは沙翁の言、善悪人の鑑となるとは近松の語、古今東西其の説の一致豈驚くべきに非ずや。以上は予輩が嘉平次の一語によりて近松の思想を付るところ、蓋し中らずと雖も遠からじ。然れども彼れ能く此の目的通りに實際其の戯曲を作り得しや否やは、勿論別種の問題に屬し、予輩の目下判断すべき限にあらず。茲に一事の注意すべきことあり、難波土産(?)の傳ふる所によれば、近松が用ひし硯、半二に傳ふ、其の裏面に刻して曰く、事取凡近、意在勸懲と。此の銘果して近松が意に出でしものとせば、前に生玉心中に據りて予輩の知る所と其岐を兩にするものと謂つべし。遮莫其の眞意の在る所は其の著作を研究せば自ら明瞭なるべきを以て、其の言ふ所の一致するとせざるとは、予輩の重き

を措く所にあらざる也。

四 近松戯曲の種類及結構

予輩は此章に於て近松が戯曲の種類結構に就て簡略なる觀察を下すべし。近松の戯曲を大別して時代物及世話物の二種となす、聲曲類纂によれば其の數凡て百數十の多きに上れども、今日世に流布する所は置に時代物三十餘種、世話物二十餘種に過ぎず。此書を著すに當り、予輩の有せし所は左の四十八種に過ぎず。

- 世話物 長町女腹切
- 薩摩歌
- 心中二枚繪草紙
- 卯月の紅葉
- 心中萬年草
- 夕霧阿波鳴渡
- 鎗の權三重帷子
- 淀鯉出世瀧徳
- 心中重井筒
- 戀八卦柱曆
- 卯月の潤色
- 今宮心中
- 冥途の飛脚
- 山崎與次兵衛壽門松
- 台根崎心中
- 五十年忌歌念佛
- 堀川波の鼓
- 伊達染手綱
- 生玉心中
- 心中刃は氷の刃日
- 博多小女郎浪枕

時代物

- 心中天の網島
- 出世景清
- 日本振袖始
- 百日會我
- 本朝三國誌
- 嫗山姥
- 絶狩劍本地
- 孕常盤
- 善光寺御堂供養
- 關八州繫馬
- 吉野都女楠
- 天神記
- 女殺油地獄
- 雪女五枚羽子板
- 十二段
- 曾我會稽山
- 遊君三世相
- 天智天皇
- 傾城反魂香
- 平家女護島
- 世繼曾我
- 傾城酒吞童子
- 蟬丸
- 一心五戒魂
- 心中宵庚申
- 國性爺合戰
- 信州川中島合戰
- 千疋犬
- 碁盤太平記
- 甘露雨
- 釋迦誕生會
- 國姓爺後日合戰
- 源氏烏帽子折
- 最明寺殿百人上臈
- 双生隅田川

右の中予は殊に重きを世話淨瑠璃に描く。否、予輩は斷じて言はん、近松の近松たるを得る所以の價値は一に此の世話淨瑠璃にあり。予輩が我邦第一の戯曲家

として我文學の光明榮譽として近松を尊敬し評論するは只彼が此の世話淨瑠璃の作者たるを以てなり。時代淨瑠璃に至りては予輩の多く留意する所にあらざ、よしんば此等三十有餘の時代物が一朝湮滅して其跡を世に止めずとするも予輩は戯曲家としての近松が爲に、其價値の毫厘を損ずることなきを信ずる也。故に此の書の讀者は予輩が立論の際にありて其の眼中只世話物ありしのみと見るも、本書を理解するの上に於て些の困難を感ずることなかるべし。

如此予輩の本書に於て關する所は、主として世話物にあるを以て時代淨瑠璃に就て多く言ふ所あるを欲せず。されど讀者をして予輩が理由なくして漫に時代物を輕視せるに非ざることを知らしめんが爲に、予輩は茲に戯曲として時代淨瑠璃の價値に就て、一言するの已むを得ざるを覺ゆ。直截以て予輩の思ふ所を述べしめば、單に時代淨瑠璃は戯曲にあらずと言ひて已まん。是れ多言するを須ひず苟も戯曲の何者たるを理解せる人は予輩の言に首肯せん。詳細の説は煩しければ言はず。近松が時代物は第一筋の一致を缺ける也、第二完全せる、動作を有せざる也、第三而も其の動作は荒誕不稽に流れて誠らしき所あらざる也、第四絶えて性

格の活動を示さず、況して種々の人物と因て以て相區別する個人的特質あるなく、又況して各個人物の自稱(Self-consistency)なるものなし。筋の一致と動作の完成とは戯曲の依て以て其の目的を達する所以にして、其の動作のまことらしきと、其の性格の個人的なるとは、戯曲の依て以て活動する所以也。戯曲に此四者を缺くは猶家に柱礎なく車に軸輪なきが如し、安ぞ戯曲と稱するを得んや。

一般に言へば、戯曲とは詩文にて二個以上の人物と事件の媒介合動によりて一個の大計畫若くは大動作の完成せらるゝ首尾の經過を表白するの技術なり。故に戯曲は其の悲劇なると喜劇なると若くは歴史劇滑稽劇慘憺劇たるを問はず、其の主とする所は一の動作即ち一個の筋を完成することなり。筋は戯曲の生命なり、此の筋を活動し完成するには、其の動作の必ずしも單一なるを要せず、其の主人公の必ずしも一人なるを要せず、只此等の幾多の動作、幾多の主人公は徹頭徹尾唯一なる大動作に對する助成的手段たること、猶身軀中幾十の機關が相倚り相助けて、以て其の唯一の目的即ち生命を維持するが如くなるべきことを忘るべからず。近松の時代淨瑠璃にありては多く此筋なるものなし、幾多の事件一篇中に錯

綜すれども、概ね個々獨立の目的の爲に個々獨立の活動をなすものにして、木に根幹あるが如く、河に本流あるが如く、全篇の事件を湊合し、人物活動の中心燒點となる筋なるもの其の間に存することなし。勿論強て附會すれば、其の間皆多少の關係なきに非ざるべし。然れども戯曲の要する所は單純なる關係に[○]あらずして生ける聯絡を有するにあり。胃は手なくして働く能はず、手は胃なくして働く能はず、人は胃と手となくして生くる能はず。如此身幹の諸機關は個々獨立して存在する能はず、互に必然なる相關的補助に倚て其運用を全うし、所詮生命維持なる大目的の爲に共同的活動をなすが如く、戯曲の各部分も死せる飯釘補綴にあらず、生ける共同的活動をなさざるべからず。故に酷言する時は、戯曲中の各分子は常に全編の活動に要用なるのみに止らず、必要にして缺くべからざるものならざるべからず。近松が時代淨瑠璃は、此の點に於ては所謂支離滅裂と評するも敢て不當にあらざるべし。

今試に其一例として吉野、都女、楠を吟味せんか、此の淨瑠璃は元來近松が時代物に於て普通に見る如く全編五齣より成る。第一齣、勿論後世脚本に見る如く場の

區別は明確ならず、尙ほ此事に關しては後章舞曲と淨瑠璃との關係を論ずる條下に詳説する所あるべしは、第一禁中軍評定の場、第二櫻井驛、勾當内侍危難の場、同訣別の場、第三湊川の場の三場より成る。第一場に於ては坊門宰相清忠が大森彦七と内通して正成の策を沮み、正成は衆議一決の勅諭に已むを得ず、死を期して出陣するを叙し、第二場に於ては、勾當内侍が清忠の爲に長持の中に押込められ、今しも足利軍の大森が許に送られ、湊川の邊を通過するの際、正成が爲に救はれ、和田の源秀をして都に送り歸さしむるを叙し、又次に其の子正行を召して、吉野、初瀬の名木も老木は次第に枯れ共、こぼるゝ種の色香をつぎ二葉の苗を残すこそ忠孝兩全の道なるを説き、強て本國に歸らしむる、所謂櫻井驛の訣別を叙し、第三場に於ては正成以下の戦死を寫し、又和田の源秀が勾當の内侍と稱して大森彦七を驚かすを叙す。第二齣は、第一、新田本陣、麥盜人吟味の場、第二、小松原、小山田高家出陣の場、第三、求女塚身代の場の三場より成る。第一場は小山田高家の女房某が、由緒ある夫の貧苦に迫りて一領の鎧、一指の太刀だもなく、見すゝ功名の機を逸するを悲み、兵糧の麥を盗み、便よぐば陣所に忍び入りて太刀道具を盗まんとせしに、番卒の爲

に捕へられて義貞の本營に引かれたるを、義貞は其の夫を思ふの志に感じて其の罪を赦し、自己が着捨の鎧太刀を與ふるを叙し、第二場は高家の出陣を叙し、第三場は高家が義貞の高義に感じて、自ら義貞と稱して求女塚に戦死し、恩人の危難を救ふを叙す。第三齣は東寺尊氏本營の場、一條大路梟首の場の二場より成る。第一場にては大森彦七が、小山田高家の首を以て眞に義貞なりと信じて尊氏の實驗に供せしに、尊氏は其の眞偽を疑ひ、豫て義貞の顔を見知れる小山田前司を召して之を判ぜしむ。前司一見、久來勘當せる其の子の高家なるに喫驚せしが、思ふ所ありて、己れ一人にて眞偽を判ずる能はざるを以て一條大路に梟首せんことを乞ひ、尊氏之を許す。第二場は勾當内侍と高家の妻と共に伴り狂して、其の獄門に處せられたる首を奪はんと謀る。ト、二人は前司と互に實情を吐露し、愁嘆の末前司は自殺して、さもなき首を苟も義貞なりとして梟首せし身の疎忽を謝するに終る。第四齣は坊門清忠邸外の場、河州天神の森の場の二場より成る。前場は坊門清忠、尊氏と謀りて、後醍醐帝を其邸に幽屏し奉りしをば、名和又太郎長年と小山田高家の妻とは、期せずして各様を變へて之を奪ひ奉らんと謀り、門前にて互に其計畫の

暗合せるを知り、力を協せ、謀を以て首尾よく帝を奪ひて河内に奔るまでを叙す。第二場は河内に奔れる長年は、圖らず楠正行母子に天神の森に逢ひ、茲に十三歳の正行奇計を運らして追手の賊軍を奔らすを叙す。第五齣は三輪の里神前の場にして、幾多の人物事件同時に幅濶して頗る奇怪を極む。想ふに、是れ由來聯絡なき關係なき數多の事物を採り來て、強て一場の下に結合せんとしたるの弊にして、近松時代淨瑠璃の多數の結齣は概ね此類也。今要略を擧げんに、後醍醐帝楠正行の守護によりて吉野山に皇居あり、新田義貞馳參じ都作りと聞えしかば、北の方勾當の内侍内裡に残しありし三種の神器を盗み奉り、神璽、寶劍は内侍自ら之を護り、小山田高家の妻之に従ひ、神鏡の御箱は千種の頭の中將と洞院左衛門督之を荷ひて三輪の里の神前に憩ふ。茲に坊門宰相其の部下十餘人と共に神器を奪ひ還さんと謀り、姿を變じて百姓となり、代りて神器を擔はんとを乞ふ。和田源秀亦變装して農夫となり之に加はる。清忠と源秀とは、抗爭の末互に其本名を明し、源秀は清忠を追て三輪の山に入る。茲に大森彦七手勢を引具し來り、先づ頭の中將と左衛門督とを縛し、内侍所の櫃を開きしに、御箱の内俄に鳴動して電光天地に輝き、神鏡

日の如く中天に上る。彦七、少しも恐れず、よし／＼さはらぬ神に崇なし、此上は只心を懸けし女を連れて歸らんのみと、勾當の内侍を引立て去らんとせしに、今まで杉にかけ置ける神劍自ら鞘を離れ彦七の頭上に閃き、其の北ぐるを追て虚空を渡り去る。此時恰も北畠親房、新田義貞、楠正行、吉野より神器奉迎の爲に來り、偶々足利尊氏も亦靈夢に感じて吉野殿に詣らんとして、亦此處に會す。恰も好し、和田源秀坊、門清忠の首を提げて、其の間に入りて南北兩朝の平和を調停す。此時又寶劍は大森彦七の首を買きて虚空より舞下り、如舊鞘に納り、如例、天下一統、源氏一統、太平國に太平の君が威光は萬々歳治まる御世こそ久しけれを以て全篇を結ぶ。

以上記せる所によりて、讀者は吉野女楠の結構の梗概を知るを得べし。其の支離零丁一篇の戯曲を以て目すべからざること又予輩の評論を待ちて而して知るを要せざるなり。第一齣と第二、三齣とは毫末の關係なく、第二、三齣と第四、五齣とも亦全く異なりたる事件なり。前後に出没せる人物の如き、只名稱の偶合せるものに過ぎずして、少しも戯曲の上に於て必至の連絡あることなし。只幾多の偶然的人物と事件とが漫に離合し、漫に集散するを見るのみ。全篇の「カタストロフイ

」と見るべき第五齣は其の事蹟の奇々怪々なるは措て言はず、前齣と何の必然的關係かある。總じて戯曲は一の三段論法の如し、其「カタストロフイ」と他の齣との關係は、猶結論の二前提に於けるが如し。結論は前提の必然なる結果なるが如く、戯曲の「カタストロフイ」も亦前數齣の必然の結果ならざるへからず。故に其の中一の偶然の存在を容さざるなり。之に反して、女楠結齣の如き、始ど皆數多の偶然の附和混同せるものに過ぎず、如此もの如何ぞ一個の戯曲として見得べけんや。これまで述べし所は、只戯曲の生命なる筋の一致に就て言へるのみ。已に戯曲の生命を缺く、其動作の完成、人物の性格等に就て一々其缺點を論證するの必要なしと信ずるを以て、餘は盡く讀者の判断に一任せん。

吉野都女楠は慥に近松時代淨瑠璃の見本として見るを得べし、其の中曾我會稽山、國姓爺合戦、日本振袖始、碁盤太平記等の如き多少筋の一致を有するものなきにあらず、れども、動作の完成、人物の性格等の點より之を見る時は、予輩が我邦第一の戯曲家たる近松巢林子の著作として當に標示すべきものあるを見ず。故に予輩は我文學及び我近松巢林子の名譽の爲に、重きを世話淨瑠璃に置き、多く意を時代

物に留めざるを以て至當なりと信ずる也。斯く言へばとて、予輩は世話物を以て何れの點よりも完全無缺の戯曲なりとするものにあらず。予輩が公平なる批評眼は決して其の長處の爲に眩惑せられて其の短處を見通すものにあらず。猶世話物に關しては後章に細説する所あるべきを以て此に贅せず。

近松は駒場の區分に就ては極めて不注意なりしが如し。時代物にありては概ね五齣より成る。中には傾城反魂香の如く上中下の三部より成るものあり。又碁盤太平記の如く全部少しも篇章を分たざるものあり。又最明寺殿百人上臈の如き殊に區劃を設けずして時に義經ふくみ狀、最明寺殿道行、女勢揃等任意に冒頭を設けたるものあり。此等の區分は予輩が今日謂ふ所の脚本的區分とは寧ろ全く別物にして、若し今日近松が淨瑠璃を取て之を舞臺に上さんとする人は、前後の關係を斟酌して新に駒場を分たざるべからず(第九章參考)。故に時代物は概ね五齣より成ると言はんよりは寧ろ五章より成れりと言はん方適當なるべし。世話物にありては概ね上中下の三段より成る。此の區別は直に移して齣の區別と見るも、多く過る所なきが如し。然れども近松が元來齣の考にて此の區別を立てざ

りしことは、槍權三重帷子が上下二段より成るも、實際明に三齣に別つの必要あるにても知らるべし(第一齣鳥居通馬場の場、市の進留守宅の場、同數寄屋の場、第二齣岩木忠兵衛内の場、第三齣伏見川岸の場)。

予輩は此迄屢々動作の完成なる文字を用ひ來れり。今や世話淨瑠璃の動作と其の區分との關係を明にせんとするに先ち戯曲に於ける動作の完成とは果して如何なることを意味するやを確め置かざるべからず。

。戯曲は管に動作即ち筋の一致を要するのみならず、此の動作の完成せんことを要す。動作の一致は必ずしも動作の完成を豫想するものにあらず。其の動作は能く一致するも、其の「カタストロフィー」に到らずして、中道にして其の發達を止め若くは破裂するもの往々にして之あり。之を草木に譬ふれば、猶結果期に到らずして萎縮枯槁するものあるが如し。如此は決して完全なる戯曲と稱するに足らざる也。完成せる動作は發達上必ず三大段に區別し得べし、一、原因、二、最高點、及び三、終結又は「カタストロフィー」是也。一の原因が最高點にまで發達するには、其の間必ず發展の時期を經過せざるべからず。既に最高點に達したるの動作は、其の

最後の終結即ち大破裂に達するまでには通例^{ソレノツギ}結果^{ノツギ}の時期を經過するものとす。發達結果の二期は原因終結と最高點との中間に立ち、主として動作の進行を急速にする促進的媒介となり、若くは之を緩慢にするの沮滯的媒介と爲るものにして素と戯曲の要素にあらず。近松世話浄瑠璃にありて予輩は往々其の缺乏せるを見る。抑も原因は獨立自主の發達によりて最高期に達し、大破裂に終るべきものなりや、即ち最高期及び大破裂の要素は、悉く皆初より原因中に包含せらるべきものなりや、反言すれば戯曲的動作は、其の發達中途に於て新要素の追加を容すべからざるものなりや。是れ古來學者の議論の別るゝ所にして、予輩の思考する所によれば、戯曲の大目的は所詮動作の一致と完成に在るを以て、必ずしも其原因の唯一なるを要せず、又其の發定期の同時同處なるを須むず。而も互に相倚り相扶け協同一致して一大動作の完成を助成するものならんには、相異なる種々の原因の時と處を異にするものあるも、少しも戯曲の旨義を害せざるなり。但此等幾多の原因の發定期は最高點以前にあらざるべからず。何となれば最高點は喻へば滿引せる弓の如く、之より以後の結果は悉く最高點に潜伏せる將然力^{ネオチユキカワフ}の必然な

る發展に過ぎざればなり。此事に關する詳細なる辯論は之を戯曲學に譲り、予輩は茲に戯曲的動作の完成と近松世話浄瑠璃の區分との關係を略述すべし。

前にも言ひし如く、近松世話物の三大段は直に脚本的三齣と見なすも差闕無し。而して一般に言ふ時は第一齣は原因に、第二齣は最高點に、第三齣は終結即ち大破裂に當る。今其例として、冥途の飛脚に就て之を説明せん。抑も梅川と忠兵衛との愛は、冥途の飛脚一篇の大動機にして因と果を包裹して、都て此中にあり。鬢水入の五十兩は其主因にして、新口村の捕縛は其の終結なり。而して封印切は其の動作の最高點なり。動作の進行上に於ては、揚屋の久右衛門は最高點に對する促進的媒介發展にして、新口村の忠右衛門は終結に對する沮滯的媒介結果なり。第一齣に於ては、封印切に對する三原因を叙す。即ち預金の催促、妙閑の言葉及び忠兵衛が門口の振舞によりて、我家ながら敷居高きまでの忠兵衛の放埒なる身持を示せしは、是れ其の素因を叙せるなり。母の手前に退引ならず、焼物の鬢水入男と頼みて五十兩の似せ物は、是れ其の主因也。堂島の預金三百兩懷にして、急ぐ霜夜の門の口出なれし足の癖になり、心の北は身の南、覺えず米屋町に歩み行きしは、是

れ其の誘因なり。第二齣にありては以上三原因と八右衛門の個人的特質と相結合して、一方に於ては八右衛門が忠兵衛の評判となり、鬢水引の披露となり、一方に於ては梅川の哀情苦心となり、又一方に於ては忠兵衛の慚愧憤怒となり、遂に封印切に至てあらゆる動作の發展の最高點に達す。第三齣に至りては斯種の戯曲の常として、目前に迫れる終結を延引せんが爲に、故に忠右衛門の一條を托出し、遂に新口村捕縛の終結となる。如此觀來れば、獨り近松世話物淨瑠璃の區分を明にするのみならず、亦以て其の動作の一致完成せる所以の一端を知るに足るべし。然るに時代淨瑠璃にありては、已に動作の完成を缺けるが故に、之に對して脚本的區劃を爲し能はざること勿論なり。尙此動作の完成のことに關しては後章傑作の各論に於て評論すべし。

五 近松戯曲の材料に就て

太山は土壤を擇ばず、故に能く高峻、故に能く雷霆を躍らし、風雲を吞吐す。江河は細流を拒まず、故に能く深大、故に能く鯨鯢を接し、滔天の波を起す。物各親むと

ころあり、人相好む所あり、故に薰と蕋と相接せず、氷と炭と相容れず、是を以て察々の明あるもの洞然の大觀なく、潺湲の清あるもの混々の濁あるなし。豫め成心あり、而して後萬物に接す、物式によらざれば入らず、情物に適せざれば應せず。是故に西鶴は伏姫を描く能はず、馬琴は世の助を寫す能はず。「エキセルシヨル」はウァルヅヲース獨り之を善くし、「マンフレッド」はバイロンにして始めて之あり。如此作者に向て如何ぞ槍の權三と共に振袖姿を望み、若くは「ハムレット」と共に「ロメオ」及び「ジュリエット」を望むを得んや。萬殊の事物に應じて凝滯する所なき、猶大山江河の細流土壤に對して選ぶ所なきが如きもの、文學史上其の類似を求むれば、予輩は英に於ては沙翁を得、我に於て近松を得るのみ。他は措て言はざるも、此一事、予輩は我巢林子に於て甚だ多とする所なり。馬琴や、西鶴や、一九三馬や、讀過一遍得る所は畢竟馬琴のみ、西鶴のみ、一九三馬のみ。近松に至ては則ち俄に捕捉し易からず。其の聲を聞き、其の跡を探り、其の影を追ひ、窮討して塵に其の髣髴を認むるのみ。予輩の小理想、小觀念は動もすれば倏ち大理想、大觀念の中に沒了せられ、茫然として自ら其の行く所を知らざるなり。予輩近松を讀む毎に、未だ嘗て其の

心容の豁大不凝なる恰も大自然の如きものあるに驚かずんばあらざる也。予輩は其想を研究するに先ち、想の因て發揮せられたる媒介即ち其材料に就て少しく言ふ所あらんと欲す。

近松は想に於て多く同異を擇ぶ所なきが如く、材料の種類に於ても殆ど定限する所あらざりき。彼は戯曲家として殆どあらゆる人間の階級を網羅して自家藥籠中の資料となせり。上は天神帝王より、下は市井教坊の少女に至るまで、戯曲的人物として其の筆端に上らざるものなし。而して區域に於ても獨り之を内國のみ限らず、弘く天竺、支那、三韓の間に求めたりき。其の釋迦誕生會、前後の國姓爺、善光寺由來等は其の戯曲としての價值は暫く措き、其の識見規模の壯大なる、當代群作者の夢にだも造る能はざる所にあらずや。其の時代の如きも、其の範圍頗る浩瀚、殆ど我古今の歴史を包容せり。彼は振袖始に於て神代を描けり、天智天皇、嵯峨天皇を描けり、木曾の山中に惡鬼を捕へたる頼光、戸隱山に鬼女を殺したる惟茂は、隅田河原に蕾の花の哀を止めし梅若丸、逢坂山に未來の爲に身を捨てし蟬丸と共に彼の心を惹けり。北條時頼、太田兼光は曾我兄弟と國姓爺と共に彼にとりて

は好題目なりしなり。吃の又平、武藏坊辨慶は釋迦如來、月蓋長者と共に其の好資料なるを妨げず。楠正成は平良門と共に主人公たるを失はず。川中島に龍虎相戦ひし天下の壯觀と三筋の里に痴話狂ひせし大津の公子とは共に相輕重する所無し。是れ只時代物に就て云ふのみ、予輩は其の材料の豊富なると題目の種類多きの故を以て、近松を褒揚せんと欲するものにあらず。如此は寧ろ戯曲家の末事にして特に其の價值を増損するの力あるものにあらず。予輩只讀者が好色一代男、永代藏の作者と國姓爺、日本振袖始の作者とは、其の着想識見の間に如何の差別あるかを注意せんことを望むのみ。

時代世話二種の淨瑠璃の比較的價值は之を論外として、只此の二種の著作が近松、巢林子なる同一戯曲家の手に作りたるを思へば、予輩は轉だ驚嘆の情に堪えざる也。予輩巢林子が戯曲を讀む毎に、其の心意の如何に廣豁にして同情の博大なりしかを見ずんばあらず。須彌梅檀の山の月に色即是空を觀ぜし三界の教主を想望するの心は、即ち相の山の辻歌に花一時の眺めを歌ふの心なり。櫻井驛の訣別に忠孝の烈義に感じたるの涙は、即ち蜷川の夕風にまゝならぬ戀路を啣つの涙

なり。吉野初瀬の名木も、畦の小途の名もなき花も、共に彼れを喜ばせしなり。都大路に青海の簾を捲上げて、琴を弾じ月に歌ふ深宮の上臈も、埴生の小屋に立かねし煙に咽ぶいぶせき賤の柚男も、共に同じく彼れを感ぜしなり。彼れは狹隘なる人爲階級によりて社會人間の中に壘壁を築き、若くは自己が特殊の嗜好に據りて他を規準するが如き種類の人にあらざりき。彼れは大沙翁に似て廓大なる胸襟を開き、自由なる精神を以て衆に接するの人なりき。是れはた誠に戯曲家の旨を得たるものと謂ふべし。戯曲の目的とする所は、或る特殊なる社會若くは人物にあらずして一般人間にあり、社會の階級時代の差別を離れたる一般人間の本性真相を顯はすにあり。戯曲中の人物は、素より一定の時代階級其他一般の差別の制限によりて個々特殊の假相を帯び來ると雖も、其の發揚せんと務むる所のものは一般人間の平等なる真相ならざるべからず。故に戯曲の要は殊の中に遍を見はし差別の間に平等を顯はすにあり。其の外形の殊は單に内部の遍を顯はすが爲の手段に外ならず。只吾人本性を發揮するに適當なるもの即ち是れ戯曲の適當なる材料なるのみ。多くの人は彼が戯曲的人物、特に其の女性の一般に卑賤なる

を卑しとすと雖も、是れ決して戯曲家としての彼れの價値を上下するに足らず。蓋し想ふに封建時代にありては社會的階級の區別峻銳にして上下相懸絶し、親疎長へに離隔して親和交際の道に乏しく、就中武家等にありては嚴重なる徳義慣習の爲に制裁せられて、世事一般に沈着固定し一定の樊籬を越えざるの傾きあり、而して此の傾向は社會の高等となるに隨ひ一層甚し。此際一個の戯曲家として、國民の大多數に向て社會人情の真相を發揮し、一般人間の希望と感情とを表白せんと欲するものは、勢ひ材料を比較的尤も自由なる活動の範圍を有せる中等以下の社會に求めざるべからず。而して尤も多く人情の痛激なる活動變化を経験するものは、中等以下の社會中楊臺狹斜の遊里たるべきは勿論自然の數なりとす。果して然らば、我が近松が其の資を主として中等以下の社會殊に遊里教坊の中に求めしは、決して非難すべきことにあらずして、却て寧ろ戯曲の目的を達する上に於て最も適當なる方便を執りたるものとして稱揚すべきにあらずや。彼の殿上高家の事情を寫すを以て一に高尚優美なりと心得る輩は、共に戯曲を談するに足らざるのみ。彼の下等社會の情事を寫せるの故を以て、近松を下卑賤陋なりと譏証

する輩の如き、他を傷くるに足らず、偶々以て自家の淺見薄識を表はすのみ。
 近松が世話浄瑠璃の純然たる想像に出でしものにあらずして、當時實際に起りたる事蹟に憑據せしものなることは先に言ひしが如し。近松は之を取て一の浄瑠璃となすに當り、如何に此の事實を變更せしやは、今日より之を知り難しと雖も、戯曲の目的を達するが爲に最も適當なる補綴取捨をなせしことは疑ふべきにあらず。文化未だ開けず、社會の嗜好幼稚なりし元祿享保の時代にありては、戯曲家は著作上決して今日の如き自由なる範圍を有せしにあらず、社會の好尚は多く人口に膾炙せる如き事實の改削變更を容さず、戯曲家は戯曲の爲よりは寧ろ事實の爲に著作せざるべからざりしことは今日尙想見するに餘あり。如此時世にありて、明治聖世の予輩をして歎稱措く能はざらしむること如此の戯曲を作らんことは、決して尋常一様の困難にあらず、想ふて茲に至れば予輩は愈我が近松が非凡なる手腕を認むる也。

世に一派の論者あり、稗史傳記に據りて猥りに正史の事實を改削したるの故を以て、口を極めて近松を批難し、甚しきに至ては歴史の罪人なりとなす。近江の淨

瑠璃中正史に關するものは只時代物のみ。先にも言ふが如く、予輩は戯曲として時代物の價值を認めざるを以て、勿論茲に之を辯護することをなさじ。然れども正史を改削したるの故を以て近松を非難するものあるに至ては、近松の爲、又戯曲の爲、一言其の妄を辯ぜんを欲す。是れ文學に志すもの、決して輕々に附すべき問題にあらず。何となれば、歴史と戯曲の關係は、即ち一般に詩と正史との關係なればなり。

詩は歴史に向て徹頭徹尾忠實なる從順を表すべきものなりや。即ち歴史上の事蹟は詩に於て少しも變更すべからざるか。若し然らずとせば、二者各獨立して全く相關せざるものなりや。將た又多少の關係ありとせば、如何なる程度まで詩は歴史に向て忠實なるべきものなりや。此の問題は古來學者の頗る異論ある所なり。予輩は詩と歴史とは全然相離絶して其の間毫末の關係なきものなることを主張するものなり。予輩にとりては是れ甚だ明白なる事實なり。何となれば全く目的本領を異にせる二個の事物は、其の手段方便の上に於て主從的若くは讓歩的關係を有すべきものに非れば也。全然目的本領を異にせる詩と歴史と、如

何ぞ主従讓歩の關係を有すべきものならんや。歴史の目的は事實にあり、詩の目的は然らず。若し詩にして歴史上の事實に對し少しも變更することなく徹頭徹尾忠實なる奴隸とならば是れ最早詩にあらずして歴史なり、何となれば如此は純然たる歴史と毫も區別する所なければなり。巧慧なる折衷論者或は云はん詩は歴史的事物を題目とするに當て、一々正史の細目にまて準據することを得ず、只其大體の綱領に於て差ふ所無くんば則ち可なりと。是れ世人普通に唱ふる所一見甚だ其の當を得たるが如しと雖も、甚だしき誤謬なり。予輩は問んと欲す、如此も歴史乎、將た歴史的詩乎と。已に事實を誤る、以て正史となすに足らず、已に正史にあらざるものを題目とす如何ぞ之を歴史的詩と稱するを得んや。故に歴史的詩なる名稱を與ふるは、只其の想像の原因を歴史中に得たるの故にあらば即ち可。然れども其の歴史上の或事實を包むの故にあらば則ち不可。予輩は只此意味に於てのみ歴史的詩を認むるなり。

予輩は疑ふ、歴史的事實にして正史の事實を詩中に容るゝの必要抑も何くにある乎。詩は其れ自身、獨立せる世界を有す。詩の世界は小宇宙なり。是れ其目

的本領の然らしむる所、其の人物の活動事件の經過、皆此の目的に隨て凡て此の小宇宙の中に於てす。詩は其の原料を歴史中に求むること素より少からず、然れども一たび詩人の筆に上りて詩の世界に入りたる時は即ち其の歴史との關係より全く離絶し了りたるの時なり。詩中の人物としての楠正成は、歴史上の人物としての楠正成にあらざ、只偶々同一名稱を有せるのみ。而して詩人が詩の目的本領を毀損せざる限りは可成歴史上の名稱及び事實に梗概等を保有せんと務むるは、通讀の際、讀者をして詩的感情と共に歴史的感情を興起せしむる爲の方便にして、詩として別に重要な關係あるに非ざるなり。彼の詩人の作を歴史に照し、以て杜撰となし孟浪となすものは、畢竟之を歴史として、若くは歴史的詩、狹義に於けるとして之を觀るが爲のみ。一の詩として之を見れば、却て自家の説の杜撰孟浪なるを知らん。正史の事實を變更したるの故を以て近松を難ずるもの、畫工を責むるに測量圖を以てし、詩人に求むるに歴史家の事業を以てするに同じ。是れ所詮歴史と詩との關係を誤解せるの罪に坐す。

予輩は大體の議論を了りたりと信ずるを以て、次章より筆を改めて、愈々近松戲

曲の人物性格に就て評論する所あらんとす。

六 近松戯曲に於ける人物性格

凡そ何れの邦を問はず最も浮世的の文學を求むれば、我が元祿時代の文學は當に其の一たるを失はざるべし。げにや、一般に元祿文學者は天を歌はず地を咏ぜず、高絶なる大自然界に對して多く想念する所あらざりき。春花の開落、秋月の盈虚は人生の流轉に思ひ較べて、何人も感愴するを讓ざる所、而も彼等は之に向て多く言ふ所あらざりき。彼等の觀察は現實界の地平線を越えず、事實は只事實、現象は只現象として之を觀るのみ。其の超自然的原因本體等に關しては、少しも思惟する所あらざりき。倫理道義の觀念と雖も、特に確乎たる宗教的の基礎を印せるに非ず、神明佛陀の教義若くは、子曰を以て人生を規約せんとするが如き、彼等の思ひ至らざる所なりき。其の死を歌ふは、其の生を安ぜんが爲なり、其の生を安んずるは其の天を樂まんが爲なり。他界未來の觀念は極めて幼稚に非ざれば極めて空漠なり。彼等は時に神を説く、然れども其の神らしき所は其の人らしき所に存

するのみ。之を要するに元祿文學は徹頭徹尾具體現實の世界を超えず、彼の上代を倘悦し、來劫を夢想し、圓滿完美なる理想の中に社會人生の標準を求むるが如き、其の能くする所に非ざりき。

人間を以て宇宙現象の一部となし大自然界に遍在せる萬有本體の裏に個體的實在を沒了するが如き大觀察を爲すこと能はざりし元祿當時の文學者に在りては、人事界を外にして別に現實界なるものあらざりき。故に彼等は出入共に現實界の裏に在るを以て、其の蹤跡、人事界を出づる能はざりき、是故に人間は彼等が文學上唯一の對象なりき。運命とは人生の窮達、因果とは人事の應報、自然萬物は只人に關する限りに於て文學上其意味と存在を有するのみ。一言すれば、人間を外にして文學なるものあらざりき。然れども之に頼りし人事界と自然界との關係を説明し、若くは宗教道義の觀念によりて人生の目的真相を明にせんとするが如きは彼等の事に非ず、一般に言ふ時は彼等の思想道念は共に淺膚薄弱の証を免るゝ能はざりき。西鶴一輩の戯作者は、實に此種の文學の代表者なりしなり。

此時に當り、元祿文學一般の傾向に對して、一轉語を下し以て紛々たる浮世的作

者との間、一鴻溝を劃し得しものは即ち近松巢林子なりき。勿論彼れと雖も亦時代の子なり、彼は實に元祿文學のあらゆる特徴を具有せりき。然れども予輩が彼を大なりとする所以のものは、此等の特徴の外、別に近松の近松たる所以の本領を有すればなり。即ち彼れは浮世的たると共に超浮世的なり、彼れが流轉究りなき世事を寫せしは、縁て以て常住不易なる人生の真相を解釋せんがためなりき。故に運命は彼に於ては天道にして、超人界と人事界の道義的關聯を表示するものに外ならざりき。故に人生は彼れに於ては決して偶然なる浮世的事業の連續に非ずして、嚴格なる宗教的意義を有せりき。彼れにありて現實を描寫するは、眞實を發揮せんが爲なりき。故に彼れは零碎斷離せる個々の事物を單に集合して得たりとせるものに非ず、其の存在と活動の根本を洞察して生ける全體の結合を認すことを誤らざりき。彼れは徒に寫實によりて吾人が卑劣なる慾情を喜ばしむるが如きものに非ず、文學の目的は單に現實の鏡となるに止まらず、亦之によりて理想の標準を示すにあることを知れり。故に彼れは社會の真相を根本的に發揮し、運命と希望、現實と理想、人事界と超人界との關係を明にし、以て人生の價值と

意義との解釋を吾人が道義宗教の觀念に訴へたりき。一言すれば人及び人生の解釋は近松が最大の目的なりき、想ふて此に至れば、我が近松は元祿文學の地平面に斬然一頭地を出したるもの、尋常戯作者の繩墨を以て規度すべきものに非る也。然らば則ち彼れ如何に又如何にして此目的を達し得しか、是れ予輩が解釋せんと要する所なり。

蓋し戯曲は主觀と客觀とを兼ね、其の動作は常に外形的に終始の經過を示すのみならず、人をして其の動作を活動せしむる内部の勢力をも知悉せしめざるべからず。故に内部の自由なる心性活動と外部の必至なる事件の經過とは、戯曲を組織するの經緯なり。而して此の外部の事件は只人物心性自由なる活動が形體を具へて外部に顯れたるものに過ぎざるを以て、根本的には戯曲の原動力は主として心性の活動にありと謂ふも不可なるべし。故に近松戯曲の本領を知らんと欲せば、予輩は先づ其の人物性格に就て精細なる觀察を下さんことを要す。

個人的性格とは、一言すれば諸々内外の諸因縁によりて限定せられたる各人心性の傾向を謂ふ。戯曲は何故に個人的の性格を要するか。蓋し戯曲は現在の詩

なり主客兩觀の詩なり、其の人物の心性に關しては自由の詩なり。現在の詩なるが故に予輩が日常の世事に於けるが如く、現實ならざるべからず、若くは少くとも現實の動作として吾人の覺能に感受せらるゝ丈の實らしさを具へざるべからず。個人的の性格に非ずば何物か斯る活動の中心となるべきや。主客兩觀の詩及び自由の詩としては、外界因果と共に内心が外部の動作に發展するまでの情狀を明にせざるべからず。個人的性格に非ずば、何物かかゝる内外特殊の事物に應待する心性活動の性質を顯はすを得べき。今若し特殊の性格に代ふるに一般人間に普通なる心性を以てせば、管に以て實際の事物を顯はす能はずして、極端なる理想詩となり、荒唐なる夢幻劇となり了るのみならず、吾人は惡人の代りに惡を得、忠臣の代りに忠義を得、阿房の代りに痴愚を得ん。戯曲の要する所は、現實の人物にあり。幾百の抽象的觀念あるも、以て安ぞ能く一齣劇を成さんや。個人的性格を描くとは、言ふまでもなく寫眞の如く個人心性を、殘る限なく寫すの謂にあらざり。其の特質の自他を區別するに足るものを捉へて之を明晰に發揮するの謂也。戯曲の目的は素動作の完成に在りて、其の人物は所詮其の方便に外ならざるを以て

戯曲中の人物は必ずしも完全なる終始を有すべきものにあらず、只戯曲動作の完成に必要な限に於て戯曲中に其の個人的獨立を保つのみ。世人が多く誤認するが如く、戯曲中のあらゆる人物は其の戯曲との關係の厚薄輕重の如何に關せず、盡く結齣中に現出せざるべからずとなすは動作と人物との關係を辨ぜざるの過に坐す。

任他、我が近松は如何に人物性格を描寫せしや、其の戯曲的動作との關係を如何に理會せしや。

ヘブレル曰ひけらく、ギョーテは自己を描き、シルレルは自己の理想を描けり、されど大沙翁は衆多の理想を一身に具せしと。予輩も亦同じく言はんと欲す、西鶴は自己を描き、馬琴は自己の理想を描き、近松は衆多の理想を一身に具せり。この一點に於て大沙翁と我が近松は著しく相似たりといふを得べし。げにや何れの作家にせよ、其の時代の性質により國民の好尚により、將た又自己が特有せる個人的性格によりて、其の著作は一種の形式を被り、多くは偏見私癖の爲に彩色せられざるもの稀也。故に一時代若くは一部の人によりて賞翫せらるゝは、古今隨

時其の人に乏しからず、されど一時に呼吸するものは萬世に生くる能はず、新陳相代謝して遂に遺忘の墳穴に葬られざるもの果して幾人ぞ。古今を通じて萬人の爲に厭かず愛讀せらるべき沙翁、近松の如きもの、誠に絶世稀有の例と謂ふべし。

戯曲の人物の個人的性格を具へざるべからざることには已に述べたるが如し。衆多の個人的小理想を包容するの大理想を有し、衆多の個人的小性格を有せる近松は、此の原理に背反するなきや。彼れは個人的性格を要し、此は非個人的性格を有す一見明白なる矛盾なるが如し、安ぞ知らん、此の矛盾こそ一大戯曲家として近松が名を刻するの鐵印ならんとは。即ち此の論理的矛盾は沙翁に於けるが如く、近松の手によりて實際的に調和せられたり。特殊と普通、差別と平等、小理想と大理想、個人的性格と非個人的性格、此等は近松にありては常に矛盾ならざるのみならず、戯曲に於て缺くべからざる要素なりしなり。彼れの差別を描くは只と平等を描かんが爲なり、彼れは時代境遇を離れ、一般人類に普通なる原性の存在を信じたるが故に、所謂各個の性格傾向なるものは此の原性が一時特殊なる内外の勢力によりて定限せられたるものなるを信じたるが故に、而して又戯曲家の務は一

時の定めなき假相を寫すに非ずして、此根本的普通なる人性の真相を描くにあることを信じたるが故に、小理想の中に大理想、小性格の中に大性格を發揮せんことを務めたりき。是れ素より其の心容の廣大にして、物に應じて凝滞する所なきに職由せりと雖も、亦天稟の才器に非ざるよりは安ぞ能く如此を得べき。予輩彼れが戯曲を通讀するの際、見る所聞く所悉く個人的なるにも拘らず、知らず識らず一般平等の人性を其の間に認識すること、猶明眼なる數學者が普通因數を數多の錯雜せる式中に發見する如きを覺ゆる也。又他方より觀察すれば、個人性は常住不易なる人間普通の本性に對して假なり僞なり。隨時變遷流轉して常體なき幾多の偶然によりて彩飾せられたるものに外ならざれば也。本體は理想也、假相は現實也、假相によりて本體を發揮したる近松は、文學上能く理想と現實とを調和したるものと謂ふべし(前章參觀)。故に近松の人物性格は現實的であると同時に理想的なり、理想的なると同時に現實的なり。

斯の如く近松の人物は外面上種々の假相を裝へりと雖も、根本的には人間普通の原性を具へざるはなし。抑も吾人々類が原性とは、少しも時代、社會、教育、生活遺

傳等あらゆる一時若くは偶然なる内外諸勢力の感化影響を被らざる原的性格を謂ふ。是れ貴賤を論ぜず、賢愚を問はず、凡そ常識あらんもの、共に稟有する所なり。個人的性格とは、此の原性が随時時代境遇に適應して特殊の形容を装ふものに外ならず。故に之を喩ふれば、原性は質なり、境遇は形なり。人は時と處とによりて千様萬態の形様を有つと雖も、其の内包せる質に至ては古今上下を通じて異なる所なき也。今近松の人物を見るに、其の外面こそ各自殊別の形骸を具ふれ、其の内部の本骸に至ては、此の原性に外ならず。故に何人と雖も容易に戯曲中の人物と自己とを合躰するを得べきを以て、亦以て最大多数の同情を得べき也。蓋し西鶴に非ざれば世の助となる能はず、馬琴に非ざれば信乃となる能はず。然れども何人かおさんとなる能はざる、お千代となる能はざる。予輩は近松の戯曲を讀むに當て、おさんを見ず、お千代を見ず、宛然自己の幻影想像の世界中に活動しつゝあるを認むるのみ。畢竟自己の外に我れと異なるおさんなくお千代なければなり。如此原的性格は、近松が人物の最大なる活動なり。一の意思が一の動作となるまで其間幾多の自由なる権力の争ありと雖も、原性は常に其の最後の勝利者

なり。故に其の結果よりして之を見るときは、原性の中に先て必然力ありて人間の行爲を支配するが如し。然らば則ち何物か此の原的性格を成す、他なし自然感情是れなり。感情の作用は本能的也、直覺的也、理を以て之を拆くべからず、辯を以て之を狂くべからず、其の來る電光の如く、其の去るや石火の如く、微候の前知すべきなく蹤跡の追訪すべきなし。感奮激揚の際に在りては恍惚として酔へるが如く、而も一種抵抗すべからざる壓抑の氣ありて麋鹿の溪水に向ふが如く、人をして知らず識らず其の指導に従はしむ。人誰か其の性の赴く所を見て之を喜ばざる、之を喜て誰か之を欲せざる、欲して得ざる時は誰か之を悲まざる、得て而して他の爲に奪はる、誰か之を恨まざる。如此はよし宇宙の眞理に徹底して世界人生を遠觀するの大哲學者も眼に一丁字なき田夫野人も、孰も同感を表せざるものあらん。然るに世事如此單純ならざるは畢竟各自が内外の状態に隨ひ、生存幸福の利害に迫られ、理性の力を以て感情の自然なる傾向を定限するが故なり。感情は心性中尤も單純なるもの也、或る意味に於ては尤も高潔なるもの也。想ふに世に社會生存の必要に迫られ、中心涙を飲て燃ゆるが如き感情を窒塞し、外冷然として恬淡の

風を装ふもの果して幾何ぞや。半夜、神澄み氣静なる時熟、思ひ廻らせば、誰か浮世のまゝならぬを悲まざるものあらんや。人の詩歌を好み、戯曲小説を嗜む所以のものは、所詮此のまゝならぬ現實世界より理想界に入り、其の中の人物に向て同情を表することによりて自己が霎時の救ひを得んことを望みてなり。近松が人物を描くや、主として吾人の感情即ち原性に訴えたり。彼れの人物は全然感情的也。其事物に應待するや、感情は恰も動物的本能の如く咄嗟の間に斷案を下し、其の間推敲熟慮の隙を與へず、心已に決し氣漸く定り意思變じて將に動作とならんとして、利害の形勢漸く意識の内に現はるゝに際し、茲に始めて理性の容物を見る。故に近松にありては、道徳は決心を左右するの力なく、只意志が已に感情の爲に決定せられたるの後、其の實行に反して多少の沮碍的勢力となり得るのみ。之を以て感情は最初の決定者にして亦最後の勝利者なり。近松戯曲に於けるあらゆる大なる動作は、歸する所感情の中に發動せざるなしといふも敢て過言に非ざるべし。此點に於ては、近松は大に沙翁と異なり。沙翁にありては予輩全く相反する二種の人物を見る。即ち一は感情的の人物にして、一は思想的の人物なり。ロメ

オ及びジュリエットは前者を代表し、ハムレット、ゴロスベルは後者を代表す、幾多の人物は此兩極の間に按排せらる。ハムレットの如き、亡父の靈を見て復仇の念慮一たび肚裏に浮ぶや、斷然オフエリヤの愛を絶ち、方寸の海に外に見えぬ波を包み、沈思深念全く思想界の人となる。如此は我が近松に於て絶えて見ざる所、故に其の作天真爛熳として少しも釘剪彩の痕を見ざれども、幽玄深刻なる思想の人は絶えて之なし。近松の人物は凡て是れロメオのみ、ジュリエットのみ。蓋し近松は只沙翁の半面を會得したるものと謂ふべし。

只始終感情に支配せらるゝの故を以て近松の人物を一概に卑賤なりとするは誤れり。然れども、若し之を幼稚なりと謂はば、予輩は之を首肯すべし。何となれば予輩は幼稚なる人間にありて、最も純粹なる感情の活動を認むれば也。所詮人は大なる小兒に外ならず、小兒の時期を經過せりと雖も、小兒の本性は終生之を失はず。吾人が一生の動作は要するに小兒の幼稚なる感情の上起因し、教育境遇によりて隨時特殊の潤飾を受けたるものゝみ。若し吾人をして少しも社會の慣習制裁を顧みることなく、生存上利害得失に就て絶えて思料する所なく、天下地上

毫毛の羈束を離れて恣に其の爲さんとする所をなさしめば、吾人は其の男なると女なると、老なると壯なるとを問はず、擧げて赤裸々なる小兒となり了らん。吾人が本來の希望は實に是にあるなり。然らば即ち尤も幼稚なる感情を描くは、尤も適切に人間の原性を寫すものに非ずや。『我は賢なるが故におさん泣かず』と言ふものあらば、是れ人間以上にあらざれば人間以下の動物なり。且や感情は其れ自らの世界を有す道理の與る所にあらず、徳義の關する所にあらず、一切外物を絶して其れ自らの道理と徳義とを有す。是れ苟も情を解するもの、分解を須すして心通默會する所、何物の痴漢ぞロジク獨り一切事物を判斷するに足ると思惟し、以て猥りに人物の高下を品尙せんとするや。畢竟近松の人物は其の外貌は則ち他人なれども、其の根柢は則ち自己なり。讀んでおさいの薄倅を悲み、小春の情義に泣くものは、所詮自己を悲み、自己に泣くものなり。讀過の際恍惚として自我を辨せず、心揚り情切にして身は宛然詩中の人となり了り而も卷を閉ぢて後、卑と呼び賤を稱するもの、子輩其何の意たるを知らず、是れ則ち只自己を卑うし自己を賤むるものに非ずして何ぞや。

以上述べたる所は、近松が戯曲的人物の梗概に就て、抽象的觀察を試みたるのみ、其の詳細なる實例に關して題を改めて別に論ずる所あるべし。

七 近松巢林子が人生觀

世に遣られ、時に遇はず、茫茫二百年の長夜の夢を住吉の松風に澄ましたる元祿の大詩人が、人に知られんとするの日は漸く來ぬ。是に於て題を探て書を読み流を追て水に浮ぶの輩の、評論の筆を染めしもの少からざる中に、正鶴を誤らずと覺ゆるものいと稀なり。吾は敢て獨り此の翁全幅の面目を知悉せりとは謂はじ、唯誤を知りて黙するは、我文學に忠なるものに非れば、いでや將來批評家の問題となるべき巢林子が人生觀に就て少しく語る所あらむ。

巢林子を我邦の沙翁なりとは誰が、いみじくも言ひ初めけん。又誰が、いみじくも言ひ唯しけん。そも此の二人は何れ如何なる點に於て相似たりと言ふか。之を言へる人は數あれども、之を説けるものは未だ見ず。殆ど自明の事にてもある如くに輕々看過せらるゝは、吾が寧ろ怪訝に堪えざる所なり。そも戯曲的、性格の

多様なることの相似たりと言ふか。蓋し然らざるべし。巢林子の人物は概ね單純なり感情的なり。そが中に、ロメオは之あり、ジュリエットも之あり、されど、ハムレットの如き、イアゴの如きはたプロスペロの如き種類の人物は、其の片影だも認め難きなり。又吾は沙翁に見る如き嚴しく、謂ふ所の個人的性格なるものを、巢林子が戯曲中に發見する能はざる也。然らば則ち其の戯曲の種類の多きことの相似たりと言ふか。蓋し亦然らざるべし。巢林子が作は其の人物の單純なるが如く單純なり、殆ど同一の結構に據り、殆ど同一の精神に本き、而して殆ど同一の結果に終る所、沙翁劇の千殊萬様なるに比すべくもあらざればなり。然らば即ち、作者が一定の人世觀として認むべきもの、其の作中に顯はれざる所謂の沒理想なるの點に於て、兩者相似たりと言ふか、吁蓋し然らむ哉。吾は之を以て全く理由なき比較とは思はざれども、其の小同を見て其の大異を見ず、粗笨なる觀察により。漠然たる臆斷を下し、概括誇張を以て自ら喜ぶの徒は吾が與みする所に非ず。巢林子はバイロンの如きキーツの如きはた西鶴三馬一輩の如き、しかく狹隘なる主觀的作家には非りしまでも、果して多少の個人的印象を其の戯曲中に止めざりしか。千萬

の意料を容れて而かも綽々として餘裕あると、猶夫の渾然無私の自然の如かりしか。彼れは果して純客觀の詩人なりしか。吾は未だ沙翁が果して沒理想の詩人なりしや否やを究めずと、雖も比較上純客觀に近きが故に、ゲーテがハインネよりも多く沙翁に似たりと言ふの意味に於て、巢林子が我邦に於て最も沙翁に似たる詩人なりと言は、吾は此の意義無き比照を笑ふの外敢て異議を挾まざるべし。されど、渠は沙翁と共に純客觀沒理想の詩人なりと言ふに至りては、吾は之を認見となすに躊躇せざるべし。何となれば、渠は決して純客觀の詩人に非ず、又沒理想の戯曲家に非ずして、確然たる一定の人生觀を有すれば也。而して此の人生觀は實に厭世の悲觀なればなり。

吾は凡て其の著作に依りて作者の人生觀を定むるの甚だ困難なる所以を熟知す。バイロン、ハインネ等の如き狹量の詩人にありては、讀過一遍、徑に其の理想の彷彿を窺ひ得べけれども、巢林子の如き戯曲家にありては、尤も慎重なる考察を要すべきは無論のことなりとす。吾は作者の理想の臚ろげなる邊には、讀者の主觀が之に代りて、如何に其光景を潤色すべきかを知り、而して其の以て作者の理想とす

る所のもの、如何に往々讀者自身の理想なるかを知る。吾は又戯曲中の人物が口外せし一語一句を捉へ來りて直に作者の思想と見做すことの、如何に危險に、又如何に笑ふべき批評なるかを記憶す。今若し沙翁を評するに當り、ハムレットの獨語に遇ては彼れを厭世家となし、イアゴが自由意志を疑ひしを見ては直に彼を宿命論者となし、ヘンリー五世がフォールスタフに向て、「吾は基督を知らず」と云ひしが故に彼を異教者となす者あらば、誰か其の杜撰を笑はざるべき。吾は是等の事情に鑑み、務めて心を虚ふし、其の戯曲大體の上より、人物性格の上より、事件行動の上より、具に作者の同情が那邊に傾けるかを察し、茲に巢林子が明に一個の厭世詩人なりしことを知る。讀者吾が之より説く所によりて、吾説の「佛教詩人なるが故に厭世詩人なり」と言ふが如き、薄弱なる論據に立つものに非ざるを、知れ

抑々、巢林子が戯曲にありて、吾人の性情中愛情ほどよく描寫されたるものは、あらず。其の史劇の大半、社會劇の殆ど全部は、所詮愛情の小さき歴史に非るはなし。或は蜷川の春の夕に身を散る花に類へし人、或は相の山に無常を傷みて三世の情を傷みし人、或は伏見の橋に浮世の哀をあびて甘じて仇ならぬ刃に倒れし人、さて

は石部の宿に因縁なき人の名に憶れて、心にもなき罪業を甘ぜし人、はた胸を貫く刃の切先に、無言の辯解を藏せし人、各々相を變じ體を殊にすれども、其の動機の源を尋ねれば、何れか愛情の中に在らざる。渠が戯曲は、殆ど愛によりて活動し、愛によりて終始し、愛によりて存在す。吾は巢林子を以て愛の詩人なりと言ふとも、決して不當の評に非ずと思ふ。渠が戯曲家としての名譽の大半は、たしかに此の愛情の裡にあり。渠は、管に此の愛情の本末終始の徑行に依りて、巧に戯曲を、經緯したるのみならず、亦之に依りて、個人と社會との關係を、觀じ、現實理想兩界の衝突を説明し、延いて人生に對して、其の偉大なる悲觀を、構へたりき。誰か知らむ、渠が厭世觀は、其の佛教的詩人たりしが爲に非ずして、愛の詩人たりしが爲なるを。

さらば渠が描きたる愛情は如何なるものなりしか。勿論基督教に於けるが如き、一種の高尙なる宗教的意義を有せるものに非ず。又曲亭氏に於けるが如く、醇化の極、縹渺として鏡花水月に對するが如き、超人間的理想は、渠に於て絶て見ざる所。さればとて西鶴一輩の如く、卑猥露骨なるにあらねば、ホトソン、サッカレー等に見る如き、深刻なる轉相を備へしに、あらず。渠の愛情は、其の人物の如く、極め

て單純なり極めて自然的なり。想ふに渠が人物の偏に感情的なる、怒れば便ち面上血を漲らし、感ずれば則ち悵然として涕を揮ひ、喜ては高く笑ひ、興じては起て舞ふ。其の理性の薄弱なる、單に情緒の趨向を制する能はざるのみならず、往々却て其の奴隸となり、徒に既往を回護し、失敗を慰藉するの料に供せらる。斯る人物にありて、自然に待設けらるゝ如く、渠が描ける愛情は、殆ど本能的なり。あらゆる情緒の主宰として、其の本能的命令を逞ふする時にありては、其の勢力往々測る可らざるものあり。愛の靈火一度び發するや、過去も無く、未來も無く、利害もなく、是非もなし、若し捨つべくんば、富をも捨てん、名をも捨てん、生命だも喜て之を抛たん、理を以て論ずべからず、威を以て恐らすべからず、尊卑なく、賢愚なく、天地の間唯相愛し相慕ふの情あるのみ。斯の如きは忠兵衛の梅川に於ける、お夏の清十郎に於ける、徳兵衛のお初に於ける情致にして、はた之れフロリツェルが、王孫の富と尊とを以て甘じて、エルデグが愛の犠牲となり、イモルガンがポストヒーマスと共に寧ろ牧人の子女にてあらんことを望みたるの心なり。此の境地にありて、愛は自己の外はあらゆる物を抽象す。其の前には法律なく、社會なく、己れ其の唯一の智識唯

の目的、又唯一の光明なり。世界は只此の目的を助け、此の光明に照されたる限に於て、彼れに對して其の存在を有するのみ。一旦唯心の夢覺めて、社會と自我との衝突を感じたるの曉にありては、吾れ社會を仆す能はざれば、只一の死あるのみ。是を以て百難潮の如く、天を滔して掩ひ來るとも、少しも驚かず、諷咏歎嗟從容として死に就く。此の如きは巢林子が戯曲に於ける幸福なる愛の最後なり。

さるにても、斯る愛の終始をば、巢林子は如何に見けん。其の犀利なる眼、其の同情に富める心には、かゝる愛の靈活なる作用は如何なる感觸をか與へけん。愛や迷と見れば悟にて、悟と見れば迷なり。虫の音、鳥の聲さへも、唯ならぬ思を惹ける今にありて、戀せぬ昔を思はゞ、誰かかゝる荒涼なる生活に堪え得し過去幾年の朝夕に驚かざるものぞ、安からぬ心に寝る目もあはぬ思して一念尙ほ斷ち難き絆は、そも何者の悪魔ぞ。樂と見れば苦、苦と見れば樂、愛は畢竟苦しきが爲に樂しき也。樂しきが爲に苦しき也。愛に泣く人は喜と笑となきを悲めども、喜ぶべきものを捨て、笑ふべきものを去りて、故らに悲み嘆くなり、而かも彼れは此の悲哀をば如何なる幸福にも代ふべしとは思はざる也。誰か其の唯涙の種なるの故を以て好て

其の愛せし亡き人の記憶を失はんと望むものぞ。よしや幽情化して石立ち怨風結て塚青き千年萬年の怨まこと有盡身軀の命なりとするも半生の劫を血に染めし此の願此の望將た此の涙誰か好て脱離せんとするものぞ。之れ豈驚くべき現象に非ずや。若し夫れ生は人の好む所死は人の惡む所今宗教的命令あるに非ず道義的制裁あるに非ず而かも莞爾として生を捨て死に就くこと暗室を去りて光明に就くが如きものあるに至ては寧ろ怪むべからずや。愛そも何物なればかゝる靈妙なる力を有する。死を以てに非れば其の失意を慰むること能はざるの愛が若し其の望みを得たるの時に當りて吾人に予ふべき幸福は如何に大なるべきか。かゝる愛情が吾人と共に生れ來ることは吾人の生活と何等の關係ありて存するか。吾人は生れて幸福ならざるべからず而して遂に戀せざるを得ず愛情と人生と此間何等の因縁あるか。此の如きは蓋し巢林子が胸中にありて夙に疑問と沈思との題目となりし也。而して渠は如何に之を解せしか。

巢林子が人世を觀るや常に自家の立點を幸福問題の上に置けり。渠は吾人が生れながらにして享有せる自然の感情の満足は吾人が幸福の最大なる源泉なる

を以て之れはた人生の最大なる目的なりと考へしが如し。渠が愛の詩人たりしもの實に之が爲なりき。されば渠は愛情の途に已むべからずながしの詩人が言ひけん如くあらゆる思想あらゆる感情あらゆる悦樂凡て有漏の人身を動かすものは所詮愛の僕にして其の靈火を養ふの柴薪に過ぎずと爲し、也。渠は愛の發揮者たると同時に辯護者なりき。想ひ見よ、渠は愛の自由獨立の爲に如何に盡瘁する所ありしか。偏狹なる社會の制裁慣習が愛の進行を妨碍するものに對して、渠は如何に反抗の氣炎を吐きたりしか。反抗の極殆ど矯激に奔るの嫌なきに非ずと雖も愛の詩人たる巢林子に於て勢洵に已むべからざるものありしならむ。愛は既に吾人と共に生る。自我に對しては三世離るべからざるの友、人生に對して幸福の最大なる源、吾人の宿命は天に在らず地に在らず只此の自己の胸奥に潜在せる一點愛情の靈火に存す。故に吾人は外界に對して此の内面的必至の運命を現化し了るに非ざれば已まざる也。夫のピロンが

Every man with his affects is born ;

Not by might mastered, but by special grace.

と言ひばたボルシアが

(Lover's Labour's Lost II. i.)

The brain may devise laws for the blood; but a hot temper leaps o'er a cold decree;

(Merchant of Venice I. iii.)

と言ひけんも蓋し同じ意ならんか吾は巢林子が厭世の悲觀已に此間に胚胎せるを認む。

自然感情を因として巢林子が人生觀を構ふるの縁となりしもの凡そ三あり。

一に曰く社會の制裁二に曰く人事の錯誤三に曰く渠が沒道義的傾向。

人集りて社會を成し社會に制裁ありて人を保つ要する所は人生の利福を増進するにあり誰かは自ら零落を招かんとて社會の人となるべきさはれ其の暗黒なる一面よりして之を觀れば人は多く世と背き世は多く人と違ふ。個人と社會吁之れ如何に悲むべき對比ぞや。人生の希望と感情とを歌ふなる詩人が題目となりて幾十世の悲哀をたゞみしもの多くは此對比に非ずや。人は素より世を離て幸なる能はず。されど人生最大の幸福を犠牲とするに非れば其の中に生活す

る能はざるの社會は寧ろ厭ふべきの社會に非ずや。吾人はかゝる高價を拂て涙と血とを買はざるべからずとせば吾人の生命は寧ろ哀むべからずや。斯の如き境地に陥りて高絶無情の天を仰て感愴すれば人生唯一の死あらんのみ。巢林子があらゆる社會的戯曲は要するに個人と社會との此の衝突を寫したるものに過ぎず。内には自然感情の殆ど必至なる『宿命』を帯び外には此の冷淡無慈悲なる社會的制裁の束縛に當らざるべからず一心兩界の間に煩悶して終に慘憺なる最後を遂ぐるもの寧ろ自然の結果に非ずや。内外兩界の利害水火相容れず調和讓歩の望全く盡きたる時にありては内外の關係は之れ即ち理想と現實との差別なり。胸裏盈寸の裡よしや無際、の淨樂を愴悦するとも有盡の塵軀人間に起伏する間は彼と此とは曠劫の時と無限の空を隔つ。現化せらるべき靈は獨り理想の界に遊び酔化せらるべきの身は常に現實の裏に展轉するもの何にぞよく其の終を全ふせんや。試に二三の例を引かんか。

歌念佛のお夏を見よ。互の心は釋けながらも世の柵にせきとめられて假の宿を己が家にかこつのみか我が思ふ男は腹黒き人の奸計に陥りて心にもなき無殘

の罪人となり、身は三界を家として、夢の世を狂亂の中に觀ず。只一人の父はありながら、其の子を救ひ得ず、家あれども其の人を庇ひ得ず、知己なく、友朋なく、さながら天地の間に孤立して、『是程思ひあふた中なせに女夫になられぬ』としんき泣きに泣焦れたる憐れさよ。鐘に待宵鳥には別れ、狂ふ野末の涯に見るものは、我が戀人の無殘の刑戮男は流石に諦めて脱るゝも業殺さるゝも業生年廿五才の迷を一念『夢の戯れ』と觀じ去り、思へば、此世の絆はふつゝと思ひ切たぞや』と言ふに至ては其の光景何ぞ一に悲惨なるや。

夫の夕霧伊左衛門は如何に。戀にはやつす浮身をば、包む紙子の裕一枚に、七百貫目の借錢負て、ぎくともせず、人には知れぬ戀の夢路を春の夜寒にたどる藤屋の伊左衛門、人にも一門にも見離されて、心の宿は只夕霧が愛情の胸。夫れさへも今はまゝならず、恩愛の羈にひかされて、空にも慣れぬ下賤の姿に身をやつし、母子三人の際會を眼前に見ながら、妻とも得言はず子とも言はれず、却て『駕昇』と卑められ、『穢き姿で侍に抱き付く慮外者め』と罵られ、現在の我が子に戯れに父と呼ばれ母と呼ばるゝと『慈悲』として『額を疊に摺付け手を合せて』嬉し涙に咽び、『兩人が中の思

ひ子の親子夫婦の寄合は、又今生では叶はぬ』と嘆く、人生不如意の極と謂べし。葬の眼尻衰へて、半ば死の黑影に掩はれたる嵐の前の夕霧が人目の關に隔てられ、一曲の俚謠に三世の情を忍ぶに至ては、誰か慟して哭せざらんや。

丹波與作が總領は、近江の石部に生まれもつかぬ馬子奉公、貧苦と無常の中に人となりて、いや慕はるゝ親の慈悲。由留木殿の御内、お乳の人の名をきゝて、『そんなら己が母様』と抱きつく。天涯ゆくりなき母子の再會は、人生至大の樂事ならずや。されど憐れなる重の井は、お乳の人の身分に顧みて、『飛び付いて懷に抱き入れたく氣はせけども』快く此の憐れたる孤兒の望を満足せしむること能はざりき。心にもなき情なき言葉に、却て血をはくばかりの母の思を知らず、頑是なき我が子が、胸慾な母様覺えて居さつしやれ』と泣き號ぶを聞きし時の渠女が心はそも如何なりしや。『現在我が子に馬追させ、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よ、お局よ、と玉の輿に乘たとして、是が何になる事ぞ』。『養ひ君、お家の御恩を思はずば、扱一人子を手放して何の遣ふぞ奉公の身の淺ましや』とは實に渠女が中心の熱血を咯きたるの言に非ずや。あはれや三吉は幼心にさすが浮世を恨みわびながらも、其の親の慕はしく、

知らぬ人の名になつかしみて、犯せし罪の顯はるゝにも露驚かず、母は眼のあたり
白刃我が子の前に閃くも之を救ひ得ず、子は母を、母は子を互に顔を見交せども、母
様とも我子とも言はれず

是ぞ本望／＼悪名取つて人には踏まれ助けられても生きて居ぬ。一人死よ
り人きれば往がけの駄賃じや。父様も母様も誰も一度は死るもの來世でゆ
るりと逢はふ迄

語々無限の意料を吞吐して感慨究りなし。誰か同情の涕に咽ばざるものぞ。
吁々戀せる男女にとりては人は戀せんが爲に生れ來りたるもの、而かも浮世の
波に寄邊を失ひて、パンスが天の恵を人間界に認むと言ひけん所、却て双々相擁
して『是程思ひあふた中なせに女夫になられぬ』と嘆ずる人の心を探れば、去り難き
希望の中に悪魔の顔を眺むる『眞個厭世の悲觀に非るべきか。人の作れる世の慣
習に天の結びし親子の情を得遂げず、父様も母様も一度は死ぬるもの來世でゆ
り』と遇はふとは不自由不圓滿に充ち満てる現世をはかなみて、其の小やかなる望
を來らむ世にかけしものに非るか。若し夫れ安東入道が『世間武士の義理立てど

も恩愛情の道缺けたり、何に樂みの娑婆世界』と言ひしは、之れ自然の愛情を以て人
生の眞諦となし、人爲の義理を以て社會の假相となせしものと見るべく、又夫の薩
摩歌の『あまんが手縫に事よせて』

愁にまた着替なき此生は五尺に足らぬ襟落し狭き浮世は何かせん戀にさは
りのせき縫の積る思を肩上で同じ刀にたち違へ一つ枕に伏せ縫して、三途の
川の脊筋にて結留めましよ、縫留ましよ

と言ひしが如き恨嗟搖々の間に人生の悲觀をほのめかしたること擬ふべくもあ
らず。其の男女の愛と親子の情とのけじめこそあれ、何れか一面には人生最大の
幸福を愛情の満足に歸し、一面には社會の制裁の下に人生の悲相を現ぜしものに
非るべき。之れ巢林子が社會劇に通じて何人も認むるを誤らざる所。吾は只二
三の例を引て讀者が類想に便ならしめしのみ。

よしや社會は吾人の自由を束縛せず、吾人が本能的感情に對してしかく反抗す
ること無しとするも、吾人は又此の不完全なる人間に免るべからざる過失の存在
は如何に悲惨なる結果を人世に持來るべきやを想見すべき也。巢林子は人間の

不完全なる動物なるを知れり。渠は人間が凡てに於て弱點を有し、知識、徳義、其他の上に於ても到底有漏煩惱の奴たるを免れざるを認めたり。故に此世にありて正義は必ずしも勝を占めず、正邪時に相轉じ、是非屢々相反し、孝貞節義の人、往々にして無慘の死に終ることあるを知れり。渠は、不完全なる人間が、不完全なる社會と相縷れ相纏れて、如何に往々不圓滿なる出來事を生み來たるか、又「偶然」が如何に悲むべき「必至」を生み來るか、錯誤過失となり過失罪惡を産み、罪惡遂に死を齎して純潔無垢の人、往々如何に耻づべき惡名の中に葬られたるかを注意せり。故に渠は、人世の缺陷を寫すは、世相の本體を顯はす所以に於て、缺くべからざることを覺識せり。見よ卯月の紅葉の與、兵衛は、只傳三郎が一片の奸言に欺かれしが爲めに、身は「公事巧」と誤られ、死に瀕して尙汚名を雪く能はざりき。今宮心中の二郎、兵衛は、只おきさと夫婦になりたさの一念に、淺慮の推量をなし、成るに垂とせる望を自ら絶ちて、人には盜人の申譯なく、惠比壽の森の露と消え果てぬ。柱曆のおさん、堀川波の鼓のお種は、偶然の不運にて其の清き體に終生雪ぐべからざるの汚點を印し、或は不義者と唱はれて世上に耻をさらし、或は自らヒ首を胸に貫きて其の情操

の潔白を表せり。權三とおさいは、身に露ほどの犯せる罪も無きに、浮世の義理と、夫の名譽の爲に、市の進が刃にかゝりて斃れたり、是等の人々は、よし多少の過失ありしにもせよ道義上より見たらんに、多くは純白無辜の人のみ。唯塵に不注意、淺慮等の瑣細なる錯誤によりて、其の第一歩を誤りたるが爲に、外形にのみ憑據して冷酷なる判断を下すなる盲目なる社會の慣習制裁の爲に、斯の如き慘劇を見るに至れるのみ。抑も社會の慣習制裁なるものは是非を混同し、醇偽を顛倒し、幾多の罪無き人を苦めても、猶且維持せらるべき者なるか。お種を刺殺せし彦九郎が、其の情を包みかねて「さほど母姉兄嫁を大切に思ふ程ならば、など最前に衣をさせ、尼にせんとて命をばなせに、貫ふてはくれざりし」と言へりしもの、眞に人の至情ならば、社會の制裁程悲むべきものあらじ。お種やお才や、所詮此哀むべき空なる名の犠牲となりしもののみ。情を枉げ、性に背くも、吾人が社會の一分子たるの故を以て、是非なく之に屈從せざるべからずとせば、之れ最早や制裁にも非ず、慣習にもあらずして、全社會が一個人に對する壓制として見るべきに非るか。罪の其性に本づくものは自ら慰むる所なきに非ず。斯の如き社會の制裁は、人を暗撃するに

同じ之れ悲寂中の尤も悲哀なるものには非るか。且夫れ個人と社會との對比は吾人が一身中にも之あり。よしや外界の事物敢て我を累はさずとするも我に具はれる不完全なる能力は到底吾人が理想的願望を現化するに適せず。吾は巢林子に於て印度思想に固有なる厭世的傾向の髣髴を認む。かゝる思想は巢林子が戯曲を貫きて終始渝らざる所のもの更に熟々其の人物の按配事件の終始等により渠が同情の趨向する所を察すれば吾は之に依傍して渠が厭世觀を想像せんと難きに非る也。

吁罪惡過失冤枉零落自殺是等の出來事は殆ど巢林子が社會劇に貫徹せる唯一の材料なり。社會いかてか只斯る悲哀のみに充滿せるものならん。花咲ひ月冴えて人世の樂地亦尋ね難からず。巢林子は唯其の暗黒なる半面を觀たるもののみ。渠は何故に喜ぶべきもの樂むべきもの笑ふべきものを捨て、故らにかゝる慘劇のみを擇みしか。渠が笑を寫せしは只其の涙をば一層悲しからしめんが爲のみ。若し巢林子を厭世の詩人なりと假定するに非ずば吾人は渠が戯曲の精神とも言ふべき此の悲哀的傾向を如何に説明すべきか。

斯の如く、一方には社會の制裁が積極的に他方には人事の錯誤が消極的に共に渠が厭世觀の構成を助くるに當り他に其の根柢を鞏固にする上に於て一大勢力を有するものあり。他なし渠が沒道義的傾向之なり。

吾は敢て沒道義と謂はずして沒道義的傾向と言ふ。巢林子が戯曲中吾は勿論多少の道義的分子の存在を認む。さりながら夫の大沙翁に於けるが如く最も重要なる戯曲的原理として認められたるに非ず、只自然の感情に隨伴して置に第二位以下の勢力を有せるが故にしか言ふのみ。げにや道義の觀念が一篇の原理となれる者は巢林子が戯曲に於て絶て見ざる所、只其の役目は自然感情を成功し調和する上に於て存す。之れ吾が先に言へりし如く、渠は人生觀の立點を主として幸福問題の上に置きしを以てなり。請ふ見よ、渠が戯曲の如何に沒道義に傾けるかを。其の社會劇の骨髄なる情死其の物は如何に。其の親を捨て、其の子を捨て、其の兄弟姉妹を捨て、人をも家をも其の戀人に思ひかへて、一念煩惱の奴隸と爲り了るは、よしや自殺の是非を基督教に問はずとも、已に之れ甚しき沒道義的なるに非ずや。愛情の爲に吾妻は人を殺せり、清十郎も人を殺せり、小かんは母に背けり、

忠兵衛は依託金を消費せり、宗七は海賊となれり。而かも作業の應報として、見るべきもの、凡て甚だしく意志と良心との間に於ける内面的煩悶の如きに至ては、極めて希なり。善を善として崇敬し、惡を惡として嫌避するか如き高尚なる道義の觀念に至ては、吾は巢林子が戯曲中絶て是なしと斷言するを憚らず。沙翁に曉通せる讀者は、必ずや此點に於て、二者の間に著大なる相違あるを認むるならん。

吾は、おしなべて純ばら道義の觀念に據りて社會を見る人において、は幸福問題に謂ふ所の人生觀なるもの無きを信ず。彼れは唯其の當に爲すべき事を爲すの外、人生の價値を上下するの權利を有せざれば也。彼れにありては、人生の問題即ち道徳の問題なり。之と同様に、吾は、只感情に憑りて人生を觀ずる人は、幸福問題に所謂る人生觀の外に超絶する能はざるを疑はず。彼は唯其の感ずる所を知るのみなれば也。厭世や樂天や、只此種の人に就てのみ言ひ得べきのみ。此の理を解せる人は、巢林子の沒道義的傾向が其の人世觀に幾何の影響を與へしかを想ひ見るべき也。

以上述べ來りたる所によりて、讀者は略々巢林子が人生觀に關する吾が意見を

知了せられたるならん。人は往々渠が文牒の渾然として鋒鏗を表さず、叙事亦多く平淡にして偏倚する所無きに迷ひ、直に以て沒理想の詩人となすもの、蓋し先入主となりて自ら沈思精讀せざるの弊に坐す。之を要するに巢林子は、沙翁がさなりと言はるゝ如く、沒自我の詩人にあらずして、儼然たる一個の厭世詩人なり。渠が此の人生觀の因となりしものは、自然感情にして、之が縁となりしものは、社會の制裁、人事の錯誤及び渠が沒道義的傾向なり。

吾は人生觀の上より巢林子と沙翁とを比較して以て此の論を終らんと欲す。蓋し此二人は其の戯曲的主義に於て已に根本的の差別を有す。即ち彼れは沒道義的にして、此は道義的なり。茲に道義的とは、言ふまでも無き事ながら、學校教師が倫理を講ずるが如きを言ふにはあらで、只其の目的が善惡の標準を明にして、徳義の永遠なる本體を發揮するにあるを謂ふのみ。故に沙翁にありて良心は先天的に無上の權力を有す。若し人此天性に背きて行動することあれば、其の結果内面的には良心の苦痛となり、外面的には宿命の魔力となる。故に苟も必然なる道義の命令を遵奉せざるものは如何なる英雄豪傑も、苦痛と死の應報を免れず。蓋

し。道義の沙翁に於けるは、猶感情の巢林子に於けるが如し。巢林子が道義を重ぜざるが如く、沙翁は感情を軽ず。夫のローレンスは初めは訓ゆるが如く、中には戒むるが如く、終には証るが如く、三度びロメオに向て愛情に迷ふべからざるを説けり。其語の中に言へるあり。

These violent delights have violent ends

And in their triumph die, like fire and powder,

Which as they kiss consume. The sweetest honey

Is loathsome in his own deliciousness

And in the taste confounds the appetite:

Therefore love moderately; long love doth so;

Too swift arrives as tardy as too slow.

(Romeo and Juliet. II. v.)

而して、斯く見る所の相違へるは、蓋し其の宗教の影響を受けたる結果なるべし。之れ、巢林子が愛情を本體とし、義理を假相とせしと、殆ど對角線的反對をなせり。

何となれば、沙翁が基督教の廣義に謂ふ所の詩人なるが如く、巢林子は佛教的詩人なればなり。漫に沙翁と巢林子を並び稱するもの、少しく這般の差別に住心する所あれ。吾は我が文學史上に假に一の沙翁を有せんよりは、眞に一の巢林子を得んことを望むものなり。

八 (題目本文共に缺く)

九 巢林子の女性

Von Sohn' und Welten weiss ich nichts zu sagen,

Ich sehe nur, wie sich die Menschen plagen.

— Goethe

一 巢林子が戯曲に於ける『人』

予輩は巢林子の戯曲を読む毎に、其の心容の如何に大に、其の同情の如何に博きかを想見せずんばあらず。須彌栴檀の山の月に色即是空を觀せし三界の教主を

想ふの心は、即ち相の山の辻歌に花一時を唱ふの心なり。櫻井驛の訣別に忠孝の義烈に感じたる涙は、即ち蜷川の夕風にまゝならぬ戀路を忍ぶの涙なり。吉野初瀬の名木も、畦の小路の名も無き花も、共に等しく彼を喜ばせしなり。都大路に青海の籬を捲上げて、月前に彈琴する深宮の上臈も、埴生の小屋に立かぬる煙に咽ぶいぶせき賤の袖男も共に等しく彼れを感ぜしめしなり。彼れは狹隘なる人爲の階級によりて人間に城壘を築き、若くは自が特殊の嗜好に準りて他を規するが如き種類の人には非ざりき。彼れは大沙翁に似て、廓大なる胸襟を披き、自由なる精神を以て萬象に接するの人なりき。是れはた眞に戯曲家の旨を得たるものと謂つべし。

蓋し戯曲の目的とする所は或る特別なる社會、又は人物に非ずして、一般人間にあり。社會の階級と時代の差別とを離れたる一般人間の本性真相を顯はすにあり。戯曲中の人物は、素より一定の時代、階級、其他百般の制限によりて各々其の假相を帯び來るも、其の發揚せんと務むる所のものは一般人間に平等なる真相ならざるべからず。故に戯曲の要は殊の中に遍を寓し、差別の間に平等を示すにあり。

外形の殊は内部の遍を顯はすの縁となるに過ぎず。故に凡て人性の本體を示すに適當なるもの、即ち之れ戯曲の適當なる材料なるのみ。多くの人は巢林子が戯曲的人物の殊に、其の女性の一般に卑賤なるを咎むと雖も、素より戯曲家として彼の價值を上下するに足らざるの俗論のみ。蓋し想ふに、封建時代にありては、社會的階級の區別、峻銳にして、上下永く相懸絶し、親和交際の機會に乏しく、嚴重なる慣習の制裁は、一般世事をして、一定の樊裏に沈着固定せしむるの傾向あり、此際一個の戯曲家として、人情の真相を發揮し、大多數の國民に向て、一般人間の希望と感情とを表白せんと欲するものは、其の材料を比較的尤も自由なる活動の範圍を有せる中等以下の社會に求めざるべからず。而して尤も多く人情の痛激なる活動を經驗するものは、中等以下の社會中、殊に揚臺狹斜の里たるべきは、素より論を待たず。果して然らば、巢林子が其の材料を主として遊里教坊の中に求めしは、管に批難すべきことに非ざるのみならず、却て寧ろ戯曲の目的を達する上に於て、最も適當の方便を取りたるものとして稱揚すべきに非ずや。夫の殿上高家の事情を寫すを以て一に高尚優美なりと心得る輩は、未だ共に戯曲を談ずるに足らざるもの

のみ。「二本指すを待、一本指せば町人と計り思ふか、大小は此の胸にある」(生玉心中
言簡の)とは誠に彼れが戯曲的人物の真相を言ひ盡したるものと謂ふべし。
今若し如何に彼れが幾多の貴びべき徳義を以て藝娼妓に歸し、又如何に其薄命
悲哀に對して痛切なる同情を表せしかを思へば、予輩は優に彼が心容の博大なる
を認むると共に、愈々彼れが眼中只天真の人性あるのみなるを知る也。讀者試に
「遊君三世相」を繙け。一般社會が等しく卑しとする遊女の爲、又遊里の爲に、境遇
が本性の上に如何の勢力を及ぼすかを示して、函人必しも仁ならず、矢人必しも不
仁ならざるの理に及ぼし、以て人爲的階級の必ずしも品格の高下を累さざるを説
けり。

偶々人界に生を受けながら、士農工商の家にも生まれず、又は琴棋書畫を事と
する身にもあらず、あるが中にも河竹の遊女は何の報ぞや。夫さへあるに自
ら古の仕業は憂き流より遣水の果さふらふ。此身のつらさは女郎より尙憂
きものとは人知らず。實に好色の世の中に誰が身の上も戀衣、いとしい事と
知りながら、身の役なれば君達をさがなくせいで竹はせねば、木竹の様に言ひ

なされ、心の外の罪つくる。勤め寂しき夕間暮是も遣手の科ぞとて、内の夫婦
の鬼顔は苛責の責より猶つらく、此世の地獄の情なや。遣手に種は、無きもの
を、欲より外は知らぬとて、人に疎まれ憎まる、這はそも何の因果ぞや。
傾城に誠無しと世の人の申せども、それは皆僻言譯知らずの詞ぞや。誠も嘘
も元一つ、たとへば命抛ち如何に誠を盡しても、郎の方より便無く遠かる其時
は、心矢竹に思ひても斯した身なれば儘ならず、おのづから思はぬ花の根引に
遇ひ、掛けし誓も嘘となる。又初より偽の勤ばかりに、遇ふ人も、絶えず重ぬる
色衣、つひの寄邊となる時は、初の嘘も皆誠、兎角戀路には偽も無く、誠も無し、縁
のあるのが誠ぞや。

「親里を振捨て、扇の影に給仕へ」川中に立ども人中に立たれずと迄賤まれし遊
女遣手の心事も斯く析き來れば元之れ本來一般の人情偶々境遇によりて其の常
體を變じたるのみ。巢林子が人性を見る概ね此類なり。されば遊女の娘に五位
の局は彼が眼には敢て不倫に非ず、何んぞ故らに古今集と明月記とを引て之を證
するを須るんや。昔者ブラキシテールがエヌス神の像を作りしや、其の模型を當

時の名妓フリチーに求めしが如く、巢林子は其の女性を遊女の間求めしは、少しも怪むに足らず。彼れは遊女の中に人間を見ればなり。

二 女子は如何なるものぞ

任他、女子はそも如何なるものぞ。昔の法師が言へりし如く、「人我の相深く、願に満たず、慾に慊らず、物の理を知らず、而かも頑迷にして訓ふべからず、そもすなほならずして拙きものは女子なるか。」花は咲きながら、藤、蔓のねじれたる如く、其の性は推なべて僻めるか。吁、何ぞ夫れ然らん、此等は只すなほならずして僻める一面を見たるに過ぎざるのみ。渠れ僻めるもの無きに非ず、されど渠の情は時として清きこと珠の如く、鮮かなること露の如く、累心刪韻の之に對して愧づべきもの有る也。渠れ理に冥きもの無きに非ず、超邁穎脱の才、縷心刻骨の勞は渠に於て見ざるところ。されど無心の裏却て天真の妙理あり、猶斷氷月に對して自ら鏡を爲し、餘雪蕭管に入りて自ら音を發するが如きもの無きに非ず。渠れすなほならずものあり、されど柔婉溫藉、言尙勝えず、一枝の紅杏曉露に惱て輕風の來り拂ふを待

つが如きあり。誰か女子を偽なりと謂ふ、其の偏に感情的なる、一度び情機の動く所、強て虚靜を装ふ能はず、天真爛熳として蓋著する處少し。渠はなべて感情の鏡なり、社會の生ける戯曲なり、一般人生の悲哀と希望とは最も明晰に最も忠實に渠によりて發揮せらるゝ也。渠は實に天成の戯曲的人物なりと謂ふべし。女子微りせば此世如何に寂しかりなむや。哀情、美はしきもの、樂しきもの、所詮女子を外にして何處より來る。天にありて星、地にありて花たるもの、人にありて女子に非ずや。何物の痴人ぞ、敢て猥りに「革囊、臭穢」と罵倒し去らんとする。

さるにても思議すべからざるものは、スファンクスと女子の性情とならん。女子果して柔順なるか、何ぞ其の僻めるや、睚眦の怨も渠は執念深く記憶して復讐せざれば已まざる也。渠を以て蛇に比するものは、慥に其の半面の真相を示せる也。渠の性果して皎潔なるか、何ぞ其の陰險耻を知らざるや。動もすれば渠は清きものを惡み、正しきものを疑ひ、幸なるものを猜み、自利を謀るに倦むことを知らざるなり。臭鼠の瑣尾を捉へて毀憂夜を徹し、成心己に構へて人を待つ、訓諭は只其の迷を深うするのみ。渠れ果して智慧あるか、何ぞ其の事理を解せざるや。渠は情

偽を察せず、利害を窮めず、一氣熱し來れば渠の眼は見る所なく、渠の耳は聽く所なく、渠の心は石の如く木の如し。渠れ果して怯懦、勇無きか、何ぞ其の志の一徹にして奪ふべからざるや。威武屈する能はず、富貴誘ふ能はず、節義凜然、鬚眉尙愧色あるものあり。渠は醇なるが如くにして而かも偽なるが如く、驕なるが如くにして而かも謙なるが如く、思慮深きが如くにして而かも行爲謀無きが如し。渠れ畢竟何物ぞ。誰か此のスファンクスを解するのエデブスぞ、巢林子は如何に之を解せしか。

三 愛と名譽

愛の詩人なる近松は亦、女性、の詩人なり。愛情は女性によりて最も多く發揮せらるゝものなれば也。彼れは愛を以て女子の本性と爲し、之に配するに名譽心を以てせり。渠にありて名譽心は他人に賞揚せられんと欲する積極的願望に非ずして、只他より悪く言はれざらんと欲する消極的意思に過ぎず。巢林子は此の二者を以て女子の二大特性と爲せり。愛を以て女性を説かんとするは素より創見

に非ず。只其の生ける戯曲的人物によりて其の特性たる所以を説明したるもの、古來幾人かある。予輩は巢林子が單に之を認めたるを稱するものに非ず、唯を實際に描きたるを甚だ多とするのみ。乞ふ彼れが如何にして此の二大特性によりて女性を活動せしめたるかを見ん。

凡て人間の動作は慾望を満足せんとするの手段として、見るを得べし、而して此の慾望は女子にありては概ね保守的なり、消極的なり、受動的なり。渠は新しき慾望を満たさんとせんよりは寧ろ既に得たる幸福を失はざらんことを務むる也。故に渠の心は容易に外物に適應し、其の力の及ぶ範圍内に於て其の小やかなる満足を求む。斯の如くにして一度び其の満足を得るや、渠は全幅の精神を傾けて之を修飾し、醇化し、美化し、茲に自己の外は何人も想像する能はざる、一個の樂園を成就す。運命の前には渠は從順なる奴隸なり。此の屈從は渠にとりて苦痛に相違なきも、渠は幾も無く此の苦痛の中に幸福と満足とを認むることを誤らざるなり。然れども愛情の前には渠は專横なる君主なり。愛情の自由獨立の爲には渠は生命を賭して之を争ふ。渠は一點塵の之を累はすだも容さざる也。

渠の満足は廣さの中に在らずして、寧ろ深さの中にあり、大さの中に在らずして、寧ろ強さの中にあり。故に一朝此の満足を失ひたる時は、其の悲哀自ら深刻にして、其の間往々思慮考察の餘地を残さず。之れ女心の「徹にして、思返の無き」所以なり。男子にありては則ち然らず、世界は其家なり、あらゆる人は其の友なり、夙に世路の辛酸を嘗め盡し、人生の流轉に遇て多く驚く所無し。故に心自ら開瀾にして物に拘泥せず、失敗の後には回復あり、失意の後には希望あり、彼れは得と失とに對して甚しく關心せざる也。然れども女子は全く之に反す。庭前盈尺の地は渠が世界なり、愛は渠が唯一の希望なり、淵瀾定めぬ人世に在りて平和と笑とを以て此の小樊籠に満足し、敢て外に求むる所無きは、所詮此の愛の中に無上の満足を夢ればなり。故に一旦愛を失はんか、日月輝かず、花鳥笑はず、天地は渠にとりて暗黒なり、渠は只剃刀を執て已まんのみ。之れ實に一般女子が性情ならずや。

予輩は、巢林子が這般の委曲に深く住心せしことを多とするものなり。げにや、彼れが女性は無邪氣なり、溫柔なり、あらゆる女性の弱點を有せり、其の理性も常に其の女らしきを失はず。其の關する所は己の身に非ざれば己の家族なり、此等の

事情相經緯して愛情の活動を合成す。故に彼れが女性の千緒萬端の行爲の情機は、尋ね來れば一として愛の大根本に歸着せざるは無し。彼れは女性に特有なる不注意を以て強大なる愛が理性の光を暗うしたる結果なりとせり。彼れは女子にして若し勇氣あらば、そは愛の感激に本くべく、女子にして女らしからざる罪惡を犯さば、そは愛の眩惑に因るべきを信ぜり。彼れは又

四 嫉妬は愛の反面

なるを最も明晰に表現せり。蓋し財を欲せざる者は他の富を羨まず、他を愛せざるもの、若くは他を愛せんと欲するの情無きものは、他を嫉妬するの謂れ無ければなり。仔細に觀察すれば、嫉妬に二様の別あり、一は積極的の嫉妬にして一は消極的の嫉妬なり。夫の二女子一男子を争ひて相嫉妬するの情は前者なり。若し夫れ自家胸裏の愛情尙未だ其對象を見出さず、戚々として隱に忡傷するの時に當り、他の纏綿たる情交を見る時は、自己が孤介の狀に比して羨仰欽慕の餘り、翻て嫉妬の情となる所謂法界悋氣なるものは即ち後者なり。今嫉妬と愛情とを較ぶ

れば一見相貌相異なるが如しと雖も、其實は同一物の兩面に過ぎざること、猶彼の花絨の表面に薔薇の花と刺とを織り成せるものは、裏面にありては素同一の彩絲なるが如し。其の花を喜て其の刺を憎むものは、眞に薔薇を愛するものに非ず、其の笑を好て其の涙を嫌ふものは、眞に人を愛するものに非ず。陰となり陽となるは、素之れ偶然の縁のみ、嫉妬と愛とは元來兩岐なし。人は、嫉むこと無くして愛すること能はざれば也。

巢林子は已に愛は女子の本性なるを認めたるを以て、同時に嫉妬も亦女子の本性なるを認めたり。彼れは強大なる嫉妬は即ち強大なる愛情を證するものと信ぜざるを以て、強大なる愛情を寫すに數々強大なる嫉妬を以てせんことを務めたりき。『琴のつれびき、ついまちの歌かるた』に後庭の人を羨殺せし窈窕たる淑女と、『愛と妬みと浮世のつらさ』に身も世も忘れ、『天も落ちよ、地も裂けよ、山崩れて落かゝり世繼が五體碎けよかし』と咒咀せし狂亂の妬女とは、抑も何等の相違ぞや。而かも同一玲瓏、姫たるに於て失ふ所無し。『取て囃まうと言ましたか』と影なき人に吠えし、おまん、實に取て囃まんまでもお蘭を嫉み、而かもお蘭を嫉みし丈け事助を愛

せしは言ふまでも無し。『祈りものけたい戀の敵』に表面の情の偽なりしことは素より、『法界恪氣』の腰元共の言を待たず、深窓琴を撫して『夕べくの涙川』を歌ひて、置に懷を遣りし一少女、花情柳態殆ど春に堪えざらんとす。而かも波れ豈、仇と情と怨念の三つの鐵輪に燃ゆる火』に戀の敵咀ひし小島が崎の狂鬼女に非ずや。

名譽心は愛を外にして別に存在するものに非ず。女子は男子よりも一般に名聞を重ず。然れども所謂る名譽心の主とする所は、其の愛の品位と純潔とを保存するの謂に外ならざるが如し。蓋し愛の物たる神祕言ひ難し。予輩自ら其の然る所以の理を知らずと雖も、蓋し戀心の第一義は、所詮吾が愛する人をして常に自己の心情の純潔なるを知らしむるに存し、他を排して己を利せんとするが如き、陋劣なる人我的意志は、自らは實に之を有するも、他をして之を知らしむるは、其の最も忌避する所なるが如し。故に、其の戀人に對しては、不仁者も仁者となり、不義者も義者となり、怯夫も勇夫となり、小人も君子となる。戀する人にとりては、其の愛する人に賤めらるゝ程苦しきこと無ければ也。故に日夕奕々として憂懼する所は、其の戀人が自己を輕蔑するの理由を發見するにあり。今夫れ愛情ありて茲に

嫉妬あり、嫉妬は愛情の反面に過ぎずと雖も、畢竟利己排他の願望に外ならず。故に他の爲に自己が嫉妬の情を知らるゝは、即ち自己の卑陋なる心事を表白するに異ならず。況して其の戀する人の爲に之を知らるゝは、即ち己れが愛せらるべき價值無きことを自らの口より懺悔すると一般なりと謂ふべし。之れ戀する人が其の全力を傾けて嫉妬の情を掩蔽し、具に靜平を装はんと務むる所以なり。

得意の愛は女子の最大幸福なるが如く、失意の愛は其の最大不幸なり。而して得意の愛より生じたる幸福は女子の最大名譽なるが如く、失意の愛より得たる嫉妬は其の最大耻辱なり。是故に女子の名譽心は主として他の前に其の嫉妬の情を抑制し、他をして之を覺らざらしめんとするの盡力に存す。故に名譽心も亦愛情に本くものにして、之を喻へんに一度び反射したる光線の如し、其の進行の方向は全く相反するも、所詮其の本體は愛情なり。蓋し愛は女子の實性にして名譽心は假性なり。愛は放縱恣睢にして節する所を知らず、之を抑制し調和するものは即ち名譽心なり。愛は多く破壊的にして名譽心は多く構成的なり。作用に於ては、愛は常に積極的にして名譽心は消極的なり。所謂る「まいならぬ」とは愛が名譽

心の束縛を脱せんと欲するの歎聲にして、所謂る「浮世の義理」とは名譽心が愛を抑制するの羈絆に外ならず。仔細に巢林子が女性を観察すれば、予輩は此の二者が女子の胸中に輾轉反側して相煩悶するの情状を見るに難からざる也。

五 『天の網島』のおさん

乞ふ予輩をして巢林子が女性の一例として『天の網島』のおさんを取らしめよ。蓋し之れ彼れが女性中最も善く寫されたるものゝ一なり。抑もおさんは、夫治兵衛の放逸度なきを憂へ、小春に乞ふに治兵衛との縁を切り呉れんことを以てせりき。良し其の口を藉る所は如何に立派なるにもせよ、其の形跡の嫉妬に類するとは争ふべくもあらず。家の爲、夫の爲にと言へる口の下に、誰か「我身の爲」を認めざるものぞ。「嫉妬は女子の役」ながら、他人殊に愛の競争者とも謂ふべき小春に、明々地に斯かる事を表白するは非常なる耻辱に相違無し。渠女は此の時、其の名譽を擧げて小春の掌中に托したる也。此の忍び易からざる耻辱を忍び、此の爲し難き事を爲したるは、勢洵に已むを得ざるに出づ、必しも小春を信じたるに非ず、必

しも其の然諾を豫想せしに非ず。されば殺活浮沈の機實に小春が一片應答の上
に懸れりしなり。小春が義理を重じて其の依囑を容れ呉れしを見て、おさんは如
何に其の高義に感ぜしぞ。此の大耻辱より己を救ひたる小春は、今や渠女が大恩
人となれり。渠女は今や治兵衛と共に小春を愛せる也。先の嫉妬の心は今や純
然たる友愛の情となれり。是を以て夫の述懐を聞くに及び、

「ヤ、夫れなればいと、しや、小春さんは死にやるぞや、

と絶叫するも敢て怪むに足らず。「あの無心中者何の死のう」と嘲けらるゝに及び、
渠女争てか義として否寧ろ情として、小春を辯護せざるを得んや。是を以て自己
の未來を慮るに遑あらず、情義に感激したる一念は渠女をして一切のことを治兵
衛に打明さしめたり。

いやそふでない、私が一生言ふまいと思へども、隠し包てむざむざ殺す、其の罪
も恐ろしく、大事の事を打明る。小春殿に無心中芥子程も無けれ共、二人の手
を切らせしは此のさんが機關かんばん。こなさんがうか／＼と死ぬる氣色も見えし
故、あまり悲しさ。女は相見互ひごと、切れぬ處も思ひきり、夫の命を頼む／＼

と口説た文に感じ、身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合、思切
るとの返事、私しや是れ守りに身を離さぬ。是程の賢女がこなさんと契約違
へ、おめ／＼太兵衛に添ふものか。女子は吾れ人一むきに思ひかへしのない
もの、死にやるわいの／＼。ア、瓢ひょうなこと、何卒どぞ助けて／＼。
斯く彼女は其の私財を擧げて小春を請け出すの資となさんと決心せり。其の身
の晴衣は勿論

是を曲ては勘太郎が手も綿もない袖なしの、羽織もまぜて郡内の始末して着
ぬ淺黄裏、黒羽二重の一張裏、定紋丸に蔦の葉の、のきものかれもせぬ中は、内裸
でも外錦、男鎊の小袖まで、さらへて物數十五色。

無いものまで有る顔して、夫の名譽と自己の義理を世に立てんとせり。而かも小
春を請け出して扱其の後はなど云ふ未來の事に考へ及ばざる也。小春到底治兵
衛と絶つべからず、絶つべからざればこそ請出さんとは務むるなれ、而かも渠女は
這般の影響に慮り到らざる也。治兵衛より

手附渡して取とめ、請出して、其後、聞ふて、お、か、内、に、入、る、に、し、て、か、其、方、は、何

となることぞ。

と言はれて「はつと行當り」

アッアそうじやハテ何とせふ子供の乳母か飯焚か隠居なりともしませふ。

と「わつと叫びて伏沈む」。吁、此の刹那の渠女が心はそも如何なりとするぞ。然り、渠女は眞に小春をいとしがれり、然れども所詮只義理として之をいとしがらしのみ。女子の名譽を賭して一切のこと小春に打明けしも、小春の情義に感じて眞に之を憐むに至りしも、はた家を傾け産を蕩して小春の死を救はんと務めしも、所詮治兵衛の愛を復したきが爲のみ若くは少くとも復すべきを信じたるが爲のみ。渠女は一切の事物を釣懸して以て其の夫の愛情に換ゆるに忍びしなり、一言すれば、渠女が小春を愛せしは、治兵衛を愛せしが爲也。若し爲に治兵衛の愛を失はんとならば、渠女寧ろ小春を憎まんのみ。「女子は吾れ人一むきに思ひかへしの無きもの」小春を救んとする念の切なる渠女は、自己の身も治兵衛のことも全く忘れたる。「請け出して扱其後は」の一語と共に、渠女は一彈指の間に其の現實の境遇を自覺せり、而かも痛切に自覺せり。吁、小春を救ふは即ち治兵衛の愛を失ふ所以なる

を覺りたる此の刹那にありて、渠女の心臓は如何に鼓動し、渠女の血液は如何に逆流し、渠女の精神は如何に錯亂せしや、いかにぞ「はつと行當り」らざるを得んや。予輩は思ふ、此の際渠女が眞の「我」は殆ど此計畫を放棄せんとせしに非ざるか。只名譽の一念、渠女を驅りて此の小献身的義膽を顯はさしめしに非ざるか。自己の現境を自覺して「アッアそうじや」と悟りたる渠女の心中は、忽ち名譽と愛情の争闘を示し、渠女をして「ハテ何とせふ」と歎息せしめたり。「子供の乳母か飯焚か隠居なりともしませふ」と言ふに至ては、渠女の心中に於て、流石に名譽の一念の遂に愛情を抑制したるの蹤跡を見るなり。洵に自然の徑行と謂つべし。

乞ふ予輩をして女子の特性の一なる不注意をば近松が如何に寫せしかを觀せしめよ。其の一例として、

六 『出世瀧徳』の吾妻

を取らひ乎、渠女は其の情郎の窮困を見て其のいと、さに堪えず、咄嗟の間に二百金を調達すべきを受合へりき。身はまゝならぬ遊女なり、そも如何にして斯る

大金を調へんとせる。げにや渠女は何の術も知らず、又考へず、恐くは然諾の刹那にありては、其の出来得べき萬一の望だに胸裏にあらざりしならん。而かも渠女は漫に口舌を以て受合ひしにはあらで、滿幅の誠意を捧げ、斷々乎として其の必ず調達すべきを決心せりしなり。其の能ふべき望だに無く、しかも斷じて人と契る、そも何等の不注意ぞや。是れ猶不合理なる大前提より合理的結論を予想するが如し、勢ひ不合理なる小前提を用ひざるべからざる也。吾妻が藤五郎を殺せるは實に自然の結果のみ。藤五郎の胸上に跨りて自刃を擬し、

御身に恨も罪もない、假にも惚れて呉れた人、殺したうは無いわいな。殺さるる御身よりは殺す我身が悲しいと涙は刃に傳へしかなる生置いては請出して女夫になるが情ない。私には大事の男がある。其男と縁切れる戀路の仇となる故に今刺殺す。懐中の小判は貧な男に遣りたい、殺生の罪、盜の罪、男の爲につくる心少しは恨を晴れてたも。

と辯解するに至ては何ぞ其の心のやさしきや。そもや渠女は人を殺して後は如何せんと思へりしぞ。終歌の地人を殺して身の全きを得べしと思へりしか、將た

其の罪に連坐せざるまでも、盗み得たる金の却て情郎の累と爲らざることを如何にして知り得たるか。心なきも甚しきかな。然れども深く怪むに足らず、吾妻は其の戀人を見て其の他を見ざれば也。「殺生の罪、盜の罪、男の爲に作る心」既に此一事を意識す、渠女は天地に俯仰して疚しき所なし。愛はあらゆる罪の辯解者なればなり。書して茲に至れば予輩はヘスター・ブリンが、

吾等の爲せし事は其れ自らの純潔を有せり。

(What we did had a consecration of its own)

(—Hawthorne's Scarlet Letter)

を想ひ出さずんばならず。あゝ此の世にありては罪と愛とは常に不幸なる伴侶なり。吁之れ愛の罪か、社會の罪か。

七 『槍權三重帷子』のおやう

『槍權三』のおやうは最も善く世に有勝ちなる女性の不注意を示せるものなり。渠女は貞操に於て缺くるあるに非ず、其の夫を思ふの情は普通の女子よりも寧ろ篤且實なるものあり。只其の心愛情に充てるを以て其の舉措は總じて愛嬌あり

過ぎるなり。而して渠女は斯る性質の女子が以て其の身を節制すべき嚴格なる素行に乏しきなり。一言すれば渠女はし、ま、り、無、き、な、り。

おさいは流石茶人の妻、物好もよく氣も伊達に、三人の子の親でも、さやしや骨細の生れつき、風忍ばしく床しくの、三十七とは見えざりし。

數句能く其の人と爲りと容貌とを寫し得たりと謂ふべし。渠女は其の娘お菊の年十三なるに權三を添はせんと欲し、頻に權三の器量を褒めたる後、お菊の娘氣に結婚を否むを見、

そなたがいやなら母が男に持つぞや。ほんに市之進殿と云ふ男を持たねば、人手に渡す權三様じや無いわいな。

と事も無げに言廻せる氣輕さよ。斯かる言語は苟も人の母たるものが其の子の前に於て發すべきものならんや。權三に遇て其の娘の結婚の約を結び、

まづ娘には遇はせませぬ。私に似たらば格氣深からう、臨へ心散さず一筋に頼みます。悪性があつたらば此の姑が格氣の腰押し、お持たせの名酒お前と私が此樽にかう手をかければ契約の盃した心。

蕭洒治靡の態度、之れ謹厚の女の爲すべき所に非ず。權三が茶の湯の秘書を見んことを請へるを許し、良人越在の空宅に於て深夜引見の約を爲すに至ては、不注意も甚しと謂ふべし。而かも渠女は自ら其のし、ま、り、無、き、に心付かざる也。約を履み夜を冒して來るに遇ひ、直に數寄屋へくくと手燭片手に傳授の箱、二人忍びし有様は、伴の丞ならざるも誰かは「影は障子に男と女、忍びあふ夜の私語」と疑はざらんや。而かも渠女は其の不注意に心付かざる也。權三が他に情人あるを知りて嫉妬の念に堪えず

是れ見よがしの其の帯は、定紋の三つ引と裏菊とふじたゝるい引並べ、誰が縫た、誰が遣つた。

と問ひ詰め、「之には様子があゝ」と言へば、「様子といふが妬ましい」と泣きつき、腹立ちまぎれに權三が帯を解て中庭に投じ、權三が庭に下りて之を拾はんとするを引とめ、

あゝ帯に名殘惜いか、不肖ながら此帯なされ、一念の蛇となつて腰に捲付き離れぬ。

と叫ぶに至ては狂態極まれりと謂ふべし。惟ふに嫉妬の一念は渠女が爲に渠女自身の別世界を作りし也。其の眼中に只其の娘の愛あるのみ否己が胸に燃ゆる愛情の焔あるのみ。渠女を圍繞せる天地は滅したり、渠女は最早や現實界の人に非ずして理想界否寧ろ夢幻界の人となれる也。何の違ありてか屑々たる俗縁に拘泥せんや。深夜空屋に美少年を引入れて少しも願みず喧争席を擾し衣襟寛濶して少しも憚らず、伴の丞の爲に權三と己の帯を拾はれ、市之進女房笹野權三不義の密通』と高呼せらるゝも尙少しも恐れず、渠女は其の内心に對して疚しき所なければなり。流石は權三は男子なり、南無三伴之丞、弓矢八幡通さじと刀引抜き障子蹴破り飛出て』しが其の嫌疑の遂に釋くべからざるを知り自殺して其の身の潔白を示さんとせり。おさいは是の時如何にせしぞ。渠女は尙昏々として其の理想界に夢みついあるなり、權三の煩悶は渠女に於て解すべからざりしなり。されば渠女は亂心の人を諭すが如き口氣を以て驚慌の權三を止めて曰く、

此やどうじや不義者は伴之丞身に曇り無いお前に何の過り死なうとは。可憐なるおさいは只中心の清きを見心以外別に社會に制裁あることを忘れたる

也。

一言すれば、渠女は其の身の實境を自覺せざる也。權三が

ア、おろかな、兩人の帯を證據に取られ、寢亂れ髪の此體誰に何と言分せん。もう侍も廢つた。御身も人畜の身となつた。エ、く、無念や。

と憤慨するの刹那、おさいは俄然として初めて現實界の我に復れり。是と同時に、渠女は恐るべき而かも動かさず、べからざる未來の運命の宛然として眼前に横はれるを見たり。渠女は落膽せり、戰慄せり、悲泣せり。猶之れ、深宵床を離れて夢遊せし人が忽然醒め來りて、身の何時しか萬仞の斷崖に懸り、進退活路なきに心付き、且惶れ、且悲み、爲す所を知らざるが如し。

扱は、お前も私も人間はづれの畜生になつたか。

之れ世界に於て尤も悲しむべき語の一なるべし。扱は「嗚呼何ぞ此扱は」の遅かりしや。渠女は人の妻として人の母として、はた一個の女子として享受し得べき過去、現在、未來の三世に渡れるあらゆる希望と幸福とは擧げて此の悲むべき一語の犠牲と爲り了りたることを痛切に自覺せり。而かも一死以て冤枉を雪がんと欲し、尙後顧の情に忍びず。

思はぬ難に浮名を流し、命を果すお前もいとしいが、三人の子をなした二十年の馴染には私しやかへぬぞ。

と言ふに至ては人情最後の絶調、予輩毎に巻を掩て言ふ所を知らざる也。

女子を殺すものは愛情のみならず、名譽心亦之を能くす。巢林子が世話物中の女子は多少名譽心の爲に動かされざるもの無し。

八 『宵庚申』のお千代

は其の最も適切なる一例なり、渠女を殺したるものは實に名譽心に外ならず。

『宵庚申』は他の心中物に異なれる一種の特色を有する者なり。げにやお千代は情に死せり、されど渠女が半兵衛に於けるは、小春の治兵衛に於ける、お房の徳兵衛に於ける、若くはおさが、お島の嘉平次、八郎右衛門に於けると、同一の關係なるか。否々然らず。要するに彼等は愛の爲に死したりき。されどお千代にありては則ち然らず、『かるく』ながら三度の嫁入に、心詫しき跡も見せず、或は飽かぬ別れに浮世を啣ち、或は歸らぬ死出の途に夫を送りて、身は葬の定めなく、縁も因もなき半兵

衛に嫁してより僅に『足かけ二年』、『良し』お腹に四月唯もない身なりとも、予輩はかかる夫妻の間に純潔無二の愛情の存しがたきを思はざるべからず。但し相縁奇縁の世の中に、渡頭舟を同うして一見傾蓋の思あるものなきにしも非れども、そはまことに例外の事のみ。そもや夫の留守に暇をくれる姑心、お千代誠に半兵衛の愛を解せば、毫末だも其の夫を恨む由やある。何事をも知らぬ半兵衛が其の家に立寄りて、『ヤアお千代爰に居るか』と呼はりし時に、眞に膠漆の情ある夫妻ならんは、當に急遽走り寄り相抱て衷情を訴ふべし。一言の挨拶だにせず、夫の言を『聞捨て物をも言はず、直と入り、障子をはたと引立』たるお千代の心中には、幾何眞に半兵衛を愛するの情ありとするや。渠女の眼には半兵衛は『去状さま』と見えざるまても、其故を問はゞ、少くとも『譯聞きたくば、此方の心におとひなされ、人の知つた事の様』に『と空笑せんこと疑無し。如何ぞ嬌羞好て人を避くる少女を以て、三度お家を換へしお千代に擬するを得んや。お千代は半兵衛が己を知れる程だも半兵衛を知らざる也。』足かけ二年の馴染、子までなしたる夫の心、知ても言譯して呉れぬかと怨みし半兵衛は、少くともお千代を買被りしなり。お千代は眞に眞に半兵衛を

知らざりしのみならず、彼を疑へり。祇王を以て己に擬せし渠女は、眞に暴戾無情なる清盛を以て半兵衛に擬せしならん。渠女は清盛に泣きしにあらざして、定め無き『女の習』に身の薄命を寄せしのみ。人己に相信せず、疑心早く情を隔つ。其間如何ぞ眞の愛情なるものを容れんや。お千代己に眞に半兵衛を愛せず、愛情の力は以て渠女を殺すに足らざるなり。然らば則ち何物か渠女を殺したる。名譽心是れなり。

予輩の先に言ひし如く、愛は女子が精神的生命なり、是を以て愛の品位と純潔とを保つは、勢ひ女子が第一の動機にして、苟も之が累を爲すものは其の最大恥辱として忌避する所なり。愛の純潔を累すの大なる蓋し離婚に若くもの無かるべし。結婚は女子にとりては、猶愛情の試験の如し。之に落第せるもの、即ち離婚せられたるものは、即ち公然事實の上より女徳に於て缺くる所あるを證明せられたるものに外ならざればなり。其の内情は如何にあれ、お千代は一度ならず、二度までも此の試験に失敗せるものなり。女性の名譽の上、二回の大打撃を被れる、渠女は垢を含み恥を忍び、其の最後の運命を半兵衛の掌中に委ねたり。是時に於て、お千

代の胸中を察するに、恐くは其の名譽を回復するに之れ急にして、夫に對する愛情の如きは、太だ住心せし處に非るべし。猶之れ數回の試験に失敗せる學生が偏に及第をのみ希望し、其の成績の優劣等に就て特に注意する所なきが如きなり。想ふに、お千代は半兵衛の愛を維持せんが爲には出來得る丈けの力を盡したるべきこと素より論無し。されど之れ素半兵衛に對する眞摯なる愛情より出てしに非ずして、只彼れの愛によりて夫妻の關係を固うするに在りしこと亦敢て疑を容れず。故に半兵衛を愛せしと言はんよりは、夫妻の關係其物を愛せしと言はん方、一層妥當なるべく、夫妻の關係其物を愛せしと言はんよりは、其身の名譽を愛せしと言はん方、尙一層妥當なるべきなり。之を以て一旦姑の爲に、是非なく離縁せらるるや、半兵衛の眞意如何の如きは問ふに違あらず、表面上夫妻の關係無き以上は、渠女は路傍の人よりも太だ多く半兵衛を愛するの意なきなり。宜なる哉、半兵衛に逢て、物をも言はず、障子を立切て、遽々然として立去りしや。

さはれ、お千代の愛情を想ひ遣れば、眞に憐むべきものあり。生まれて女子となり、誰か愛情なからん、お千代や二度び其の夫に見え、生離、死別、幾度か其の棲を變て、

而かも其の居を安ずる能はず。渠女實に愛せんと欲するも愛するに能はざりしなり。猶春に後れし蛺蝶、風に折れ霜に瘦せ、秋氣落実として徒に衰殘の黄花を擁するが如し。渠女の半兵衛に於ける愛せざりしに非ず、實に愛するの力無かりしなり。渠女の爲し得る所は、只其の毀損せる名譽を回復せんと務むる一事あるのみ。進ては愛する能はず、而かも退て名譽を保つ能はずんば、お千代たるもの只一の死あるのみ。柔婉温籍なる女子の身を以て、慘酷無慈悲なる社會に立ち、争てか此の大耻辱を忍び得べけんや。已に愛を失へるや、お千代は半ば死せり。名譽を失ふの日は即ち其の全く死するの日なり。「心中宵庚申」は實に此半死の人が苦悶して全死に終るまでの一大悲劇なり。

『五月雨ほど戀ひ慕はれて今は秋田のおとし水』三度迄去られし身の三界に住むべき家なく、戻るは元の親の家。「駕籠の戸明くれば打濁れ、目元しほる、縮緬の二重廻りの抱帯、涙の色に染かへて泣くく出」てしお千代の心中はそも如何なりしぞ。姉の間に包み得て「耻かしいや又去られて」と答へし渠女の胸をば、離婚の一念は如何に蛇の如く纏ひ苦めけん。

なうお千代、五度三度の聲入嫁入も世にある慣とは言ひながら、悪いことは手本にならぬ。耻かしいく、と口で言ふ計りが耻を知つたと、言はれふか。和女もかるく三度の嫁入。尤始めの男道修寺町伏見屋の太兵衛殿心ぶしように身躰を持ぐづした、ずみもない様に成り、あかぬ別れ。其次は死別れ。互に難は無けれども、人は和女の辛抱がないゆへに去られたく、と批難付、此度の嫁入も追出さるゝに間もあるまい、忘れて島田平右衛門が娘の風下に居るなど、娘持た人々は寄合茶呑咄にも和女の噂。ま一度戻ては親兄、弟人中へ顔が出されぬとは知りぬいて、火に入骨を碎かるゝとも歸るまい、必ず去られて戻ると、念に念をつがふた、今度の嫁入。よう戻りやつた。父様おさきなされたら、お悦びなされうぞ。

お千代はそも如何なる感情を以つて姉が此諷誡を聞きしぞや。「耻かしい耻かしい」と口で言ふばかりが耻を知つたと言れふか」とは、渠女の耳には何ぞ「死んで耻を知れ」と迫らるゝに異ならんや。

心は若かりし昔にかはらず、氣も強く、義理にもひかれ、おのれ重ねて去られた

ては此の一語は之れ最高の法庭に於ける死刑の宣告に外ならざりしなり。吁々
愛は失はれ。名譽は毀たれ。倚るに人なく歸るに家なし。三界牢廓として夫れ何
くんか適かん。高絶無情の天を仰で感愴すれば人は只一死あるのみ。お千代の
如き眞に憐むべき哉。

第一期

明治二十八年九月より
明治二十九年十月まで

運命と悲劇

昔者フキデアス雷神ツキイヌの像を造る。工成り、將に之を殿堂に安置せんとするや、彼に像前に佇立して凝視沈想すること多時、敬虔の情自ら禁ずる能はず、覺えず地に跪き、双手を舉げて叫んで曰く、賤匠の作能く神意に協ふことを得たりや否やと。何ぞや、蓋しフキデアスは自己より大なるものを造りたればなり。

自己より大なるものを造ることに於て、悲劇家は、美術家に異ること無し、何となれば、彼れは運命を顯はすものなればなり。

夫れ運命は悲劇の骨髓なり、生命なり、運命なきは即ち是れ悲劇無きなり。然るに希臘古代の運命劇一び評論家の非認する所となりてより、近世劇を言ふもの靡然として一に性格を旨とす。而かも運命主義の最大なる發表者たるに於て、大沙翁は毫もソフオクレエス、エスキラスに譲らざることを認むるもの甚だ少し、是れ予輩の潜に怪訝に堪えざる所なり。近來我が作劇家の指を悲劇に染むるものも、偏に性格を重じて深く意を運命に住めず、遂に此の悲劇の第一義を逸し去るは洵

に惜むべしとなす。されば今日悲劇と運命との關係に就て一言するは、予輩其の不急の辯に非ざるを信ずるなり。

想ふに、世事の常無くして人生の長へに流轉するは苟も生を觀じ世を念ふ人の容易に認むる所なるべし。然れども一ひ皮相の見を離れ、熟々沈思靜觀すれば、必ずや人世を營むものは偶然徒爾の事件のみならず、常住不易なる或物の其の間を貫通するものあるを見む。更に之を諦視し、洞察し、具に其の幹枝を尋究すれば、先の無常偶然なりと思はれしもの、多くは避くべからざる必然の行路を經過して、各々其の始終を遂げたるものなることを發見すべし。更に又縦に歲時に繋げ、横に方處に涉り、古今東西の史乘に照らして、審に人生興廢の跡を察すれば、是常住不易なる或物は、萬千不同の世事を綜べ、殺活喜憂の樞機を握り、己に反するものは之を斃し、己に順ふものは之に福し、成敗著落の跡、今にして之を見れば儼として一絲の増損を容さざることを悟了すべし。是の古今を通じて人世を統轄する常住不易なる一物の存在を認識したる人は、即是れ運命の存在を認識したる人なり。然らば則ち吾人の所謂運命は何處に存するか。曰く、人世を外にして、運命な

るものあらざるなり。所謂人道は吾人を支配するの運命なり。然らば則ち人道は何處に存するか。曰く、人間を外にして、別に人道なるもの有らざるなり。所謂の性格は吾人の胸裏に存する人道なり。是故に人間ある所即亦運命なかるべからざるなり、請ふ少しく之を説かむ。

人類はあらゆる生物と共に、偶然にして生息する者に非ず、或る最終の目的即理想に向て精進する者なることは、之を過去の歴史に鑑み、之を現在の状態に察し、炳焉として争ふべからざるの事實にして、今日最も進歩せる哲學者、倫理學者の等しく認むる所なり。抑も何者か吾人に是の如き進歩的動機を與へたるか、何故に吾人は是の理想に向て不退轉の精進を爲さざるべからざるか、將た又是の理想の如何なるものなるかは、今日人智の能く説明する所に非ずと雖も、兎にも角にも斯の如き進歩的動機の先天的に人性中に存在すること、又人間の諸々の歴史は、所詮是の動機の活動に驅られて、人生の理想に到達せんとするの盡力に外ならざること、は今日あらゆる學問の證明する所なり。人間社會に在りて所謂人道なるものは、個々の内性に存在せる、是先天的動機必然なる合合力にして、其の目的は人類

全體の發達を催進し、以て其の理想を現化するにあり。故に人道は其の起源よりして之を見れば、素個人の性格を外にして存在するものに非ずと雖も、而も一び人道として存在したる以上は、其の成立の目的を遂げんが爲に、個人に對して絶對の制裁力を有するに至る。之を喻は、猶個人の意志の一致より成りたる法則が一度び國家の意志となれば、翻て個人に對して絶對の權力を有するが如し。已に人道は人類全體の發達を目的とするを以て、個々人の生活に對しては極めて冷淡なるを免れず、彼れは偏愛する所無し、唯己に順なるものを福するのみ。

人類が先天的に稟有せる進歩的動機が社會の中に顯はれたる時は之を人道といひ、個人の中に顯はれたる時は之を性格といふ。換言すれば、性格は特殊なる方處歲時の下に制限せられたる人道なり、故に性格と人道との關係は尙個體の種族に於けるが如し。個體が種族の生存に效力ある限に於て、自己生存の價値を有するが如く、性格も亦人道の發達に裨益ある限に於て、自己の幸榮を全うするを得べし。若し性格にして一朝人道の利福に衝突し、若くは背反したる時は、忽ち自家覆滅の禍を免れざるなり。運命なる語を假りて之を表はさば、人類の進歩的動機は

根原的運命なりと言ふを得べく、其の一般の人道に顯はれたるものは大なる運命、其の個人の性格に顯はれたるものは小なる運命と言ふを得べし。而して小なる運命は恒に大なる運命に従はざるべからざるなり。

悲劇とは何ぞや。詮ずる處個人と世界との争に非ずや。個體と種族との闘に非ずや。個人性格の一般人道に對する反抗の歴史に非ずや。一言すれば、大小二個の運命の衝突に非ずや。然り、是二個の運命の衝突は悲劇の要件なり、而かも悲劇の能事爰に終れるに非ず。其の最終の目的は、個人性格の滅亡、若くは服従を描くことに因りて、世界的人道の神聖崇嚴にして犯すべからざる所以の理を明にするにあり。悲劇の價値快感亦實に爰に存する也。

哀むべき哉、人間の運命や。平生史乘戲曲を讀む毎に、予輩未だ曾て是嘆無くむばあらざるなり。古より豪邁卓犖の士、動もすれば世事の倖々に甘ずる能はず、眇たる孤軀を起して一代の風雲に背馳し、赤手以て廻瀾を翻倒せんと要す。世を亂り人を苦め、天に背き命を悟らず、傲然として古今を睥睨するや、意氣虹の如く、風稜鐵に似たり。一鶚榮枯處を代へ、非運潮の如く、其の身に迫るや、殘骸力盡き、孤劍再

ひ揮ひ難し。青春の榮華永く去りて敗餘の意氣而かも少しも衰へず昂然天地に俯仰し、從容自若として突て運命の犠牲に就く。何ぞ其の精神の高邁にして其の心事の落々たるや、英雄の末路誠に丈夫をして號泣せしむるに足る。而かも予輩は斯の如き慘憺たる悲劇に接する毎に自ら顧みて悚然として畏るゝ所あり。吾人人生を支配する道義的制裁は、遂に吾人が一毫の瀆累を容さず、千古萬秋毅然として不拔なるものあるを觀て、轉た人道の崇大無限にして、個々人生の如何に憐むべきかを痛覺せずむばあらざる也。昔希臘人は運命を以て嫉妬の勢力となせり、是を以て彼等の禍福は常に流星の如く外より來る。エデプスやアドラストスや、皆是の盲目なる嫉妬力の犠牲に過ぎざりき、斯の如きは悲劇の眞意を得たるものに非ず、荒誕無稽寧ろ笑ふべき也。若し夫れソレンスタイン、マクベスに至ては運命は大に其の面目を異にせり。彼等は各々其の特殊の性格を持して特殊の方處時代に立ち、強健なる自由意志を以て其の爲さんと欲せし所を爲しゝなり。彼等の事、其の志に違ひしは、彼等自ら之を招きし也。予輩は、彼等の運命は、彼等の性格と人道との必然なる關係に外ならざるを見、更に世界に於ける悠遠なる道義的制

裁の存在を想へば、轉た茫々無限の感慨を忍ぶ能はざるなり。是を以て予輩は常に謂ふ、人をして最も深大なる道義的觀念を感銘せしむるものは、世實に悲劇に若く者無しと。

蓋し悲劇に要する所のもの凡そ三あり。其の勇者の英邁非凡なる其の一なり。其の性格をして人道に背かしむる其の二なり。人道最後の勝利を明にする其の三なり。要は運命の存在と全能とを表白するに在り。想ふに讀者をして深痛なる同感を興さしむるは、其の人物も亦異常の才器を顯はさざるべからず。況して天下の氣運に反抗して昂然相下らず、望失はれ志破れて尙驚かず、一膽斗の如く、身死に瀕して猶其の傲岸を失はず、冷然笑を含みて運命を嘲るの膽勇に至ては、決して尋常一様の人物に望むべからず。ソクラテス、ナポレオン、ワレンスタインの如きは實に是種の人物なり。讀者試に思へ、ヴォルテールの『モハメット』に於て、バルミラが死に臨みて『世は暴君の世界なり』と叫びしは、ジュリアン帝が『ガリエール汝は勝てり』と呼ばはりしに比して、如何に遙に悲劇的なりとするや。悲劇的人物は必ずしもヘラクレスの如く、其の軀軀の剛大なるを要せず、只ニオベの如く、高尚なる

氣品と不屈なる精神を要するのみ。見よ、テベスのニオベを。渠女は織約蒲柳の一女性のみ而かもラオコーンの恐るべき煩悶に比して、如何に遙に沈痛悲壯なる悲劇的感情を吾人に與ふるや。渠女は七人の子の母なり。無慈悲なるアポロ神、アルテミス神の残酷なる復讐初まるや、渠女は避くべからざる運命の前に毅然として臆する所無く立ちたりき。其子の殺されたるものは渠女の脚下に横はり、傷けるものは踏躑として渠女の膝を攀づ。吁、暴神の來撃に面して敢て憐を乞はず、敢て救を求めず、限りなき哀悼の中に高雄の氣韻を堪へ、端然幼兒を抱て立てるニオベの心事の如何に悲劇的なりとするや。人は無限に小なり、而かも運命に抗死すること、に於て無限に大なる事を得べし。彼れは死生を賭して運命と其の權力を争ひたればなり。ワレン、スタイン、ナボレ、オン、ソクラテス、將たニオベは實に、限なく大なる人に非ずや。限りなく小なるの人は、常に限りなく大なる人を觀んことを樂む、彼れは其の中に自己の理想を認むればなり。

次に悲劇的人物は、不幸ならざるべからず、而して其不幸は人道と其性格との關係より必然に生まれたる不幸ならざるべからず。蓋し日常平板の生活は以て人

道の存在を示すに足らず。抑も是の無事なる社會は其の根柢に於て如何に幽深なる意義を含めるか、表面平和の外觀は、如何に裏面鬭争の結果なるか、社會の中に生活する吾れ人は如何に恐るべき地盤の上に立てるか、是れ悲劇の主として表白せんとする所なり。是を以て悲劇的人物は其の非凡なる資性と特質とを以て人道の全能に反抗し、展轉煩悶して百方其の非望を到達せんことを務めざるべからず、而して人道の勢力の無限にして犯すべからざる事を示さんが爲めに其の反抗は成るべく強大ならむを要す。而して是等は凡て人物性格の必然なる結果なる事、猶梅樹は梅子の必然なる所生なるが如くならざるべからず。夫のエデブスが示せるは運命に非ずして實は偶然のみ。是を以て沙翁がマクベスの運命は、既に其の鬱勃たる有爲の氣象に胚胎し、妄に自ら王者の資あるを信じ、偶々戰勝の餘威に乗じて覬覦を遂げんとしたるに成りしなり。ゲーテがタンナーの悲劇的なるは自己の英才を孤負し、妄想自ら媚び、遂に現實の知識を遺却したるに基きしなり。シルレル其のワレン、スタインをして言はしめて曰く

Recht stets behält das Schicksal, denn das Herz

uns ist sein gebietrischer Vollzieher. —

Der Zug des Herzens ist des Schicksals Stimme

In deiner Brust sind deines Schicksals Sterne.

(Wallenstein's Tod, I, 7)

運命は恒に其の目的を成就す。

吾等の胸は彼の執行者なればなり。

心の赴く所に運命の聲なり。

汝の胸に運命の星あり。(ワレンシュタインの死、第一齣、第七場)

洵に知言と謂ふべし、古ヘラクリトが「性格は人間の悪魔なり」と言ひ、ゲーテが運命は勇者の内性なりと言ひしも、全く是意に外ならず。

斯の如く、個人的性格は悲劇の根本たりと雖も、而かも其の目的には非ず。悲劇の目的は性格によりて運命を顯はすにあり、是の世界を支配する所の人道、即ち道義的制裁の神聖にして犯すべからざる所以の理を表明するにあり。是に於てか性格は常に人道に反抗することを要するのみならず、敗衄して自ら運命の犠牲となり、以て人道最終の全勝を示さざるべからず。悲劇の悲劇たるを得る所以の

の實は爰に存す。

運命の發表者として悲劇は二様の快感を吾人に與ふるを得べし。一は運命を敵として戦へる悲劇的勇者の偉大なる事業より來り、一は不拔なる運命其物の認識より來る。吾人悲劇を讀みて、身を以て知らず、劇中の勇者と合體し、共に憂へ、苦み、悩み、戦ふ時に當りては、吾人が本然の能力を瀝盡し、餘蘊なく之を現化するを得るを以て、吾人の内心に於て沈痛なる満足を感じずべし。而かもあらゆる煩悶は徒勞に屬し、神衰へ力竭き、敗軀に杖て、仰で崇大無邊曠劫不易なる運命の存在を認識する時は、激雷雨其の跡を收め、悠悠蒼天茫茫無際、一路の春風我を誘て、其の行く處を知らざるが如く、望生き氣復し、俄に人生盈尺の繫縛を解脱して、眞如常住の世界に再生したるの思あり。ファウストが人世の汚濁を離れ天上の光に眞理の面を眺むと夢みし後。

In jenem selgen Augenblicke

Ich fühlte mich so klein, so gross.

(Faust I-Nacht)

彼の幸なる一刹那

吾は我が身を最小き又最大きと感じぬ。(ファウスト、第一、夜、の場)

と云へりしも亦是の境地を指せしものに非ざるか。是れ文學が吾人に與へ得る絶頂の快樂なり、宜なる哉シヨベンハウエルが悲劇を以て最高の詩なりと云ひしや。

然れどもシヨ氏が悲劇に對する意見の予輩と同じからざるものあり、是れ讀者の一顧を煩はすに足る。氏曰く、

悲劇の目的は人生の怖るべき方面を示すにあり。即ち名状すべからざる人道の苦惱罪惡の勝利嘲けるが如き偶然の支配正義と無罪との救ひ無き没落を吾人の前に明かにするにあり。即ち是れ是の世界實在の真相を示すものなり。(意志及寫象としての世界、第三卷、アラトの理想、第五十二節)

悲劇は人生の怖るべき一面を顯はすものなることは洵に氏の言の如し。而も其の目的は氏が説ける如く偶然の支配罪惡の勝利を示すものに非ずして、却て永遠なる道義的制裁の存在を明かにし、正義最終の勝利を示す者なり。是れ予輩が悲劇を以て人生最高の徳義を發揮するものと謂ひし所以なり。是の點に於て氏

は未だ全く悲劇を解せざりしものゝ如し。

讀者は、上來述べ來りたる所によりて畧々運命と悲劇との關係を知了せられしなるべし。之を要するに唯一不易の精神は宇宙の終始を貫徹す。或は自然界にありて種族維持の原理となり、或は人間界にありて人類發達の主義となる所謂人道なるものは是れなり。性格は人道の個人に顯はれたる者なり。予輩は先に人道を大なる運命と言ひ、性格を小なる運命と名けしが、今主客の差別に従ひて、前者を外部、後者を内部の運命と見るを得べし。悲劇の目的は内部の運命の反抗と没落とによりて、是の外部の運命の不拔なることを示すにあり。今の人多くは、單に個人的性格を描くを以て戯曲の能事了れりと思惟し、幽遠深大なる悲劇の精神に至ては多く意を用ひず。故に其の作多くは散漫腐爛に流れ、捕捉する所を知らず、嘆ずべき也。夫の沙翁を讀みて、單に其の性格にのみ住心し、其の間に磅礴せる悲劇的運命を認むる能はざるものは之れ徒に其の字を讀みて其の意を解する能はざる輩のみ。詩人シルレルをして『大なる哉リチャード三世』と叫ばしめしものは實に是の運命に非ずや。ハルナック曾てファウストを評して曰く、是れゲーテ自らより

も大なりと。悲劇家は自己より大なるものを造らざるべからざる也。

終に臨て一言すべきとあり。我友姉崎正治氏曾て『印度戯曲の特質』(帝國文)を論じ、中に日本の戯曲に眞の悲劇的勇者無きを慨し、明治の文學者が徒に男女の愛情に醒醒し、未だ曾て一人の南洲の如き偉人物の悲劇的最後の題目とする者無きを浩嘆せり。予輩は氏が過去日本戯曲に悲劇的勇者無しとの斷言に對しては、多少の異論なき能はずと雖も、而かも我が作劇家が老南洲の如き人物を描くを欲せざるは、予輩の氏と共に慨嘆する所なり。我が邦歴史、英雄多しと雖も、南洲の如き悲劇的生活を爲したる者は甚だ少し。想ふに南洲は高邁磊落の士、一たび志を廟堂に得ざるや、冠を掛けて故山に躬耕し、誤て知己青年の擁戴する所となるや、情義之を捨つるに忍びず、忠烈の高士甘じて叛賊の汚名を受け、『笑て殘骸を擲て數弟子に附し』當世紛々の毀譽を排して、喟然として千年の知己を俯仰す、何ぞ其の事蹟の悲劇的なるや。作劇家の好題目、何物か是に如かむや。今日の文人往々にして指を爰に染むるもの無きに非ずと雖も、是の老雄千歳の肝膽を照すもの絶て無し。吁我が作劇家は何故に是の好題目を捉へざるや。

(廿八年十一月)

歴史的精神

現今の我學術界に於ける歴史的精神の缺乏

十九世紀の思想界に於て最も貴むべきもの、一は歴史の觀念なり。

天地間の萬物は凡て活ける發達を爲しつゝあるものなり。之を個々體に見るも、之を全種族に徴するも、將た又之を美術、文學、宗教の過去の經歷に求むるも、一貫不斷の歴史的發展は耿々として覆ふべからず。夫の散たり、漫たり、亂たるもの、起伏し、浮沈し、離合して、著落趨舍の跡、雜然として一ならずと雖も、所詮全體の精神に一毫の累を爲すを得ず。是の偉大なる歴史的發展を補助し、裨益するの限に於て、萬物其の存在の價值と意義とを享くべき也。夫の歴史に背いて進まんと欲するものは猶運命に忤て戦はんとする希臘人の如し、唯々其の犠牲たるに終らむのみ。歴史的發展を外にして、世間又安ぞ獨創なるものあらむや。予輩が歴史的研究を唱道する所以のもの、洵に明々白々たるに非ずや。

吾友の一人曾て古典研究の必要を論じて曰く、文學、哲學を問はず、我邦現時の思

想界は趨新の外に、温古を知らず、些々たる教科書的の講究思辯を以て、足れりとなす。是の渦中にある一般の人は、是の皮相膚淺の状態を以て、自ら進歩的趨新的なりと信ずるもの、如しと雖も、教科書は自己の關係的位置を悟了せしむるものに非ず。自己が古人に對する位置如何、將來如何の方向に進むべきやの問題は、古典の講究に非ず、むば到底爲し能はざる也と。是れ全く予輩の意を得たるもの也。

學に進むは猶道を行くが如し。方處歲時に於ける自己の關係的位置を知るに非ず、むば即ち歴史的發達の方向結果を知了するに非ず、むば自ら自己研鑽の價値を知ることを能はず。吾人は如何にして自ら安じて大思想界の進路に、多少の貢獻を作したるを信じ得べきや。薄志弱行の少年往々學に倦む、即ち師を退け書を抛ち、偏に自家針頭大の頭顱を苦しめて、一朝古今千載の聖哲を驚倒せむことを僥倖す。何ぞ自ら重ぜざるの甚だしきや。彼等は猶暗中に摸捉するが如し、たまぐ鼻うごめかして獨創と自稱するものありとするも、古人の陳套を反覆するに過ぎざらむのみ。吁、學は天下の至難なるもの、如何ぞ薄志弱行の徒の怪我にも成功すべき謂れあらむや。よしや之を言ふもの、卒直無謀なる、寧ろ憫むべしとするも、

而かも予輩は、彼等の大言に傾聽し、拍手する醉興者流の世に、少からざるを見て、吾國學風百年の爲に、轉々感々の情に堪えざるなり。東洋の新美學を作れよとは、如何にも尤らしき、又尤もなる語なり、而かも其の旨趣とする所の如何に幼稚無邪氣なるかは、予輩已に前號に之を一言せり。遮莫予輩は、常に放言壯語の爲に、容易く挑撥せらるゝを見て、社會の品位に於て、缺くる所あるを惜まざるを得ず。試に思へ、古書を斥けて死書となし、古文を排して死文なりとせるものが、如何にして東西思想の淵源を探りて、勸解裁斷の途に出づるを得べきぞ。例を近きに取りらむに、細々ながらも今日まで連綿たる歴史的發達を爲し來れる本邦の美術に對する現今美術の關係的位置は、彼等が所謂死書死文を外にして、如何にして明かにするを得べきか。更に手近き例を取らむに、天平美術の成立を助けし推古、天智二朝の美術は、印度式と如何の關係ありしや。之より溯りて、我邦美術の真相を明かにせむと欲せば、勢ひ三韓、北朝、天竺より、アシリア、バビロニア、希臘に入らざるべからざるに非ずや。然らば則ち法隆寺の十一面觀音像を悟了せんと欲せば、ミロン、フデアス、アルカメネスの知識を要するに非ずや。彼等が所謂日本の新美學なるもの

と雖も、所詮幾千年の歴史によりて涵養せられたる我邦人の審美的意識に基くと勿論なるべし。然らば即ち彼等が排斥する所の「死書死文」を外にしては、彼等自身の目的すらも尙且達するを得ざるに非ずや。彼等が言論の無責任なる概ね是の類なり。

吁學に志すものは堅強なる意志と剛毅なる忍耐と博大なる精神とを以て事に従はざるべからず。漫に速成を望みて、獨創々々と叫ぶものは是れ學界の外道のみ。歐洲哲學の歴史を通じてプラトンの面影を逸する事なく、クァンティン、ベッスの記憶はキルヘルム三世の胸に活けるかを見、はた又ラマルチンとユイゴとは已にラフォンテーヌとラシヌとの詩中に胚胎し、ボシエとヴォルテールとの懐に養はれしを看破するものに非ずむば、如何ぞ茫々たる學界に棹して彼岸に達するを得むや。

然りと雖も、予輩は我邦の青年間に一も歴史的、思想的なしと即断せむと欲するものに非ず、只其の概して缺乏せるを嘆ずるのみ。一派の青年が常に其の歴史的、眼孔を以て思想界の大勢を觀察せんと務むるは、予輩の大に賛成する所なりと雖も

而かも其の學識の足らざる爲か、材料の足らざる爲か、兎に角往々杜撰臆説に陥るは頗る惜むべしとなす。例せば自己一部のグロインを読み、亦二三のグロインを言ふ人あれば、彼等は直にグロイン哲學流行など、素破抜き、而して萬一其言にして歐洲哲學界に聞えたらむ時、我哲學者の如何ばかり迷惑すべきかを察せず、或は二三禪學雜誌の發刊を見、二三知名の士の之を談ずるを見ては、直に捉て禪學流行と唱道し、種々の牽強附會の説を附して、我が思想界に於ける必然なる歴史的發達の一契點なるを證せんと要す、而かも國民的思想の推移の更に深遠宏大なる根拠を有することを覺らざるなり。斯くの如きは、所詮歴史的觀念の必要の未だ十分

に我が思想界に認められざる弊に坐する無きを得んや。吁憂ふべき哉、今日の學風や。世間若し予輩を大言自ら高く標置すと爲すものあらば、請ふ先づ自家面上の蠅を拂ひ來れ。予輩は顧みて背後に照膽の鏡あるを忘れずと雖も、而かも倅々自負の徒に遇へば、睫を交へて顧みて他を言ふことを忍ぶ能はざるなり。

文學研究の好題目

發達論と共に近代思想の新傾向とも見るべき比較研究的精神は體物として歐洲學者の間に興起せり。我が邦文學者が文學研究の好題目一にして足らざるなり。

漫に異邦文學に就て考索比擬するは比較的研究所の精神に非ず。文化、發達の歴史と關聯して必然の徑行を抉摘し、彼此の差別に就て、一様同致の關係を表示せざるべからず。三と六と八とは相異なるも、三と六と四と八と相等しき所以の理を明にせざるべからず。比較的研究は世界歴史の心髓を發揚するものなり。今夫れ之を人種に分ち、之を風土に照し、之を歳時に繋げ、各國文學の特質を表明するは、甚だ趣味あることに非ずや。

更に之を哲學的思索の發達に照らし、宗教的意識の推移に徴し、美術、詩歌の上より、風俗習慣の上より、文學言語の上より、各國民族の特性に研究し、到らんは頗る趣味あることに非ずや。

同一アリアン族の祖先の言語は近くして、印度、イラニク、スラボニク、チオートニク、グレコイタリク、ゲルチック等となり、遠くして梵語、ゼンド語、羅何語、索遜語等となり、更に遠くして英、佛、魯、以、西、波等の諸語となりたるは何が故ぞ。是れ素より言語學上の大問題なるべし。而かも之を吠陀、ホメル、希伯來、波斯の古文學中、中央亞細亞の諸舊記等に鑑みて、國民文化の變遷に考へ到らば、或は意外の結果を生ずるやも知るべからず。之れ亦頗る趣味あることに非ずや。

ザイゲは民族の天性を尤も飾り無く發揚したるものなり。弘く各國の傳説、民族を參照し、翻て之を人種學の假設に照鑑せば、爰に亦意外の結果を得る無きを保せず。是れ亦頗る趣味あることに非ずや。

同じく原的アリアン族の子孫なり、吠陀とホメルとは何が故にしかく差違ありや。吠檀達以下の印度哲學と、ターレス以下の希臘哲學とは何が故にしかく差違ありや。印度人は何が故にしかく厭世的にして、希臘人は何が故にしかく調和的なりしや。チユリアンなる支那人は之に反して何が故にしかく樂天的實際的なりしや。將た又大乘佛教は支那、日本に傳はりて如何の影響を國民性情の上に

及ぼせしや。希臘美術は如何にして發達し、印度に入りて如何に變化し、更に支那三韓、日本に入りて如何に變形したりしや。是れ亦頗る趣味ある問題に非ずや。宗教無き國民として支那、日本は如何なる精神的生活を營みしや。古事記の神話と吠陀、ホメールの神話と、神記との比較は如何なることを吾人に教ゆるものなるか。是れ亦頗る趣味深き問題には非るか。

かくの如く *random* に列擧し來れば數限りも無きことなり。然れども是れ皆國民性情の上に根柢を有せざるもの無く、隨て各國文學の精神發達の上に密接の關係を有するものに非るは無し。我か邦文學者が人類歴史の表面に立ちて研究し得べき題目、夫れ斯の如く豊富なり、務めざるべけんや。唯之を爲すには博大な精神と不拔なる決心と、堅強なる忍耐とを要す。但し世に死書死文なきことを悟らざるべからず。歴史を生物として見ざるべからず。異邦の知識を惡むべからず。自己一人の主觀的満足は何の價値も無きことを悟らざるべからず。あらゆる知識意見は、世界人類の歴史に關係して初めて其の價値を有することを覺悟せざるべからず。

(廿八年十一月)

歴史的研究とは何ぞや

(其二)

發達論の進歩と共に日にまし榮え來りたる歴史的研究は、十九世紀思潮を代表するの旗幟なり。過去の影響勢力の遺傳、時間の連續、三世の因縁を認むるものは、同時に歴史的精神が究學の第一義なるを認識すべし、是れ吾等が今更喋々を要せざる所なり。されば吾等は今日の文學批評家が漸く歴史に對して特別の注意を爲すの風あるを見、學術進歩の一徵候として之を歓迎する者なり。さりながら論語讀みは必ずしも論語知りに非ざるが如く、吾等は歴史を口に、する幾何人が眞に歴史的研究の意義價値を知れるかを疑ふ。今日の學者批評家の中、一事を論ずる毎に其の過去に於ける經歷を述べ、具に其の典故を比擬し、其の儀例を考索するものは則ち是れあり。前人の遺言を引索し、殘型を考證し、巧に斷翰零墨を補綴して揣摩臆測を逞ふするものは則ち是れあり。而かも彼等の幾何人が果して歴史的發達の精神を摸捉し來りて、三世不解の因縁に點睛し得たるものぞ。生命無き事

實の連續は幾千年を経るも歴史たる能はざると、猶兩國橋上幾萬の行人が終日遂に一戯曲を作す能はざるが如し。徒に關係無き零碎の事物を列ねて、其の博識を衍ふものは、實に其の論證に向て何等の効果を奏せざるのみならず、偶々自己の盲識不能を暴露するに終らむのみ。事物の間に必至の因縁を認むるものに非ざれば、形體の中に生命を認むる者に非ざれば、はた又連續の中に生長を認むるものに非ざれば、眞に歴史を解するものと謂ふべからざるなり。個々の事實は、歴史の精神を歸納し、歴史の精神は、纏て個々の事實を演繹す、是の全分の關係を包括し得て始めて圓融の歴史を味ひ得たりと謂ふべし。

或は謂ふ、歴史は人をして回顧せしめ、保守的ならしむと、之れ亦歴史を解せざるもの、言のみ。歴史は實に過去を説明するのみならず、又將來を指導するもの也。歴史の精神が過去に於て不斷に向上し來れるの道は、即ち吾人が未來に於て常住に進歩すべきの道なり。預言者の眼を以て歴史を讀むの覺悟無き者は、歴史の活用的半面を遺却したるものなり。吾等は以上の言を以て敢て歴史研究者の座右に呈す。

(廿九年二月)

(其二)

吾等は昨年以來、折に觸れ事に感じて、歴史的研究の必要を唱へしと一再に止まらず。之れ徒に説を求め異を樹てむが爲に、聊か吾學界近時の趨勢に慨する所ありてなりき。然るに世人の容易く人の言を容れざるや、故らに是を曲解し、往々却て吾等に向て伴々の辯を弄するものあるは、吾等の恨とする所なり。故に茲に歴史的研究の精神を紹述して更に讀者の注意を請はむと欲す。蓋し人類の思想は其の時と處とに隨ひ變遷推移するものなれども、而かも偶然にして然るに非ず。一見したるのみにては、自依獨存、他と何等の關係無きが如く見ゆる事實も、具に其の由來する所を尋究すれば、悉く皆歴史的發展の自然の徑行に依傍せざるは無し。往けるものは來るものを提起し、後なるものは先なるものに影響せられ、三世相互の因縁を作爲して、茲に初めて歴史の潮流を經緯するに至る。故に今日の學問は如何に進歩し、如何に十九世紀特有の新局面を有せりとするも、過去數百年の歴史的發展に繼續せる一契點たるに過ぎず。故に現今學術の真相を會得し、

且將來進歩の指鍼を得むと欲せば古より今に至るまでの必然なる思想の歴史的発展を知悉せむことを要するは言ふまでも無きことなるべし。但し是れ最も進歩せる現代若くは未來に來るべき思想は單に過去の歴史のみによりて演繹し若くは推渡し得べしと謂ふには非ず。最も進歩せる知識は時勢人文の進歩につれて日に新たなる物質的及び精神の材料の上に日々に新たに建立せらるべきは素より論無きとなれども斯く成り行ける發達の針路はた精神を會得せむには主として歴史的研究に依頼せざるべからざる也。若し夫れ現今の思想によりて歴史を解釋せむかばた又之に反して歴史によりて現今の思想を是正し改造すべきか。是れ從來歐羅巴の學者間に數々争はれし疑問なれども要するに楯の一面を看取せるの議論に過ぎず。預め現代の知識を有せる人は容易に歴史を會心するを得べく既に歴史に曉通せば更に翻て其の思想の正誤を鑑識するの明を加へ將來の進路に少からざる光明を抛つべし。吾等は創見と歴史とは或人の思惟するが如く相容れざるものと思惟せず寧ろ唇齒輔車の關係を有するものと謂はん。歴史的研究とは何ぞやと云へる疑問に對する吾等の意見は概略右の通り也。然らば

則ち如何にして歴史を研究すべきか。

凡そ歴史研究の方法に三あり。研究者が自家の學說主義を標準として他を批判するもの其の一なり。研究者自身が何等の主義を有するも一切之を度外に付し純ばら標準に就て研究せんとする學說の中に求め歴史の範圍内に於て其推論發展の正誤趨勢を討尋するもの其の二なり。預め事物に就て純理的原理を抱持し是の原理によりて歴史的發展の必然なる理由を説明せんとするもの其の三なり。吾人は是の三者の中何れを取るべきか。第一の法は今日の青年學者が好みて用ふる所のものなり。之れ一家の私評としては依て以て論者の懷抱を發表するに足るべきも動もすれば己を樹て他を排せむとするの弊に流れ易く隨て歴史上の事實に就て忠實なる敘述を缺き易し。加之隨て歴史上の事物は主として其の當年の思想の程度に關して其の價値と意義とを有するものなるを以て吾人の立脚地より之を批判するは寧ろ歴史研究の旨趣に協はずと謂ふべし。歴史は吾人が現在の意識に達する迄閱歷し來れる失敗頓挫の記述なり。吾人は之によりて誠められ得べきも教へられ得べきものにあらず。第三法は自家が純正哲學の

原理を承認せざる讀者の前には、一個の空論に過ぎざるべし。ヘーゲルが哲學の如きは即ち是れのみ。第一、第三共に取るに足らず、歴史研究者として吾人の擇ぶべきは夫れ第二の法乎。自家を没し私見を離るゝに非ずむば、全き歴史は遂に解し得べからざる也。夫の一斑の事實を採り來り、自家の成心に準りて之を批判するものは、是れ未だ歴史を知らざるもののみ。歴史の摯實なる研究は自家を立するの代りに、他を申することを務めざるべからず。

(廿九年三月)

歴史畫と歴史小説

現今の繪畫に歴史畫の缺乏せる如く、現今の小説界は歴史小説に貧し、是れ何が爲ぞや。想ふに當今の、人、新奇の想を求むるに急にして、回顧の精神を挑揚するの違無きに依る乎。人は現在に於てのみ生活し得るものに非ず。僅々五十の人生は過去と未來の二つの無限に挟まれたる樞花一朝の榮枯に過ぎずとするも、彼れは尙三世に涉りて其の生命を有す、即ち歴史は吾人の幼時を語るものなり。人生半面の慰藉は常に歴史の回顧より來る。是を以て吾人は吾人の爲に人生の感情

と希望とを洩發する詩人の口より、吾人の過去談を耳にせむことを渴望す。歴史に現はれたる國民的性格は吾人の根本的自我を造るものなり。吾人は詩人、美術家が美はしき形骸の上に結象したる吾人が胸底の自我を自己以外に見むこと樂む。

(廿九年三月)